
アリスな話！

遊元 もえ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスな話！

【Nコード】

N1204A

【作者名】

遊元 もえ

【あらすじ】

アリスは普通の男子高校生。ある日、不思議な空間へと迷い込む。そのせいで、大嫌いなホモに囲まれることになった。どうにか元の世界に戻れたのに、気付けばまたあの空間にいて！？アリスな世界！の続編です。あちらの世界中心に進んで行く予定。詳しくはアリスな世界！を読んでください。

第1話 感動できな再会！？（前書き）

アリスな世界！の続編となっています。ボーイズラブとなっておりますので苦手な方はご注意ください！

第1話 感動できな再会！？

本日、アリスの通う学校は文化祭が行なわれる。

「アリスちゃん！頑張れよ！」

「アリスちゃん！俺も行くからな！」

あの事件があつてからその後、アリスは普通に学校生活を送っていた。またシンクロするのでは？と思うこともあったけど、今のところはそんな心配もなさそうだし。そう毎回毎回、シンクロされても困るって話だし。

そして、そんなことを考えながら日々は過ぎ。文化祭当日。例の女装喫茶の本番なのである。朝からヤジをとばされまくっているアリスは……。むろん、不機嫌である。

しかし、文化祭の開始時間は待つてくれない。そろそろ着替えて用意をしなければならない。なんせ。アリスはクラスの目玉なのだから。そう思いながら、家庭科室の一角を陣取って作った控え室にこもってはや20分……。

「ア・リ・ス！どうした？機嫌悪そうじゃん！？」

みんな着替えていなくなってしまった控え室で盛大にため息をつくアリスの背中をたたくのは、悪友の裕馬である。

「機嫌だあ？最悪に決まってるだろ！」

一人大道具に逃げた裕馬を恨めしく振り返りながら、アリスは言った。

「そんな顔してちゃ、お客に逃げられるぜ」

完璧に……。ちゃかしに来てるだろう……。

そんな裕馬をさつさと控え室から追い出す。

「はあ……。やってらんね」

今までは、衣装合わせだ何だつてアリスの衣装を着たとしても見るのは気心知れたクラスメートだけだった。それが。今日は外部の

人間やら他の学年の奴やらと、不特定多数の人間にこの格好をお披露目することとなるのだ……。かといって、いつまでも控え室に
いるわけにはいかない。アリスは覚悟を決めて、衣装に袖を通すの
であつた。

衣装はあの日と同じ、“不思議の国のアリス”をモチーフにした
ものである。長いウェーブのゆるくかった金髪と、青いワンピース。
ス……。どこまでも乙女チックな……。

アリスは鏡の前で衣装を再確認した後、家庭科室を出て自分のク
ラスに向かうのだった……。

「うゝ……。」

人のいない廊下を誰にも会いませんように、と祈りながら歩くア
リス。知らず、緊張からか変な声が出る。

「やべえ。緊張してきた……。」

心臓の音が早くなるのを感じながら、アリスは歩みを止め、目を
つぶって深呼吸をし気持ちを落ち着けようとした。大きく、息を吸
う。

「わー！！」

「ぎゃあー！！？」

ただでさえ、心臓がバクバクいつているところに、後ろから脅か
される。

「つか、心臓に悪すぎ。」

「だっ……。！？何すんだ！！？」

冗談が今は通じねーんだよ！こっちは！

そんな表情で振り返った、その先にいたのは……。

「どっ……。どどど！？」

さーっと、アリスは全身の血の気が引くのを感じた。

何で！？

どうして!?

だって・・・!!!

お前は・・・!!!

「ハロー お久しぶり!アリス姫」

「リ・・・リアン~~~~~!??」

やっと言えた言葉がそれ。

いやはや、またしても嵐の予感・・・。

～続く～

第1話 感動できな再会！？（後書き）

次あたりから、カップリングも公表していきます。誰が誰とくつつ
くのか、当ててみてくださいね（＾－＾）

第2話 クイーンの事情（前書き）

ボーイズラブとなっております。苦手な方はご遠慮ください。<b
r>またまたシンクロに巻き込まれたアリス。今度はいったいどう
なるのか・・・？

第2話 クイーン的事情

「あら、覚えててくれたの？嬉しいねえ」

相変わらず、どこまでもおちゃらけたこの男。

「ちょ！？ちよつと待て！！何でリアンがここにいるんだよ！！？」

アリスなんて、こんなにいいリアクションしてくれてるのに。

ていうか、パニック？

「そつれがさ、まあたシンクロしちゃって！」

あはははは！と、まるで人事のように言う（リアンからしてみればきつと人事なのだろう）。

そんなリアンの後ろから。

びよいゝん

抱きっ！

アリスに抱きつき、すりすりと頬をすりつけるのは……。

「バ・・・バニー・・・？」

アリスに名前を呼んでもらい、バニーは嬉しそうに目を輝かせる。

そして、今以上に、ひっしとアリスにくっついてくる。

あ、ちよつと頭痛が・・・。

なんて、とりあえず。バニーはそのままにしておいて。

「ていうか！シンクロって・・・！どういうことだよ！？」

「クイーンに聞いてくれる？」

のれんに腕押し。

どこまでも我関せずなリアンに。最近ちよつとキレやすいお年頃なアリス君は。

「てめ！ちやかしてんじゃねー！シンクロ解いたばっかなのに！ど
うなって・・・！！」

アリスが声を荒げたその瞬間。

なんか、抱きつき具合がきつくなつたような・・・。

そろりと、バニーのほうへ目をやると・・・。

「うつ・・・」

うつるるんつとした瞳がそこに・・・。

うつ。

怒るとウサギは嬉々としてくつつついてくるし、リアンはおちゃらけてて話にならないし。状況は把握できないし。

いったい、どいなんてんだよ!!

「!!こんなところにいやがったのか!?このクソチビ!!」

頭がパニックなアリスの後方から、聞いたことのある声が響く。
その声の主は。

「あ~~~~クイーン!!」

麗しのクイーン様であった。クイーンは、ずかずかとアリスたちのほうまでやって来ると、むんずとバニーを持ち上げた。

そのクイーンに、アリスが声をあげる。

「どうなってるんだよ!クイーン!?またシンクロして!!」

そして、ここぞとばかりにクイーンに詰め寄る。

だが、クイーンはまったく臆せず。一瞬、アリスに驚き、次の瞬間には笑みを浮かべ

「やあ、アリス。また美しくなってる」

そう言つと、アリスの腕を引き、アリスの頬に軽くキスをした。

あ・・・悪夢だ・・・!!

そう、アリスは心の中で叫ぶのであった。

まあ、こんな経験は人生に一回あれば十分であつて。その点、アリスは得してると言えば得をしているのだが。

そんなこんなで、再び訪れたこの状況に、アリスがへたっている。

「あゝ！クイーンや！お？アリスもおるで」

「まあったシンクロしたんか？」

どこからともなく、愉快な双子の声が・・・

「ああ、ちよつとな」

それに、クイーンが言葉を濁して返事をする。

そしていつの間にか。見渡せば続々と集まって来る住人達。

「まあまあ、みなさん。立っていないで座って紅茶でもいいかがですか？」

アリスの心のオアシス、紅茶のお兄さんことマスターがそう言つてナプキンを一振りすると。そこには、テーブルと椅子、紅茶道具一式が・・・。

実はマジシャンか？などともいいことを思うアリス。

「準備がいいな。マスターは」

そう言つて椅子に腰かけているのは、ガーデンである。

「みなさんとお茶が飲みたかったですよ。ガーデンさん」

ぶっきらぼうなガーデンにも、マスターは優しく微笑んでいる。

「おやおや、全員集合か？」

のほほんとそう言うのは、もちろんリアンである。

そして。廊下のだ真ん中に、のほほんと座ってお茶を始める人達。アリスは深いため息をつく、リアンの隣に座るのであった・・・。

「今日の紅茶はオレンジ・ペコです」

そう言いながら、ポットから紅茶をくんでみんなに紅茶を配るマスター。しかし・・・あきらかにポットの容量と、出てくる紅茶の量がおかしいと感じる心には・・・フタをしとこうかな！と半ば投げやりなアリス。

投げやりにもなるってなあ。人気のない廊下のだ真ん中で、金髪少女と美形の男性陣。そして、可愛い美幼児。どんな集団だ。オイ。

「今回のシンクロのことだが」

紅茶が配り終えられ、一息ついて。クイーンはしゃべり始めた。アリスは緊張して、クイーンのほうを見る。

「全部、このバニーがやった」

ひょいっとバニーの首根っこをつかんで持ち上げながら、クイーンは言った。当のバニーはというと、出されたクッキーをむしゃむしゃ食べている。

『バニーが・・・？』

双子の声が重なる。

「そうだ」

クイーンは重々しくうなずく。それを受け、アリスはクイーンに質問をする。

「シンクロって、クイーン以外の奴でもできるものなのか？」

「ああ、アリスさんはシンクロについてよく知らないんですね？マスターがそう言うのと、その後をリアンが続けた。」

「シンクロっつーのは誰でもできるわけじゃないんだよ。一部の選ばれた者だけができる技」

「ようするに、僕達の世界では王家の血筋の方ですね」

なるほど。誰でもできるってわけじゃないんだな。なんて関心してみたり。

ん？てことは・・・。

「王家って・・・こと・・・は・・・」

アリスは、ゆっくりバニーへ向く。

「バニーは俺の息子だ」

しごく真面目な顔をして、クイーンが言った。

「ええええ！？マジで！？え？じゃあ、奥さんは！？ここにいないの！？」

そうである。よく考えれば、クイーンがこの世界のトップならば、側室だけでなく、正室がいてもおかしくはない。クイーンの息子が

バーンだということには驚いたが、まだ見ぬクイーンの奥さんも気になる。

「アリスさん、奥さんというか、女でないと子どもが産めないというのはあなた方の世界のことだけで、ここでは男でも子どもが産めます。・・・というか、ここには女という生き物は存在しません」
マスターは控えめにアリスに説明する。

「そうなの!？」

「いったい、この世界の繁殖メカニズムはどうなっているのか・・・。そんなことには、触れないほうがいいよね!とばかりに、アリスは次に気になっていることを問う。

「てことは・・・誰がクイーンの・・・妻(?)・・・?」

この場合、妻であっているのかはともかくとして。

その問いを受けて、全員がリアンのほうを向く。

「あらら」

本人は、いたってのんきな声を出している。

「リ・・・リリリ・・・!？」

「リアンだよ。アリス姫」

紅茶をすすりながら、リアンはさらりと言った。

「リアンが~~~~!？」

「ちよう、意外!!!」

まさか、クイーンとリアンがそんな仲だったなんて・・・!!何より、ホモネタの苦手なアリスの思考はストップ状態である。

「そういうのを差別と言うんだ。すべてをお前の常識でくくるんじゃない」

ガーデンに静かに言われて、アリスはぐつとつまる。

まあ、確かに。いろんな人が世の中にはいるし。しかも、ここは自分のいる世界とは違った世界なわけだから・・・。

そんな感じで悶々と考えていると。

「話がそれた。シンク口のことだが・・・解けない」

「・・・!？」

そのクイーンの言葉に、全員が顔をこわばらせるのだった・・・。

～続く～

第2話 クイーンの事情（後書き）

いかがでしたでしょうか。クイーン×リアンのカップリング。当たった方はいましたか？また感想などいただけると嬉しいです。これからよろしくお願いします！

第3話 シンクロを解け！（前書き）

ボーイズラブとなっておりますので、苦手な方はご注意ください
r > < b

第3話 シンクロを解け！

クイーンのその言葉に、全員が顔をこわばらせる。

「どういう・・・ことですか？」

しん、とする中で、マスターがそう切り出す。

「シンクロをかけた者にしか、シンクロは解けない」

クイーンは短くそう告げた。

「え？じゃあ、解けるやん」

そのクイーンの言葉に、能天気のアリスは答える。

だって、シンクロをかけたのが誰かわかって、しかも、ここにその本人がいるんだから。何の問題もなくね？

正味な話。アリスにとってはそんな話なわけで。

「そーや。そーや」

「解けるやないか」

そのアリスの発言に、ホワイトとブラックも口をそろえて何が問題あるんや。とつなげる。

その2人の台詞に。

眉間にしわを寄せながら。

クイーンは。盛大にため息をついた。

「ホワイト・・・ブラック・・・。アリスはいいとしても。お前たちはバニーがなぜシンクロをかけたのかわからないのか？」

心底。いいかげんにしろよ。というオーラ全開なクイーン様。もちろん。

双子がそんなことを意に介すはずもないが。

「クイーン、しわが増えるぞ」

横からちゃちゃを入れるガーデンをちらりと見たあと、すぐにホワイトとブラックに向き直る。

「え？何でて。アリスに会いたいからやろ？」

そんなあたりまえやん。知つとるわあ。と双子。

そこまでわかっていて、何でこの話の流れがわかんないかね〜・
と、人知れずリアンがばやく。

とりあえず、そんなリアンは置いて。

「俺に？」

アリスはクイーンを向く。

「そうだ」

「ようするに……」

クイーンとリアンは。口をそろえて、続きを話した。

『ベタボレ』

ここにいと心臓に悪い。何回、倒れそうになったことが。つか、
いつか心臓止まるね。

「だから、アリスに会いたくてシンクロしたのに、わざわざアリス
を帰すようなこと、すると思う？」

「まず、しないな」

ガーデンがきっぱり言つてのける。

ここにきて、ようやくつながった話。

「じゃ……じゃあ、シンクロは元に戻らないのかよ!？」

ようやく、ことを理解できたアリスは。

身を乗り出してあたりを見渡す。

「……バニーがシンクロを解くまではな」

はあ、とため息つきのお言葉。

「そ、そんな……」

一難去つてまた一難。そんなことわざを脳裏に浮かべつつ。てい
うか。お前、親だろ!どうにかしやがれ!と、いつそのこと暴れ
てみようかと思つてみたり。でもちよつと。それって何の解決にも
なんない上に、諸悪の根源が喜びそうだからやめとくか。と、ちよ
つと頭をフル回転させるアリス君。

「どーにかならへんの？」

「アリス、可哀想やん」

あせあせしているホワイトとブラックに。

ちよつと、遠くを見ている感じのアリスに。

シンクロが解けなければ、アリス同様、自分たちの世界へ帰ることのできないクイーンたち。

そして。

のんきに紅茶をすするバニー・・・。

いいかげん、マジでその耳むしるぞ。このガキ・・・。と、誰が思ったのかは追求しないこととして。

重い沈黙をやぶったのは、クイーンだった。

「シンクロを・・・解けなくもない・・・」

あいかわらず、表情は硬いが。

「成功するかわからんが、やってみるか？」

「何？どんな方法なん？ていうか、失敗したらどうなるん？」

「さあ？」

肩をすくめてクイーンは言う。

「・・・どんな方法か知らないけど。このままじゃ、帰れそうにないしねえ。この際、何でもいいからやってみる？」

親身なのか何なのか。判断しかねるリアンの言葉。

「・・・方法にもよるけどさあ・・・俺もこのままじゃ困るしなあ・・・」

実際問題、そこだよな。

「で？その方法ってのは？」

ガーデンがクイーンを見る。

「・・・もし無事にシンクロが解けたとしても、だ。またバニーがシンクロをかけるともかぎらない」

クイーンはそう前置きすると、その美しくも澄んだ瞳をアリスに

向けた。

「そこでだ、アリス。無理を承知で頼みたいのだが・・・」
のわりには無表情で淡々としてますな。

「・・・シンクロが解けるなら・・・」

ああ。何か。嫌な予感。最近どうも当たるんだよね。
そんなことを、冷静に思いながら。

「バニーの、婚約者になってくれないか？」

リンゴ ン

今、一瞬。天使が飛ばなかった？あ、何？俺、幻視？うつわ、やべ。鐘の音まで聞こえちゃったよ。あはは。

・・・そう思ったのは、どうやらアリスだけではないようで。
全員がぼーんとしている。

まあ、約1名、お茶に飽きて廊下の端でぴょんぴょんしているのもいるが。

「言っておくが、形だけでいいのだからな？」

「・・・」

「ア、アリス？」

「・・・」

「あかんわ。放心しとるで？」

アリスの目の前で手を振りながら、ブラック。

「しっ、してない!!」

ようやく、現実へおもどりなさい、なアリス。

「は？？どういうこと？クイーン」

みんなの心の代弁を、リアンがする。

「だから、アリスを婚約者に迎える、という形でシンクロを解いて俺たちの世界へ帰ることにする。まずは、だ。もちろん、アリスも」

「お、俺も!？」

帰りたいと言ったけど、アリスの帰りたい世界はそっちじゃない。

「表向きだ。アイツはまだ一人前じゃない」

ちらりと見ると、どこからか入ってきたチヨウチヨと戯れている。

「時空の歪みを見つけて向こうの世界へ戻す」

「それって、かなり危なくない？」

さすがのリアンも真面目に返す。

「それにや。それやったら、またバニーがシンクロしてまうんやない？」

「せやせや」

「だからだ。“腕の未熟なお前では、アリスに嫌われる”とでも何とでも言えればいい。アリスは死んだことにしてもいいしな」

勝手に殺さないでくれ。

ただでさえ、雲行きのその方向も近そうなんだからさ！

「じゃあ、何か？アイツが一人前になったら・・・俺はウサギの結婚相手になるのか！！？」

うん、まあ、何ていうか・・・問題はそこか？

「バニーが一人前になるには、平均してあと60年はかかるから大丈夫だ。そっちとこっちの時間の流れは違うからな」

「一人前になったころには、思い人はよぼよぼのじーさんってか！」

そら、傑作やなと、あくまで人事な双子。

嬉しくない発言をどうもな！

「ちょ・・・ちょっと待ってください！本気でそんな方法をとる気ですか！？無茶ですよ！危険すぎます！！」

それまで黙って聞いていたマスターだったが、本当にその方法をとるような雰囲気を感じ、意義を唱えた。

「それは成功したら、の話でしょう？空間の歪みからアリスさんを戻すなんて・・・！そんな不確かな方法・・・！」

マスターは本気でアリスの心配をしている。

何だかアリスは、それだけでとても嬉しくなる。マスターがいるおかげで、俺、こいつらの中でも何とかやっていけてます！みたいな。

「じゃあ、一生ここにいろって言うのか？いつ戻れるかもわからないまま」

ガーデンが冷たく突き放す。

「・・・それは・・・。でも！何か他に方法が・・・！」

「方法って言うても、バニーをどうだますかが変わるだけで、やることは大して変わらないと思うがな」

「ガーデンさん！」

無神経なガーデンを、マスターはたしなめる。

が、ガーデンがそんなことに懲りるはずもなく。

「俺・・・それでいいよ」

どうせ、方法がないのなら。

どれにかけても同じようなら。

「シンクロを解こう・・・！」

かけてみるしかないだろう？

人生、早まった・・・？

バニーは、好きなアリスが婚約者となり、しかも、自分の世界へ来てくれると聞いて大喜びである。さっそくシンクロを解く気になっただけ。

その喜びようとは裏腹に、他のメンツは沈黙である。

成功するか、否か。

もちろん、一番不安なのはアリスである。

そこへ、リアンがぽんと肩を叩く。

「大丈夫だよーん。俺のダンナがヘマするわけないっしょ？」

アリスの緊張を解こうとしてくれる、リアンの心が、とても嬉しくて。

「・・・大丈夫です。絶対・・・！」

そう言って、抱きしめてくれるマスターに。

「・・・うん！」

にっこりと、微笑む。

アリスの金色の髪と、青いスカートがたなびき始める。

バニーがシンクロを解き始めた。

誰もが無事を祈る。

一瞬、目の前が真っ白になって。

消えゆく意識の中で・・・。

アリスは、声を聞いた・・・。

“ア・リ・ス”

その直後。

ドスン、という音と、お尻を地面にぶつけた感触。

「いってえ・・・」

まぶしい光に、しばらくしてようやく目が慣れる。

五感が、戻る。

「・・・ここ・・・は？」

そこは、見たことのない場所だった。

次にアリスが聞いたのは・・・。

「アリス・・・？」

クイーンの間抜けた声だった。

「どうしてここに！？時空の歪みから元の世界に戻したはずだぞ！？」

いつもはのほほんとしているリアンも、血相を変えて。

「アリス！？・・・まさか、自分でこっちの世界に来たのか？もう戻れないよ！？」

いきなり知らない場所に落ちてきて。

別れたはずのクイーンとリアンが目の前にいて。

大きな声で、何か言ってる。

もう、戻れない・・・？

「・・・え？」

今度は、アリスが目を見開く番である。

「戻る必要はないよ」

凜とした声が、あたりに響く。

この、声は。

「だって、アリスは僕の妻だもの」

アリスは、声の方を向く。

そこに立っていたのは、どこかクイーンに似た顔の。どこまでも人を引き付けるような顔立ちの18歳くらいの少年・・・。やわな感じはなく、すらりと伸びた手足はほどよく筋肉がついている。身

長はクイーンと同じくらいか。アリスより頭1つ分大きい。

金色の髪の毛、透き通るような目をした、彼。

「つ……妻あ!？」

妻!？何!?!？俺は!いつ、誰の妻になったんだ……!？

アリスは動転して、口をぱくぱくさせている。

「……!お前!……バニーか!？」

そこで。気付いたようにクイーンが声を出す。

「……そうだけど？」

ちらりとクイーンを見やり、そう、言う。

「や……ちよつと見ない間におっきくなつたねえ……」

リアンもちよつと、頭の回転が付いていつてないかな？

「それよりも、僕の一人前になったことだし。アリスとの結婚式の
日取りでも決めようか？」

口元を弧に描き、微笑する、その少年。

「あと……60年先じゃなかったのか!？」

そう叫ぶアリスを、誰も責められないわけで。

「……!お前が、アリスを……!」

「何のこと？」

クイーン of 言葉を軽く流しながら。

アリスを見つめ、笑うその少年。そう、バニーがアリスをこの世界に引き込んだのだ。

「何てこと……」

リアンも、次の言葉が出ない。

アリスは呆然としたまま、その場に立ち尽くしていた。
これから一体どうなるのか……。

アリスはただ、目の前の少年を、見つめるだけだった……。

）
続
く
）

第3話 シンクロを解け！（後書き）

あっちの世界へご到着！ しかも、おつきくなりました。バニーくん。あんまりマゾっぽくないご様子。これからどうなっていくのでしょうか。お楽しみに！
更新が遅くてすみません；

第4話 花嫁候補!!?(前書き)

ちよこつとボーイズラブっぽい雰囲気になってきました!!!(ようやくか)

第4話 花嫁候補!!?

「クイーンもリアンも“嘘”なんて言わないよね・・・？自分たちが決めたんだから。僕の・・・婚約者・・・」

今までの愛くるしい表情はどこへやら。明らかに、ああ、そういう血を引いてるよね　っていうような勝ち誇った笑みを浮かべるバニー。うん。あのマゾっぷりはもう微塵も感じさせないわけで。

「それに・・・これはアリスの意思でもあるんだから・・・」
小さく呟かれたその言葉は、アリスには届かなかった。

呆然とみんなが立ち尽くす、その中で。

「・・・!!わっ!!?」

バニーは、クイーンたちを無視してアリスの腕を引き寄せ、アリスを抱えあげる。

「なッ・・・!?!?お、おろせよ!!」

軽々と抱えられたアリスは赤面してバニーに抗議する。

もちろん、そんなこと、バニーが聞き入れるはずもなく。柔らかな笑顔だけアリスに向けて、スタスタと歩き出したのであった。

「・・・行っちゃったねえ」

その場に残ったリアンが、人事のように呟く。

「・・・どうすんの？クイーン」

先を歩く息子を眺めながら。クイーンは額を押さえながら渋い顔をしている。

「どうすると言ってもな・・・」

「・・・血は争えないね」

にやりと、何やら苦悶の表情を浮かべるクイーンに。リアンは意味深な言葉を向けるのであった・・・。

「……………」

あれだよな。

ぼかんとするって、言うじゃん？あれ。何見たらそんなになるんだよって、そんな呆けたことになるわけねーだろって、思ってた。だけど。本当。人生の中で、ぼかんとすることってあるんだなって。つか、問題はそこじゃないんだけど。脳が拒否？みたいな。

「……………すげえ……………」

約30秒間固まって。出た台詞がこれ。

アリスがぼかんとしている原因は。

眼前に聳え立つ、えっと、ここは中世ヨーロッパですかね？と、時代の確認をしまいそうな、そのお屋敷。てか、城だろ……………」

「ふふ。今日から、ここがアリスと僕の城だよ」

アリスをおろしながら、さらりと恐ろしいことを言っただけのバニー。

「……………え？」

はい？

何？

ここが？

俺とバニーの城、だあ？？

「やっぱり、狭い？」

小首をかしげながら、可愛らしく聞くこの男。

「せま……………！！？全然……………！！」

どんな思考回路をしていたらこのばかり屋敷が狭いって話になるのか。てか広すぎだっつーの……………！！

心の中で一人庶民的つつこみをしながら。

そんなアリスを見つめながら。

「とりあえず、中に入ろうか。部屋に案内するよ」

にこりと、アリスに微笑む。

「あ、うん」

「それに、着替えたいでしょ？僕はそのままでもいいけど・・・」
そういつて、指さされて。アリスは。ナチュラルに忘れていた事実と直面した。

そう。いまだアリスは・・・アリスルックだったのである・・・。
「き・・・着替えます・・・」

真っ赤になつて改めて恥ずかしさを痛感しつつ。案内するバニーのあとに、小さく続くのであった。

「とりあえず、この部屋で着替えて？僕は隣の部屋にいるから。終わったらおいでね」

バニーはアリスに着替えを渡すと、そのまま部屋から出て行つた。アリスは、だっぴろい部屋で一人、ふうつと呼吸を落ち着けた。

何だか、今回もいろんなことが一度に起きすぎて、思考がついていかない。

バニーがおつきくなったこともだけど・・・俺がこつちの世界に来てしまったこと・・・それに・・・

「俺は・・・」

元の世界に、戻れるのだろうか・・・。

さっきまでのリアンやクイーンの様子だと、元の世界には戻れない感じだった。でも、何だか、そう言われても実感が無い。それに、別の世界に来てしまっている実感もないのだ。ようは。脳が考えることを全面的に拒否している感じ。

考えてしまったら、壊れてしまいそうで・・・。

アリスは、ぞくつと走る寒気を振り払うと、明るい声をあげた。
「さっ、とりあえず、着替えるか」

できればもう少し。

俺の心が落ち着くまで……。

何も……。

今は考えたくない……。

アリスは、一呼吸置いて、カツラをはずし着替えることにした。

「……………」

ダダダダダ

ボタンー！

「ん？どうしたの？アリス？そんなに慌てて」

のんきに紅茶をすすめるこの男（こちらへん、リアンゆずり）。

そのバニーの前には、真っ赤な顔をしたアリスがいた。肩で大きく息をしながら。

「てめえ……何だ！！この服は……！！？」

アリスは、腹の底からそう叫ぶと持っていた着替えを床に叩き付けた。

その叩きつけられた衣装は……。

春らしいピンク色に、白いレースがふりふりと。ところかしこには可愛らしいリボンが結わっている。

そんな……男物の服ってないよね

「あれ？気に入らなかった？」

あははは。似合うと思うけどとバニーは朗らかに笑う。

「だっ……！！気に入るか！！何でこんなッ……げほごほッ……！！」

勢いあまってむせるアリス。ちよつと涙目……かつちよ悪……。

「大丈夫？アリス？」

そんなアリスの背を、バニーは優しくさする。

「ぜーぜー……」

アリスは息を整えながら肩で息をする。

「冷めてるからどうぞ」

すかさず、バニーは紅茶を手渡す。アリスは、それをもらって一気に飲み干した。そのおかげで、幾分楽になった。

「・・・さんきゅ・・・」

そして・・・。

アリスの記憶は途切れた。

「だめじゃない、アリス。花嫁がそんな格好してちゃ・・・」

自分の腕の中で、ぐったりしているアリス。そのアリスに、バニーは優しく口付ける。

額に。

頬に。

脛に。

唇に・・・。

深い眠りについた花嫁に。バニーは何度となく、口付けをするのだった・・・。

「・・・頭がパンク寸前だ」

「アンタでもそんなことあるんだねえ」

真剣な顔をしたクイーンと、相変わらずなリアン。

こちらもただっぴろい部屋の中。ソファに腰掛け、話している。

いつもは、たいていのことでは動じないクイーンも、さすがに今回のことは予想の範疇外だったようだ。

「息子が成人したんだ。いいことじゃん？」

リアンはそう言うと、クイーンの首に手を回す。

「だが、アリスはどうする？アリスには自分の国や家がある」

クイーンの瞳は、静かに語る。

軽率だった。

甘く見ていた。

誰を？何を？

否。すべてを……。

もっといい方法があったのでは？

どこかで……、思っていたのかもしれない……。

それもまた、運命だ、と。

所詮、自分のことではないのだから……。

「……アリスは必ず残ってくれるよ。帰れないってのもあるけど……だって、アリスは……」

クイーンは、リアンが最後まで言う前にその口を塞いだ。

「ん……」

舌と舌を絡ませて、長い長い、キスをした。

今、アリスたちがどうなっているかも知らずに……。

いつの間にか、眠っていたらしい。
どれくらい眠っていたのだろうか。

目が覚めた時、もう窓の外は薄暗くなっていた。

起きぬけの頭で、自分が今ベッドの中にいるのだと認識する。アリスは上体を起こし、しばしの間ぼーっとしていた。

コンコン。

そこへ、タイミングよくノックする音がした。

「アリス？入るよ」

リアンの声。

「うん」

半分重い頭で、アリスは返事を返す。

ガチャッと音がして、リアンが入ってくる。

「・・・！おや、まあ・・・」

リアンは入ってくるなり、まじまじとアリスを見つめた。その後、にやりと笑みを浮かべる。

「・・・？」

アリスは、相変わらず・・・リアンって変・・・。とか思いながら（失礼）

「安心したよ、アリス。よかった。クイーン、入りなよ。アリスはもうその気だぜ？」

アリスは、ドアの外へ向かって声をかける。

何だか、いきいきしてるような気がする・・・。

「・・・リアン、そんなわけ・・・」

重くため息をつきながら、クイーンが部屋に入ってくる。そして、アリスを見て、一瞬。止まる。

「・・・アリス・・・本当に、いいのか？」

クイーンは、アリスをまじまじと眺めた後、そう呟くように言った。

「・・・え？」

どうも話が見えない。でも、それを考えることすら今は億劫で。頭も重く、機能していない。

こんな時。

人はよく、どうでもよくなるものだ。

もちろん、アリスも例外ではなく。

「うん」

と、答えるのであった。

「そうか・・・お前がいいなら俺はもう何も言わん」

「嬉しいねえ。よかったよ。アリスで」

「3日後、お前の他に3人、バニーの花嫁候補が来る。まあ、どうせアリスで決まりだろうが」

クイーンは、やれやれといった様子で部屋をあとにした。

「んじゃ、アリス、ゆっくりしなよ。でも、いつまでもその格好じやカゼひくよ」

うきうきと、クイーンのあとを追い、出て行ったりアン。

・・・花嫁・・・候補・・・？

・・・カゼ・・・？

クイーンたちが退出した数秒後。何だか、アリスは大きな不安を感じた。

何か・・・おかしい。

少しずつ、頭がはつきりしてきた。

そして、何だか体がスースーすることに気付いた。

ちよう、嫌な予感・・・。

「・・・！！？」

ちらりと自分の体に目をやると、アリスは素っ裸だった。かろうじて幸いなことと言えば、下半身はシーツに包まれていることくらいだろうか。

何！？

何で！？

アリスはパニックを起こす。

さっきまで着ていたあのアリスの衣装は！？どこ！！？

きよるきよるとあたりを見回していると、後ろに鏡があることに気付く。アリスは、その鏡を手にすると・・・。

「何だこれは~~~~！！！！？？」

叫んだ。

アリスの白い肌には。無数のキスマークが散っていたのだった。
首筋から、わき腹。腕の内側。

点々と、赤い印が・・・。

「こ・・・これを見て・・・リアンたちは・・・！！」

アリスは、さーっと血の気がひいたのがわかった。

そう。誤解をしたのだ。いや、誤解と言っても、アリスが無事かどうかは定かではないのだが・・・。

「だ・・・誰が・・・！？」

アリスが頭を抱えて白黒しているところへ。

「あ、おはよう。って時間でもないか」

そう言いながら、ナイスタイミングで部屋に入って来たのはバニーであった。

「おっ・・・お前か~~~~！！！！」

「え？何が？？」

怒れるアリスに、どこまでも爽やかな笑顔で応じるバニー。

「すつとぼけんな！！俺の服はどうした！！？しかも、しかも・・・！！」

アリスの顔が・・・体が、朱色に染まりだす。

「・・・しかも？」

バニーは、アリスに顔を近づける。

「この・・・！キスマークだよ・・・！！！！」

羞恥心に震えるアリスを楽しそうに眺めながら。

バニーは、アリスをさらに突き落とした。

「・・・自分から誘ったくせに」

・・・！！！！？？

今度は一気に青くなる。

アリスも赤くなったり青くなったり大変である。

バニーは、冷たいほどにつこりと笑顔を作る。

「かわいかったよ、アリス」

「か・・・かかか・・・！！？」

あまりのことに固まるアリスをよそに。
バニーはちゅつとその頬にキスをする。

お・・・俺・・・！！

アリスは・・・。

もうお婿に行けない・・・・・・・・！！！！

わけのわからないことを、心の中で叫ぶのであった・・・。

～続く～

第4話 花嫁候補！！？（後書き）

いかがでしたでしょうか。更新が遅くて申し訳ないです。・次の話では、もう一組夫婦が出てきますのでお楽しみに
アリスを読んでくださっている方々、評価をくださっている方々、いつもありがとうございます！リアンとアリスはくつつきませんが（笑）、今後はボーイズラブ要素が強く・・・なる？予定です 今後とも、よろしくお願い致します！

第5話 夫婦な話（前書き）

このカップリングは、想像していた方も多いのではないかと・・・。

第5話 夫婦な話

「大丈夫だったかな・・・アリスさん・・・」

ぽつりと呟くのは、爽やか代表、マスター。

クイーンとリアン以外は、バーニたちとは別の場所へ帰っていた。そのため、マスターはアリスがこちらの世界へ来ていることを知らなかった。

ここは、アリスが心な中で絶叫している屋敷から数100メートル離れた場所にあるマスターの屋敷である。部屋の中を、ほのかに紅茶が香る。マスターは珍しく上の空で紅茶をいれている。

その、向かいには。

「・・・」

仏頂面のガーデン。

なぜ、このツーショットなのかというと・・・この2人も、実は夫婦だからである。

「・・・どうぞ」

マスターは、紅茶をガーデンに差し出す。

「・・・」

その様子を一瞥しながら、ガーデンは紅茶を受け取った。その様を、気が抜けた表情で見つめるマスター。

「まずい」

「・・・え？」

ガーデンが放ったその言葉を理解することに、数秒要した。

「え？す、すいません・・・！おいしくなかったですか！？もう一度入れなおします・・・！」

あたふたするマスターの。

腕を掴む。

「・・・そんなに、アリスが心配か？」

「・・・え・・・？」

ガーデンは、まっすぐマスターを見つめる。数秒の沈黙が、数分にも感じられた。

ガーデンは、がたんと音を立て、席を立った。そして、足早に部屋を出て行った。

「！！ガーデンさん・・・！？」

後には、マスターだけ残った。

「おい、マスター！いる？」

リアンはマスターの屋敷を勝手知ったると入り、マスターの部屋の前に来ていた。扉の向こうに、人の気配がする。

「？入るよ」

返事がないことをいぶかしみながらも、リアンはそのドアを開けた。

「・・・」

「・・・」

そこにいたのは。

例の爽やかお兄さんではなく・・・。

「何・・・してんの？・・・ガーデン・・・」

やさぐれガーデンだった。

「・・・別に」

ふいと、そっぽを向く。そんなガーデンに。

ははあ。喧嘩したな。こいつら。と、思い切り悟るリアン。

「ところで、ガーデン。アリスを正式にうちの息子の婚約者にすることにしたよ」

とりあえず。用件だけ伝えて。

触らぬ神にたたりなし、で。

「・・・・あ？」

「それだけ。マスター借りていくよ。アリスの衣装合わせしてもらうから」

早口で用件を伝えるリアン。

「・・・・アリスを正式に・・・・？どういうことだ？」

アリスは向こうの世界の人間である。それを正式に、とは？しかも、さきほどシンクロを解いたばかりではないのか・・・・。

「アリスが来たんだよ。こっちの世界に」

リアンは、目を細め、そう言った。

「母さん、2階のつきあたりの部屋、誰の部屋だっけ・・・・？」

「2階の・・・・？」

「そうよ。私の隣の」

「あの部屋は・・・・えっと、誰も使っていない物置じゃなかった？」

「だよねえ。でも、ブレザーが置いてあるのよ。男子校の」

「男子校？変ねえ。うちには男の子なんていないのにねえ」

「隣の裕馬くんのかなあ？」

「そうかもしれないわね、でも・・・・何でうちに・・・・？」

ざわざわ

「なあ、あそこの席って誰だっけ」

「あゝ？そこは・・・・えっと、誰だっけ・・・・？」

「は？お前ら何言ってるんだよ。あそこの席はもともと誰もいなかっただろ」

「あ、そっか」

「んなことよりさ・・・・」

おかしい。

おかしいだろ。

裕馬は、その眉を寄せ、クラスメートの会話を聞いていた。

そこは、アリスの席だろ？何で、誰もアリスを覚えてないんだ？
クラスメートも、先生も・・・そして、アリスの家族までも。

「・・・どうなってんだよ・・・？」

いたはずなのだ。あの、文化祭の途中までは。確かに。それなのに・・・。

アリスは、突然いなくなつた。

この、世界から・・・。

「どう、なってんだよ・・・」

もう一度、小さく呟く。

その声は、クラスの喧騒の中で儚く散った・・・。

「泣くなよ・・・」

そう言いながら、引きつった笑みを浮かべるのはリアン。

「そ、そうだよ、マスター！ね、泣き止んで・・・」

必死になだめる、アリス。

「あ！紅茶とか飲みたいな！俺、マスターのいれたやつ！」

元気にリアン。

「・・・ガーデンさんにまずいつて言われました・・・」

地雷を踏んだのは、リアン。

「リーアーン～～・・・」

「だ・・・だつてえ～～・・・」

小さく話す、アリスとリアン。その前には、背を向けしくしくと涙を流すマスター。

いたい、どうなっているのかというと。

リアンがマスターを探し当てた時には、すでにこの状態だったのである。

よくわからないが、ここにいたくないと言うので、アリスの所まで連れて来てみた。ちょうどバーがいなかったということもあるが、一人でこのマスターをどう扱えばよいのかに困ったからだとも言える。

そして。アリスはマスターとガーデンが夫婦だということにまず驚き。しかし、驚いている場合ではないことを悟り。

そして。今にいたる。

「と、ところで・・・どうしてガーデンと喧嘩になったわけ？」

こほんと、気を取り直してリアンが聞いた。

「・・・僕がいけないんです・・・。今日は帰ってきてからも、アリスさんのことが心配でぼーっとしてたから・・・それで、きつと怒ったんだと思います・・・」

クスンと話すマスター。

それってー！！！！

ただのヤキモチなんじゃー！！！！！！？

アリスとリアンの思考が合致したのは・・・言うまでもない・・・。

「やっぱり・・・僕はガーデンさんにふさわしくないんです・・・」

「そ・・・そんなことないって！！何でそんなこと言うんだよ！」
マスターを嫁にもらって幸せでないはずがない！と、アリスは強く返す。

「・・・ガーデンさんには、妾さんがたくさんいるんです・・・」

ガーデン！！！！

再び、アリスとリアンの心の叫びが合致したのは……当然のことです。

てか、マスターがこんなにマイナス思考者だとは……。とアリス。

あゝあ。ガーデンさえ余計なことしなけりや、いいお兄さんなんだけどねえ……。とリアン。

2人は、人知れず、ため息をつくのであった。

「ていうかさ！この国はおかしいんだよ。前回も、会えば愛人になれだの言ってきたさ。こっちの貞操観念ってどうなってるわけ？」

アリスは、しごくまともなことを聞いてみた。

ガーデンにしても！クイーンにしても！正妻がいるじゃん！！

「いやゝ耳が痛いねえゝ」

というのはリアン。

「まあ、あれだよ。生活に刺激が欲しいんじゃない！？」

あはははは！とリアン。……本当に、この男は……。

「いやいや、冗談抜きで。こっちは時間の流れがゆっくりだからねえ。歳もとんないし。ずっと一人だけを愛していくつても、難しいのかもねえ……」

リアンはふと、静かにそう言った。表情は相変わらず、読めないものだったけれど……。

「それって……」

それって……何か、とっても寂しくない……？

アリスの呟きは、言葉になることなく、宙に消えた。

「さてと、気を取り直して」

リアンは、だいぶ落ち着いたマスターの方を向く。

「マスター、いいかげん浮上してアリスの衣装合わせしてくれよ」

「・・・？衣装合わせ？？」

「そう。3日後にある、婚約者選別会でアリスが着るドレスよ」

「はあ！！？・・・ドレス！！？」

「そうだよ！一番似合う格好しなきゃね！」

「こいつ・・・首しめたるか・・・。」

「一人でんな恥さらせるか！！・・・！」

「ありすは、何かに気付いてにやっと笑む。

「・・・何よ・・・？」

何か、嫌な予感。

「正妻様方も・・・ドレスがいいと思うんですがね」

アリス。反撃開始。

～続く～

第5話 夫婦な話（後書き）

いかがでしたか？ガーデン×マスター。というか、いろいろほっぽッてる内容が・・・次回、いろいろの説明を出します。あと、ガーデンとマスターの続きもね。そして、ドレスアップした面々も。ぜひ楽しみに

第6話 裏話？（前書き）

ちよつと話が前後していたりします。ようやく、少しずつですが話が進んでいます。・・・進んでるのかなあ（笑）

第6話 裏話？

時間をちよつと遡ります。

婚約者選別会って何？と思われた方、アリスとバニーはあの後どうなったのよ！と思われている方のために……。いや、今まで忘れていたわけじゃないですよ？ええ。まったく。これっぽちも。ちよつと、いつ出そうかなって思ってただけで。ハイ。では、時を戻して……。

「大丈夫、大丈夫。僕が責任とってあげるから」

「何の責任だあ！！？だいたい！テメー！一服盛っただろ！！！」

やつとこさ、アリスの衣装 マッパ シャツにズボンとまともな格好になれたアリス。元気にバニーに詰め寄る。

「何のこと？」

しらつと、あくまでもその笑顔を崩さないバニー。

「てつめ……！」

「だいたい、クイーンたちはもうその気だよ？それに……。アリスはもう帰れないって」

その言葉に、アリスはびくりと反応する。

「何で……」

しごく明るく。バニーは言った。

「だって、アリスは僕の奥さんだもん」

「いつなったんだよ！！」

アリス、ナイスつつこみ。

「……アリスは、僕のこと嫌い？」

アリスにつっこまれ、急にしおらしくなるバニー。

「バ……。バニー……。？」

「僕みたいなのは、親が決めた婚約者と結婚しなきゃいけないんだ。……好きでもないのに。だけど、僕はアリスが好きなんだ。……」

3日後に婚約者の選別会があるんだ。そこで、僕の結婚相手が決まってしまう・・・僕は、好きでもない人と結婚なんてしたくないよ」
まるで、子どものように、アリスに抱きつきながらバニーは話す。
「お願い、アリス。嫌なら何もしないし・・・一緒に暮らさない。
・・・いつかは、元の世界に返してあげるから・・・僕の・・・僕のお嫁さんになって・・・？」

その切実さと、子どものような可愛さに、アリスは胸を打たれるが。もちろん。言うまでもなく。演技である。わかっていないのはアリスだけ。

「う・・・じゃ、じゃあ・・・少しの間だけ・・・なら・・・」

「！ありがとう！！アリス！！大好き！！」

そのお許しの言葉に、バニーはアリスをよりいっそう強く抱きしめる。そして、頬にキスをする。

「わ！！それ・・・！やめろ！！てかそうだ！！何もしないって・・・！！お前！俺が意識のない間に・・・！！」

「何もしてないよ。キスマークはつけたけど。」

「・・・え？」

「意識のない相手を抱くほど、鬼畜じゃないよ」

ふふつとバニーは笑む。

要は。リアンたちに見せ付けるためだけにしたってことね・・・。
はは。

頭痛え・・・。

そんなこんなで、アリスは丸め込まれ、今にいたっているというわけ。

そんなわけで（？）3人の衣装合わせは行なわれていた。

「・・・足元がスースーする・・・」

「・・・ひらひらする・・・」

「2人とも、よく似合ってるぜ？マスター、その格好見ればガーデ

ンに独り占めしてもらえるぜ！」

と、ピースをするアリス。その、目の前には……。

マスターは、清楚な感じが漂う白いシンプルなドレスを着（もちろん、胸がなくても似合う型）、前髪をあげ、後ろ髪はウィッグをつけアップにしていた。どこぞの深層令嬢のようだ。

一方、リアンかというと。こちらは黒のチャイナ風のドレスである。七部の袖に、長いスリット。大きな牡丹の刺繍が黒の大人っぽい中にも、派手な印象を与える。リアンは、前髪を横流しにし、ストイックな美女となっている。

そして、元気いっぱいアリスくんは。リアンにお返しとばかりに薄いピンクのふりふりリボンなピンハ系のドレスを着せられた。髪は金髪のウェーブのかかったロングヘア。

何かもう、壮絶な感じである……。

「しかし、すっかり遅くなっちゃたね」

リアンは、時計を見ながらけだるそうに言った。もう日付が変わっていた。

「何だかんだ文句つけてきたのはリアンだろ」

あれにしるこれにしるを着ては脱ぎ着ては脱ぎをさせられたのはアリスとマスターである。

「だって、せっかく可愛くするんだしねえ」

似合うのがいいじゃない。と言うリアンの言葉にまあわからなくもないけどってか、似合ってなくてもいいんだけど。と思いながらアリスは。

ていうか……何で女がいないのにこんなにたくさん女物のドレスやらアクセサリーがあるんだろうか……。と。心の奥底で。一人で思ってみるのであった……。

「それよりさ！細かい直しは明日にして、今日はそのまま帰るなよ！マスター！！絶対ガーデン喜ぶよ！！」

目の前で儚げに潤む瞳のマスター！

「・・・そう、ですか？」

「自身持ちなつて！なあ、リアン！」

だってもう、誰が見たって。パーフェクトに美人なのだ。

「そーそ。これで勃たなきや男じゃない・・・」

「はいじゃー行こうかー！！！」

リアンの教育的指導が入りそうなコメントは置いておいて。

気乗りしないマスターをひっぱりながら。3美人はマスターの屋敷に向かうのであった。この道すがら、誰にも会うことがなかったのは・・・ある意味幸運と言えよう。

「ここにいるのか？」

「・・・多分・・・彼と僕は一緒に暮らしていますから・・・」

「で、マスターの部屋に、いるんだよな」

からかうリアンを放って、アリスはマスターの背を押し屋敷の中へと入る。玄関の扉を入り、豪勢な造りの階段をあがりガーデンがいる（らしい）マスターの部屋の前につく。

マスターは、数度ためらったあと控えめにノックをした。

「ガーデンさん・・・います、か？」

ていうか・・・自分の部屋入るのにノックって・・・。と2人が思ったかどうかは別として。

半分、寝てるかも。と思っていたから。

勢いよく扉が開いたのには、ちよつと心臓止まりかけたよ。

「マスター！！？こんな時間まで・・・！！？」

ガーデンは、怒った様相でそこまで言つて・・・止まった。

「ご・・・ごめんなさい・・・」

びくつとするマスターは・・・まさにお嬢様。

「・・・マ・・・マスター・・・？」

その様相は、驚きに変わり。

「はい・・・に、似合いませんか・・・？」

控えめに、瞳を潤ませるマスター。

ぐっとこない、男はいないだろう。

「いや・・・」

どうやらツボに入ったらしいガーデンは、珍しく感情を全開にして。今すぐ抱きしめたい。というオーラを出している。

「・・・その、格好は？」

感情を抑えながら、ガーデンはマスターに聞いた。

「・・・ガーデンさんに・・・好きになってもらえるように・・・」

「・・・は？」

「僕が役不足なのは・・・わかっています・・・！愛人がいてもいいです！！だから・・・」

「僕を・・・捨てないでください」

その頬を、涙が伝う。

きつと、今まで。マスターはいろんな思いを抱えてきたのだろう。

夫婦という関係でありながら、ガーデンには愛人が大勢いて。

愛情を確認できなくて。

それでも。

愛していたのだろう・・・。

顔を臥せっているマスターを、ガーデンはかき抱いた。

「・・・！」

「捨てるわけ・・・ないだろう・・・！」

マスターの体が、折れるほど強く。

「俺は、今も昔も・・・ずっとお前だけを愛してる」
ガーデンの、告白。

「俺のほうこそ・・・お前に嫌われていると・・・」

「そんな！何ですか！？」

「俺が何人愛人を作っても、何にも言わないからだ」

「そ、それは・・・僕のことを好きじゃないんだと思って・・・」

「・・・」

「・・・」

らぶらぶである。

「俺たち、存在忘れられてない？」

「・・・帰るか・・・」

そう。

まだいたのだ。アリスとリアンは。

で、何かもう。目の前は2人の世界だし。そのままにして、マスタ―の屋敷を後にするのだった。

「何だかんだで、ラブラブじゃねーか。あの2人・・・」

おもしろくなさそうに言うのはリアン。

「ていうか、人のああいふ場面見ちゃってよかったのかな・・・」

顔が真っ赤なアリス。

「・・・できればもう2度と見たくないけどな・・・」

リアンは苦笑しながらそう言った。

「あの2人もねえ。・・・不器用なんだよね・・・マスターも、ガーデンも。・・・それに・・・」

夜空を見上げながら、リアンは静かにそう話した。

「・・・さ！俺も早く帰って愛しのダーリンにこの姿を見せてあげるかー！！」

リアンは全開の笑顔で楽しそうにそう言った。

「俺は、あんまり会いたくない・・・」

アリスは心の底からそう思った。

「いいじゃん。似合ってただし」

しなを作るリアン・・・はまりすぎ。

「それとも、恥ずかしい？」

にひっと、アリスの前でからかうような笑みを見せる。

「だ・・・！だって、こんな格好だぜ！？そりゃ・・・」

再び真っ赤になるアリスに。

「おやおや？それは、バニーだからかな？」

「ち・・・ちが・・・！！」

なぜか動揺してしまう自分。

そうこうしながら2人が家についたのは、もう2時も近かった。

それでも、クイーンとバニーはきちんと起きて待っていて・・・
というか、いたくご立腹でと、いたく心配してと。

それぞれ、帰ってきたリアンとアリスにどんな反応をしたかはさておき・・・。

この時、これから起こる事をアリスはまったく想像していなかった。

3日後（正確には2日）には、アリスの人生を変える大きな事態が起こることは・・・この時まで、アリスは知らなかった・・・。

～ 続 ～

第6話 裏話？（後書き）

何か、何がメイン？っていう感じですね。唐突なガーデンとマスタ
ー話（笑）ちよつとここにどうしても入れときたかったので。話が
急展開で申し訳ないです。これから更にラブがたくさんでくる
予定。基本、この話のコンセプトは愛の国です（笑）皆様、今後も
見捨てずお付き合いのほどを。

第7話 ラブカップル（前書き）

ラブな話やらシリアスやらがまぜこぜ。ちょこつとアダルティなムードも漂わせてみたり（ムードのみです／笑）

第7話 ラブカップル

「・・・リス・・・」

「ア・・・ス・・・」

「ん・・・」

誰かの、声がする。

誰の、声だっけ・・・。

意識の朦朧とする中に、呼びかける、声。

「アリス、朝だよ」

「・・・兄さ・・・ん？」

「アリス、僕だよ。おはよう」

目の前には、バニー。

「・・・バニー？」

アリスは寝ぼけた頭であたりを見回す。そこで、自分がベッドの中にいるのだと認識し。そして。昨夜、バニーの元へ帰りそのままいつの間にか眠りこけ。バニーのバッドを占領していたのだと。気付いた。

「わ・・・悪いっ・・・！！お前のベッドなのに・・・！！」

アリスはガバツと慌ててベッドから起き上がる。

そんな慌てるアリスに、バニーは優しく微笑み軽くキスをした。

「そんなに慌てなくていいよ。今、朝食を持って来るからね」

バニーは嬉しそうに微笑みながら、部屋を出て行った。

その微笑に。

アリスの胸は知らずと高鳴る。

な・・・何で！俺はバニーに微笑まれただけで赤面してんだ・・・！！？

枕にやつ当たりをしながら、動悸を鎮めるアリスであつた。

「クイーン・・・」

こちらはうつて変わって。

「どうした？」

アダルト担当クイーンとリアン。キングサイズのベッドの上でダラダラ過ごすリアン。

「腰イタイ。眠い。腹減った・・・」

「そうか？」

けだるそうに言うリアンに、自分はもうキチツとした格好をして新聞に目を落としているクイーン。

「そうか？じゃねーっの。このバケモン」

すましているクイーンにべーつと悪態をつくリアン。

「お前があんな格好して帰ってくるからだろ」

あんな格好とは、もちろん、あんな格好です。

「だってアリスがさ・・・」

苦笑いを浮かべながら。ふと。

遠くを見つめて。

「大きく・・・なつたよなあ・・・」

リアンは、隣にいるクイーンにも聞こえないくらいの小さい声でポツリともらした。

「・・・？何か言つたか？」

「いゝえ。何も。さ、シャワーでもあびてスッキリしようかねえ」
リアンはそう言つと、備え付けのシャワーブースへと消えた。

所変わって。

パシャ

「あ……！すみません！」

マスターは、琥珀色に染めてしまったテーブルクロスをふきんでたたきながらガーデンに謝る。

「大丈夫だ」

相も変わらずぶっきらぼうなガーデン。

「すみません……何だか体が痛くて……」

寝違えたのかなと呟くマスターに。

「悪かった。……昨日はやりすぎた……」

紅茶を含みながら、さらりと。

その言葉を頭の中で反芻し。その意味に気付いたマスターは。

「……いつ……いえ……!!」

かゝと赤面し。今度はポットを落としそうになったのであった。

ラブラブですな……。

そして。こちらへと戻ります。

「?クイーンたちのところ?」

「そうだよ。アリス」

朝食を食べて、一息ついたところで。アリスは、バーニーにクイーンとリアンの屋敷へ行くことを告げられた。

「明日は婚約者の選別会があるから。その打ち合わせに行くんだ。アリスも関わることだから、一緒に行こうか」

「あゝ、そうだね。行ったほうがいいよね」

「それに、クイーンたちが住んでいるのは公館でもあるからね。これから何回か行くこともあると思うし」

さらりとそう言われて。

アリスは、一抹の不安に刈られた。

いつ、帰れるのだろう・・・。

すっかりこの環境に慣れた気がしていた。・・・この雰囲気
が、嫌いではないのだ。

でも、アリスはまだ。この非現実的な世界を完璧に受け入れるこ
とができなかった。

目を覚ましたら。

いつもの世界に、戻っていきそう。

ここは、夢の中のような気がして。

だって。

すべてを捨てるには。

忘れられないものが、多すぎたから・・・。

「バツカじゃねえ？」

ここは、クイーンの部屋。

「バカとはひどいねえ。親に向かっていう言葉？それが」
「ぶーたれながら、リアンは言った。」

「本当のことだろ？確かに昨日、あんな格好でアリスが帰って来た
時には押し倒そうかと思ったけど。だからって、立てなくなるまで
すんなよ」

「ごもつともだけど・・・やったのはクイーンだから」

自分のせいじゃないとリアンは主張した。

「ほう。責任転嫁か・・・？」

青筋を立ててクイーン様。

「・・・あら、いたの・・・」

動けないリアンの代わりに、しかたなくお茶を淹れタイミングよく帰って来たクイーン。そのクイーンにバツの悪そうなりアン。

「ところでバニー、押し倒そうと思ったって？」

「あ？」

「え？何？してないわけ??」

・・・普通、親子でこんな会話するのか・・・？

「してないよ。アリスとは。一度も」

につこりと。そしてさらに、バニーは言つてのけた。

「えっ・・・え~~~~!!?」

「何だ、じゃあ、あの時の・・・」

「誰か・・・」

タイミングよく。

アリスの声がした。

「ドア開けて」

クイーンのお手伝いをしていたアリスは。お菓子を見繕って持ってきたのだが・・・。持ちすぎた・・・。して、ドアが開けられなくなつたのであつた。

バニーにドアを開けてもらい、ようやく中に入るアリス。

「何かどれもおいしそうで、持って来すぎちゃつた」

何だか・・・。知らないって素晴らしいって感じ。

そのアリスの様子を皮切りに。クイーンはバニーを連れて、奥にある執務室へと入っていった。あらかたのことを決めたら呼ぶから、と役に立たないと判断された2人は取り残されたのであつた。

お菓子をぱりぱりと食べながら。
たわいもない話をして。

「大きく、なつたよねえ」

リアンがふと、真剣な面持ちでアリスを見据えた。

「？バニーのこと？」

アリスは口をもぐもぐさせながら答える。

「・・・違うよ。バニーもだけど・・・ねえ、アリス。こっちに来て、もつとよく顔を見せてくれる？」

アリスは、一瞬戸惑った。

リアンの意図するところがわからない。

「黙ってようかな、とも思ってたんだけど。説明するにはこれがてつとり早いかなと思って・・・」

リアンは、アリスの頬に触れると、少し悲しげな顔をした。

「やっぱり・・・覚えていないんだね。アリス・・・」

「・・・え？」

～ 続 ～

第7話 ラブカップル（後書き）

中途半端な所で切れました。うふ。この先は想像しやすくてもしないこと（笑）！ゆっくりですが、書きたい話が少しずつ形になってきていて嬉しいです。感想などありましたら、お願い致します

第8話 告白。（前書き）

リアンの告白。シリアスばっかじゃアレなんで。双子とか出してみたり……。え？違うつて？

第8話 告白。

「アリス、俺はお前にも幸せになって欲しい」

「・・・リアン・・・？」

いつもと違い、どこか悲しげに。

真面目な顔で、リアンはアリスと向き合う。

アリスの頬に、手を置いて。

「アリス・・・俺は、お前の兄だよ・・・」

リアンは、静かにそう告げた。

アリスはと言うと。

話がうまく飲み込めず、頭にハトが飛んでいる。

「リ、アン。人違いだよ・・・？俺、男兄弟・・・いない、もん・・・」

アリスは、そう確信しながらも。大きな不安に押しつぶされそうなのを感じていた。

脳が警告している。

深みにはまる。

深みに、はまっていく。

「・・・アリスの両親は10年前に離婚して、7年前に再婚した。新しい父親には連れ子がいる。それが、今の義姉の雪姫だろ？雪姫

はスチュワードスをしてる。アリスの母親は弁護士だし。・・・祖母は生きてて、今はアメリカにいる・・・」

なんで、知ってるの？

どうして、そんなことを言うの？

「俺が、一時、アリスの義兄だったからだよ・・・」

リアンは、動揺を隠せないアリスに、話を続けた。

「俺は、向こうの世界で5年前。16歳でここへ来たんだ」
5年も、前に。

「か・・・仮に！リアンが俺の兄さんだとしても・・・何で俺や・・・俺の家族すら・・・リアンのことを覚えてないのさ・・・？」

頭が痛む。

頭痛がする。

「異世界へ来た時点で本来あった時空がゆがみ、それは、他の人間の中にあるその人の記憶にも影響しだす。・・・記憶は、消えてしまっ・・・。そしてじきに・・・元の空間は、異世界へ行った人間の存在を許さなくなる。あとかたもなく、その世界から抹消される。・・・所有物も、何もかもが・・・」

リアンは言いにくそうに話した。

「・・・！！それじゃあ・・・！！」

「それが・・・元の世界へ戻れない理由だ」
その一言が、アリスに大きく突き刺さる。

「・・・もう・・・戻れ・・・ない・・・？」

リアンは、一度まぶたを閉じて。

その瞳を開く。

「アリス、最後の選択だ。お前は、バニーを愛しているか？」

その言葉が、いつまでも、鮮明に。

アリスの耳に残った・・・。

時間というのは時にとても残酷で。
誰の意味にも関係なく進んでいく。

「かつたるいな」

「普通、息子の婚約者決めるパーティーでそんな事言うか？」

ざわざわと賑わう会場。

そう。今日は婚約者選別会。

かと言って、特に何をするわけでもないのだが。

要は、幼少の頃よりぜひ、うちの息子をバニー様の嫁に。と望んでいた人々の中からそれ相応、と選ばれていた3人＋飛び入りのアリスからバニー自身と婚約者候補の意思により一人の婚約者に厳選する。といった会なのである。その他の人間は、そのの様子を見に来たり、クイーンやバニーに挨拶をしに来たり、とりあえず呼んでみたりした人間たちなのである。この世界は、クイーンを王とし中心とし回っておりその血縁者がクイーンの傍にいてだけで。別段、争いや権力抗争などはない。というか、みんな結構自由気ままに暮らしている。まあ、ある一定の地域ごとにそこを治めている者はいのうのだが。

「だってそうだろ？もうアリスで決まってる」
しれつと言うクイーン。

「・・・一応、ね」

ぶすつとした顔で、バニーは答える。
そこへ。

「よお、クイーン！」

「ハロー！バニー！！」

まったく空気の読めない2人組み、登場。

クイーンなど、この2人を見た瞬間、あからさまに顔をしかめた。

「ああ！！そんな嫌そうな顔せんといてや！！」

「うるさいぞ。ブラック。周りに迷惑だ。・・・帰れ」

「来た早々、帰れとか言いよるし！！」

あいたーと、ホワイト。

「ま、それは置いといて」

都合の悪いことはさらりと流し。

「朝もはよから豪勢やなあ。各地域のお偉いさんも来とんやな」。

10人か。相変わらず、変わり映えせんメンツやわ！！」

はははははとブラック。

「せや、肝心のアリスはどこや？」

「リアンもおらんのんちゃう？」

きよろきよろと、あたりを見回す2人。

その質問に、眉間を押さえながら。

クイーン様は大きなため息をつかれ。

「・・・寝坊だ・・・」

何ともありえない言葉を口にされるのでした。

前日、詳細をバニーやら部下やらと話し、決めてアリスとリアン
を呼びに行ってみれば。

リアンより、今日は2人でラブラブするから部屋に入るなど言わ
れ。クイーンもバニーも追い出され。朝、迎えに行ってみれば。リ

アンに。まだ眠たいから寝させると追い出され。

・・・夫の威厳はどこへやら。最強妻、リアンなのであった。

「・・・さすがやのう。リアン・・・」

「ある意味、ゴーイングやからなあ・・・」

・・・お前たちに言われたくない。と思いながら。

「あ、せやったら。他の候補者教えてや！」

まあ、とりあえず。そこでしょう。

「ああ。まず一人目は、あそこの長髪のたれ目の男だ。レンとか言ったか。バーランの富豪の息子だ。大変デキがよろしいそうだ」

クイーンの視線の先にいるのは。いかにも、な男。

「うゝわゝ・・・遊んでそゝ・・・」

「性格悪そうなツラしてんなあ」

好き勝手。

「あ、気付いた・・・」

まあ、4人の視線が注がれれば。否が応にでも気付くだろうが。

「こ、こつち来るで！」

なぜかわたわたする2人に。無表情な2人。

「どおも。バーランから来ました。クインツの息子のレンです」

にやにやと、その舐めきった態度に。

「クイーンだ。遠路はるばるようこそ」

棒読みで慥然と対応するクイーン様。

「うわゝ・・・この男、命知らずやなあ・・・」

「クイーン、この手のタイプ嫌いやからなあ・・・」

ひそひそと、ホワイトとブラックが話していると。

「あんたがバニー？」

さらに、レンはぶしつけにバニーにそう聞いた。

「・・・そうだが」

あきらかに不機嫌なバニーをもろともせず。

レンは、につこりとバニーに微笑むと。

「あんた、俺を選びなよ。絶対後悔しねーぜ？」
不敵に笑む。

「いつ・・・一国の王子に・・・」

「ほんま、命知らずやなあ・・・」

「じゃあ、また・・・このパーティーが終わる頃には、あんたの隣には・・・俺がいることになるけどね」

それだけ言うと、レンはバニーから離れパーティーの輪の中に戻って行った。

「・・・何かたくらんでそうだな・・・」

「・・・ああ・・・」

レンの後ろ姿を追いながら、クイーンとバニーは小さくこぼした。
「クイーン様、バニー様、ご無沙汰しております」

1人の少年が、クイーンたちの前で深々と礼をした。

「ああ、ソウか」

深々と礼をするこの少年に対し、先ほどのようなトゲはなく、クイーンは接する。・・・というか、スマイル0円状態。

「今日はお招きいただきまして、光栄に存じます。父も、よろしく言っております」

「サドナのゴーレン殿だな。お会いできなくて残念だ」

「そう言っていただけですと、父も喜びます」

にこやかに、ソウは話す。

ひとしきり、バニーを含め、3人で話した後丁寧に礼をしその場を去って行った。

「へへ、あれが2人目」

「1人目とは大違いやなあ」

ホワイトとブラックは、ソウの礼儀正しさに感嘆する。

「まあな・・・ただ、一癖ありそうでもないが・・・」

目を細め、クイーンはつぶやいた。

「んで？最後の一人は？」

「それが、見当たらない。まだ来てないのか・・・？」

クイーンは大広間を見渡す。

「……こいつじゃねえか……？」

バニーが、慚然と指差す先には……。

何とも愛らしい……坊やが……。

「えへへ。ケイゴです！よろしく」

「まあ……バニーの婚約者ゆうつら……こうもなるやろなあ……」

成人まで時間のかかるこの世界で。

バニーと同じ年の婚約者が……。

元バニーと同タイプでも。

不思議はないってことで。

そんなこんなで、会場の時間は流れていったのであった。

アリスはソファに腰かけ、沈んだ表情をしていた。

その隣に、リアンも腰掛ける。

「ごめんな、アリス。心労増やして」

ちやかすように、リアンは言った。アリスも、苦笑でそれに返す。

「……俺も、この選択をした。そして……」

「元の世界より……俺たちより……クイーンを選んだんだ……？」

意地の悪い言い方を、アリスはした。言って、自分で後悔する。

「ああ……でも、よかったよ。もし、元の世界に戻っていたら……後悔していたと思う……」

「リアンは……幸せ？」

その問いに、リアンは優しい柔らかい表情でうなずく。

「……ああ。人を愛せて、幸せだよ……」

ちくりと、胸が痛む。

「俺は・・・わからない・・・」

「・・・アリス・・・。この選択はとっても難しいし、とても残酷なものだと思う。この選択一つで、アリスは幸せにも、不幸にもなれると思う。・・・時間はシンデレラの魔法の解ける12時まで・・・。よく、考えるんだよ・・・」

リアンは、アリスと額を合わせながらそう言った。

「・・・うん・・・」

リアンは、軽くアリスの背を叩いた。

「まあ、なるようになるよ。じゃあ、行こうか」

なぜ、すぐに帰ると言えないのか。

何が心をここに留まらせるのか。

帰ればいい。

いる必要なんて、ない。

捨てられない、家族もいる。

早く帰らないと、戻れなくなる。

なのに。

切なそうに、眉をひそめるバニーの顔が・・・。
頭から離れないのは、なぜ？

）
続
）

第8話 告白。（後書き）

いろいろ設定に無理を感じる今日この頃。こっちの世界のこともう少し具体的に決めとくべきですね 何分、作ったのが中学の頃だからなあ。あんまりまんま使うのも考えものですね（笑）もうしばらく、アリスやらその周りの人間やらの葛藤が続いていきます。しばらくシリアスっぽくなるかなあ？なるべく読みやすく話は続けていくよう頑張ります 評価や感想を、またよろしくお願い致します

第9話 アリスの思い（前書き）

嫁騒動勃発中。いよいよ、アリスは決断を迫られつつあります。ちよっとシリアスめな回でございます。

第9話 アリスの思い

「へー、マスターってこんなに腰細かったんだ？」

「……！！！」

「白、似合いますね」

「……！！からかわないでください！！2人とも……！！」

マスターとガーデンは、少し遅れて会場に来た。そして。きれいにドレスアップしたマスターは。来て早々に、クイーンとバニーに絡まれている。

「汚い手でマスターに触るな」

その様子を横目で流していたガーデンが、ムスツとしてマスターの腕を引き自分の胸の中に取り返す。

「！！……へー。何があつたか知らないが。よかったなあ。マスタ

ー」

くくくと笑いながらクイーンは言う。

「え！？」

真っ赤になりながら、マスターはガーデンの胸の中に納まっている。

「そういえば、リアンとアリスは？」

にやにやとマスターをからかうクイーンに、ガーデンは無表情でそう聞いた。

「そういえば、少し遅いな……」

「ま、じきに来るだろう。リアンもついているし。……後は、バニーが夜の12時まで、婚約者を選ぶだけだ」

バニーは、クイーンの言葉に。小さくああ、と答えた。

「ひどいですよ！！リアンさん！アリスさん！！」

会場に入るやいなや。血相を変えて、2人の元へマスターが駆け

寄って来た。

「・・・え？」

「え？じゃないですよ！！アリスさん！！何で、ドレスじゃないんですかー！！」

顔を真っ赤にして。目じりに涙をためて抗議するマスターに。

・・・忘れてたよ・・・。

そう言えば。

今日のために衣装合わせとかしてたな・・・。

ごめん、マスター・・・。

マスターのみ、律儀にドレス着用で来ていたのであった・・・。

「い、いやあ、着方がわかんなくって・・・！」
とりあえず。

忘れていたとは言えない雰囲気なので。適当にごまかすアリスに。

「そんなの！バニーさんに着せてもらえばいいじゃないですかー！」

「なっ・・・！！！！」

「ぶっ・・・！！」

天然な発言っておそろしい・・・。

横でリアンが肩を震わせて必死に笑いをこらえている。

アリスは、マスターの天然発言に思わず真っ赤になる。

「そんなの・・・！」

「そうだよねえ。男同士なんだし？問題ないじゃんねえ」

いつの間にやらマスター陣営に寝返ったリアンが楽しそうに言う。

「リ・・・リアンっ！！！」

確かに。男同士だけど・・・！！
でも。

ああ。どうしてこんなに。

バニーのことを考えると、落ち着かなくなるのか。

「いっ……いいの!!」

アリスは、やっとそれだけ言うと、2人の元から逃げ出す。

顔の赤みを隠すため、下を向いて歩いてしていると。前方に人がいるのに気付かず、思い切りぶつかった(当たり前)。

「す、すいません!」

鼻を押さえながら、ぱつと上を向くと。そこにいたのは……。

「ああ、アリス」

「!バ、バニー!？」

何てタイミングの悪い。

アリスはの顔は、引きかけていた赤みがまた増しだす。

「……?遅かったね。顔が赤いけど、熱でもあるの?」

心配そうに見つめてくるバニーに。

ますますアリスは赤面する。

「あ、や……う、うん」

もう。しどろもどろで。適当に返事をしてしまう。

バニーの顔をまっすぐ見れなくて。視線をはずすと、見慣れない3人がそこにいることに気付く。その中の一人と目が合う。すると、睨むように視線を返される。

「こいつが最後の一人?」

いきなり横柄にそう言われ、アリスは面食らう。

「ああ。アリスだ」

バニーは短くそう告げる。

「ふーん。俺はレン」

「はじめまして。ソウと言います」

「ケイゴです!」

3人から自己紹介をされ、とりあえず、アリスも名乗った。

「さ……佐久間アリスです……」

言いながら、バニーに疑問を目で訴える。

「婚約者候補の方たちだよ」

バニーは優しく微笑みながらそう言った。

ああ、これが……。と、アリスはその3人を改めて見やる。

何と言うか……。濃いメンツだなあ……。

「なあ、バニー。こんなガキどもなんて放つといて俺と2人で楽しもうぜ？」

レンは、妖艶な笑みを浮かべバニーの肩に腕を回す。

「バニー様の前で下品な言動は謹んでいただきたい」

その腕を払いながら、ソウは言った。

そのやりとりを、バニーは無表情で見やっている。アリスはその横顔を心配そうに眺めていると。

その視線に気付いたのか、バニーはアリスに微笑み返す。

「……！」

なぜだか。その笑みを直視できなくて。思い切り視線をはずしてしまう。

「アリス？どうしたの？具合、悪い？」

心配そうに、バニーが声をかける。

「え、あ、ちょっと……」

赤らむ顔を見られないように、下向き加減でそう答える。

何だか、バニーのそばに平然といられない。

「大丈夫？部屋で休んで来ていいよ？12時までに帰って来ればいいんだし」

「そ、そうするね……。！すぐ、帰ってくるから！」

アリスはそう言つと、逃げるようにして会場を出た。

どうしよう。

どうしよう。

頭が混乱している。

バーニーを必要以上に意識してしまう。

リアンに、あんなことを言われたからだ・・・。

「・・・ずるいよ・・・」

リアンが、俺の義兄で。

あちらの世界を捨て、こちらに来た。

「ずるい、よ・・・」

胸が締め付けられる。

呼吸が、苦しい。

俺は、どうしたい・・・？

考えたくない。

何も、考えたくない。

部屋の扉を、後ろ手に閉める。

しん、とした部屋に入ると。急に、リアンの言葉を思い出した。

『俺は・・・世界で一番、クイーンを愛しているよ・・・』

だから、後悔していないと、話してくれた。

でも、俺は。そう思えるほどバニーを愛しているのだろうか。それ以前に、俺はバニーのことをどう思っているのか。

俺は・・・家族や友達を、捨てられるのだろうか・・・。

「どうすれば・・・いいんだ・・・」

頬を、涙が伝う。

とめどなく、流れ始める。

早く帰りたいと、思っていたはずなのに・・・。

今は、帰りたくないと思う自分がいる。

この、胸に大きくつかえるものは何なのか。

アリスは、リアンと寝ていたベッドに再び身を沈めた。

いつの間にか、深く、眠ってしまっていた。

気が付くと、時計は夜の7時を指していた。

時間だけが無常に過ぎていく中。

アリスは、いまだ答えを持たぬまま、会場へと向かった。

～ 続 ～

第9話 アリスの思い（後書き）

いかがでしたでしょうか。いつも読んでいただき、ありがとうございます。嫁騒動のようやく半分まで来た感じです。これからアリスはどうなっていくのか。次回は、新展開があります！ので、どうぞお楽しみに

第10話 嘘と真実（前書き）

もう10話目になるんですね。早いものです。ではでは。嫁騒動の続きをご覧ください。

第10話 嘘と真実

「アリス、心配したよ。大丈夫？」

広間へ戻ると、バニーが駆け寄って来た。心配そうに、アリスを見る。

「うん・・・」

そんなバニーに、アリスは笑顔を向けたが、どこかぎこちない。

笑顔って、どうしたらよかったっけ。

俺は、うまく笑えてる？

「アリス!!」

どん、つと背を押される。後ろを振り返ると、リアンがいた。

「・・・そう固くなりなさんな」

アリスの表情を見て、リアンは困ったように笑う。

「自然と答えは出てくるよ」

バニーに聞こえないくらい、小さな声で。

「リアン・・・」

アリスは、なぜか胸にこみ上げてくるものを感じた。暖かいような、苦しいような。

「それより、気をつけなよ」

リアンは、笑みを消し真面目な顔をしてアリスに向き直る。

「俺たちとアリスが仲がいいんで、焦ってる奴もいるから」

ちらりと、リアンが部屋のすみを見やる。その視線を追うと、そこにはアリスのほうを睨むように見つめるレンがいた。レンは、アリスと目が合うと、きびすを返してどこかへ行ってしまった。

「・・・レン？」

「他の2人も、何考えてるのか・・・」

クイーンの近くで来賓と話をしているソウ。会場を駆け回るケイゴ。

国家としてではないが。

この世界での地位と、このバニーの妻になるということが大きな意味を持つのだと、少しばかりアリスは感じてきた。

大きな競り合いもなく、権力抗争もないのは上に立つものの裁量なのでは、と。クイーンの、この世界のトップに立つ王家の物の力なのだと。追随や小競り合いの許されない世界。すべては、己の意思のみが頼りとなる。そんな世界なのではないかと、アリスは感じていた。

そんなことを、うつすら考えていると。人ごみの中からマスターとガーデンが現れた。

「アリスさん、大丈夫ですか？」

「うん、マスター。もう大丈夫」

心配そうに駆け寄るマスターに、アリスは笑って答える。

「・・・まだ少し顔色が悪いぞ・・・」

ガーデンは、アリスの顔を見てするどくそう言った。

「・・・少し、外の空気を吸って来るよ」

アリスは小さくそう言うと、再び会場を後にした。

「・・・」

その後ろ姿を、切なそうな表情で見つめるバニーに。

「・・・最後の選択だ。邪魔はするなよ・・・バニー」

リアンは、小さくそう言った。

あの会場にいただけで、息が詰まりそうになる。

アリスは、賑わう館をあとにし、涼しい風が心地よく吹く中庭へと出た。

いまだ、その心は晴れず。
どうしていいのか、わからず。いつそ、誰かに強制的に決めて欲しいくらいだった。

最善の、道を。

「こんなところで、何してんのさ」
「・・・！レン・・・さん」

顔を上げると、木にすがりにやにやと笑うレンがいた。レンは、木から離れアリスの方へ歩み寄る。

「ねえ、あんたバニーの何なの？」

レンはアリスの前で足を止め、低くそう言った。

「俺はねえ、ガキの頃からずーっとバニーの正妻になるって決まっていたんだよ」

だって、彼は婚約者なのだから。

「あんたはさ、遊びなんだよ」

クスクスと、耳元で不快な笑い声がする。

「好きだとか、愛してるだとか、あんたも言われたんだろ？」

「・・・あんたもって・・・？」

頭がぐらぐらする。

「俺も言われたんだよ」

世界が、崩れる音がした。

「ていうか、何で外来者をあんなに熱心に王家の人間が身内に入れようとするかわかる？こつちのことは何も知らないうえに、こつちにきちんとガキの頃からの婚約者がいるにも関わらず・・・」

お願い、もう、しゃべらないで。

「王家の人間は、外部からの勢力を入れるのが嫌だからさ。権力争いも起きかねない。その点、よその世界から来た人間ならその心配もない。王家の血は守られて、争いも起きない」

そう、なぜなのか、ずっと不思議に思っていた。

何で、ぽつと出の俺をみんな受け入れているのか。

まして。

―世界の王子の嫁に迎えようなど・・・。

「ただ、それだけなんだよ。あんたの価値は。だから、バニーはお前を嫁にしようとしてんのさ」

呆然と、レンの言葉を受けるアリスに、レンは笑いながら続ける。

「本当はね。バニーは俺のことが好きなんだぜ？」

勝ち誇ったような、笑み。

「あんたがいない間に、よろしくヤツてたんだよ・・・」

シャツのボタンをはずし、眼前につきつけられたのは。

無数の赤い印。

「俺のことを、本当は・・・一番に愛してるんだぜ？」

アリスの頬を、知らず涙が伝う。

その様子を、レンは満足そうに見据えるとアリスを一人残してその場から去っていった。

「・・・そだ・・・」

アリスは、立っていられなくて地面に膝をつく。

「うそ・・・！」

だって、愛してるって言ったのに。

好きだって、言ったのに。

全部嘘だったの？

全部、国のためだったの？

全部・・・。

涙がボロボロとこぼれる。

「も・・・わか・・・ね・・・！」

何が真実で、何が嘘？

ねえ、誰か教えて。

誰か、助けて。

ねえ、誰か・・・。

ドクン。

そこは、自分以外誰もいない教室。部活が終わって、帰ろうとして。忘れ物に気付いて、戻って来たのだ。

「・・・？何、だ？」

誰もいない、教室。アリスのいなくなった、世界。もう、早2ヶ月がたっていた。誰もが彼の存在を忘れ。彼の所有物は無へと還った。

ドクン、ドクン。

「何だ・・・？」

言いようのない、不安。

なぜか、胸騒ぎがする。こんな時は、いつも・・・。

「ア．．．リス．．．？」

どうしたらいい？

バニーは、俺を愛していなかった？

「アリス．．．なのか．．．？」

誰でもよかった？

向こうの世界の人間なら、誰でもよかった．．．？

「アリス！！？」

誰か．．．タスケテ．．．。

ドクン。

ドサ。

すぐ横に、何かが落ちる。アリスは驚いてその音の先を見る。
すると、そこには．．．。

「いつて．．．」

「裕．．．馬．．．？」

「あ？」

裕馬は頭をさすりながら、呼ばれた方を向く。そこにいたのは。今まで、忘れることのなかったアリスがいた。

「アリス・・・!!?」

今度は裕馬が驚く番である。

ナンデ?

ドウシテ?

「裕・・・!」

裕馬を見て、安心したのかアリスは再び泣き出す。その涙は止まることがなく。

「・・・やっぱり、泣いてた」

ふうつと、裕馬はアリスの肩をポンポンと叩く。

「お前泣くとさあ、何か胸騒ぎがすんだよなあ。ホラ、もう泣くなつて」

「・・・っ」

それでも、アリスは泣き止むことなく・・・。

「・・・まあ、好きなだけ泣いとくか」

諦めたように呟いた後。

「とりあえず・・・ここがどこなのか知りてえ・・・」

あたりを見渡しながら。裕馬はそう、ため息をついたのであった。

〈 続 〉

第10話 嘘と真実（後書き）

裕馬登場。これからどんな風に動いてくれるのか。他の候補者達の動向も気になる所ですね！しかし・・・アリスがだんだんボロボロになっていくなあ（お前が言うな）。続きはなるべく早く書きます！
気になる所で終わっているの（^^;）
ッセージも頂きました！ありがとうございます「アリス」を楽しみにしていただけにいると思うと本当に嬉しくなります！！読者の皆様、遅々としていますが、どうぞこれからもよろしくお願い致します！

第11話 続・嘘と真実（前書き）

嫁騒動もクライマックスでございます。最近はシリアスが続いておりますが、お付き合いのほどよろしくお願いいたします

第11話 続・嘘と真実

「アリス？どこ？」

外の後期を吸いに出たきり1時間たっても戻って来ないアリスを心配し、リアンは中庭に探しに来た。

「あれ・・・？」

アリスをなだめながら。

アリスを探して来たらしい男の姿を見つけ。

あの人・・・どつかで・・・？

裕馬の視線に気付いたのか、リアンが寄ってくる。

「そこ？」

ひょこつとリアンが顔を出す。

「・・・？アリス？」

明らかに様子のおかしいアリスに、リアンは怪訝な顔をし裕馬の方を向いた。

「・・・あれ・・・？君は・・・」

新たな、嵐の予感・・・。

「リアンさんから一通り離しは聞きました」

会場の奥のバルコニーで、何やら深刻な話をする一団。アリスはリアンによって部屋へ戻された。まだきつと、泣いているのだろうけれど。一人にして欲しいと言われ、リアンも会場へ戻って来た。

裕馬はコホンと咳払いをすると、一同を見据えて言った。

「何で泣いてるんですか」

「そのまんまやん・・・」

小さく双子が突っ込む。

「僕もそれが知りたいんだけど」

はぁ、とため息をつきバニーが答える。

「今来たばかりで知るかよ!!」

裕馬はそのバニーの態度につっかかる。

何だかもう、ピリピリした雰囲気が漂う。

「とにかく、帰りたいんだけど」

裕馬は苛立ちながらそう言った。こんなところに長居する必要などない。まして男の嫁になるなんて、わけがわからない。

「そんな・・・」

「待ってくれ！裕馬くん！まだ・・・」

アリスを連れて今すぐ帰ると言う裕馬に、マスターとリアンが声をあげる。

「そうやって・・・!!」

裕馬は大きな声を出すと一度言葉を切って、感情を抑えリアンに答える。

「そうやってアリスを追い詰めないでください。アリスがそういう選択が嫌いなもの知ってるでしょ？リアンさん」

そのセリフに、リアンはぐつと詰まる。

「・・・どうする？あと3時間だぞ」

ガーデンがクイーンたちを見やりながらそう言う。

「いーじゃん。別に。アリスが候補からはずれりゃアリスと俺は帰るんだから」

むしろさっさと時間よたて、と裕馬は思う。

「そうだが・・・」

誰もがこの不測の事態をどうしたものかと考えあぐねる。

「どおしたの？みなさんお揃いで」

そこへ、相変わらず人をバカにしたような笑みを浮かべたレンが現れる。

「・・・」

それに対し、バニーは冷やかに見つめるのみで返事を返さない。

「・・・何だよ。その目は。アリスにはあんな顔するのに」

チツとレンは舌打ちをする。

「何の用だ？レン」

イライラした様子でクイーンが口を挟んだ。

「・・・別にイ。アリスはどうしたのさ。いゝつもあんたらいたじゃん？」

「お前には関係ない」

含むようなレンをバニーはピシャっとはねつける。レンの目が険を帯びる。

「レン」

その様子をいつから見ていたのか。ソウが割って入ってきた。

「・・・何だよ」

「・・・あまり悪巧みはするものじゃないよ」

ソウのその言葉に、全員が一斉にレンを見る。レンは、わずかにたじろく。

「・・・何のこと・・・」

ガンッ

いつものにやけた顔で。ごまかそうとしたレンを。バルコニーの柵に押さえつけたのは・・・。

「バニー・・・！」

ぎりぎりと、レンを締め上げるその様相は。怒り以外の何物でもなかった。

「アリスに・・・何をした・・・！！」

「何・・・だよ・・・！」

レンの顔に恐怖が浮かぶ。

「言った方が身のためだと思うが」

そのバニーに乗じるように。冷たい瞳で、クイーンが言った。

「く・・・す、少し・・・！からかっただけだろ・・・！？」

最後の強がりで、はつと鼻で笑いながらそう言ったレンの顔を、バニーが容赦なく殴る。

「アリスに、何を言った」

その顔は。背筋が凍るような冷たさと。怒りをたたえていた・・・。

「う・・・え・・・」

アリスは止まらない涙を何度もぬぐいながら。枕に顔をうずめた。

何でこんなに悲しいの？

何でこんなに涙が出るの？

もう、何も考えたくない。

何も信じられない。

その時、ばたん、と音がして部屋に誰が入って来た。

その音に、アリスが振り向くと。

「・・・アリス・・・」

走って来たのか、肩で息をしているバニーがいた。

バニーを見ると、アリスの頭の中でレンの言葉が反芻する。

「や・・・だあ・・・」

アリスの瞳から、さらに涙が流れ出る。

「アリス・・・！レンの言ったことは・・・」

「もう嫌だ・・・！！何も聞きたくない・・・！！」

アリスは耳を塞ぐ。

もう、何も聞きたくない。

何が真実で。

何が嘘かなんて、わからない。

そんなアリスを、バニーは抱きしめて自分のもとへと寄せる。アリスの体が強張る。

「アリス、僕はアリスだけを愛してるよ」

耳元で囁く、優しい言葉。

それなのに、今はその言葉が刃のように胸に突き刺さる。

「・・・嘘っ・・・！！だって・・・レンが・・・！！」

私を本当は愛していないんでしょう？

私を、利用したいだけなんでしょう？

ねえ、お願い。

もう、私をかき回さないで。

「アリスは、僕とレンのどっちを信じるの？」

「だって・・・！」

誰の言うことが真実で。

誰が誰を愛しているの？

「信じて、アリス。僕はアリスしか愛していない。レンなんて、抱いてないし、抱く気にもならない。・・・アリス以外に、欲しいものなんてない」

バニーの腕から逃れようとするアリスを、バニーはより一層強く抱きしめる。

「ふ・・・う・・・」

「ごめんね。アリス。一人で悩ませてしまつて」

「大好きだよ・・・アリス」

バニーは、アリスの耳元で。まるで子どもをあやすように。優しく、優しく、言葉をかけ続けた。

一方。別室には。裕馬、リアン、マスターがいた。

「アリスは前にもあんなふうに泣いてた」

裕馬は、ポツリと語りだす。

「親の・・・離婚の時？」

「そうです。アリスは、どっちも好きだったから・・・どちらに付いて行くのかと選択を迫られて。最後まで悩んだ。本当に、見ていて切なかったですよ・・・」

「最終的には母親について行って、その2年後にうちの親父と再婚・・・。ま、うちもバツ1のコブ2つ付きだったけど」

そう話したリアンに、裕馬以外のみんなが驚く。

「え！？じゃあ、アリスさんとリアンさんて義兄弟なんですか！？」

「そうよ」。一緒に暮らしたのはほんの数年だけだね。こっち来ちゃったから」

苦笑しながらリアンはそう言った。

「・・・あんな上体のアリスを・・・あいつに任せといて大丈夫なのかよ」

裕馬はぶすつと言った。

「大丈夫でしょ。あの子は、誰よりバニーを大切にしてるから」

「・・・んなの・・・わかんねーよ・・・」

仮にも、アイツは。どんな理由があつたとしても。アリスを不安

にさせたのだから・・・。

「こっちは終わったぞ」

ばたんと、扉が開きクイーンたちが入って来る。

「帰ってもらった？」

「ああ。まあ、無茶を言うのはいつものことだし、こんな事態でかな。結果は追って報告すればいいさ。結婚しますっつー宣言ともにな。だいたいがこういうことでもないとなと国の人間と会わないからやってる形だけの式だからな」

クイーンやガーデンは、来賓を帰して回っていた。もう、12時となっていた。本来ならば、12時ちょうどに、バニーの結婚相手を発表する予定であった。しかし、今回、こんなこととなったためとりあえずお開きという形をとったのだった。

「クイーン、あのアホはどないするん？」

「海にでも流す？」

あとから入って来たホワイトとブラックは楽しそうに言う。アホとはもちろんレンのことである。今は、トランプ兵により拘束され、別室に換金されている。

「アリスに処分させよう」

クイーンはしばし考えたあと、そう言った。

「そうだな」

それがいいだろう、とガーデンも相槌をうつ。

「お話中、すみません」

そこへ、ソウが入って来た。

ソウとケイゴはまだ残ってもらっていたのだ。
「すまないな。残ってもらって。で？どうした？」

クイーンが促すと。

「・・・アリスさんは、どういう決断を下されるのでしょうか・・・？」

「・・・もう少し、待ってもらえるかな。ソウ」

その質問に、リアンが答える。

「ケイゴ、待つよ～～！！」

「えらいね。ケイゴくんは。はい、アイス食べる？」

にこやかお兄さん（お姉さん？）はそう言ってケイゴにアイスを渡した。

「みなさんも、紅茶でも飲んで一息つきましよう」

「アリス、落ち着いた？」

「・・・うん・・・」

アリスの涙は、ようやく止まったようだった。

「アリス、愛してるよ」

バニーはアリスの目を見て、優しくそう言った。

「僕はね、アリス。アリスがどこの世界の人間かなんて関係なく、アリスに惚れたんだよ」

一言、一言、バニーは話し始める。

「子どもの頃からの婚約者も、国のことも、僕にとってはどうでもいいんだ。ただ、アリスを愛したただけなんだよ。王家の人間が、外来者を結婚相手に選ぶことが多いのはね、損得なしで一緒にいてくれるからなんだよ」

国も、権力も、関係なく。

そこにあるのは、相手を思うその気持ちだけ。

「だから・・・僕がアリスを好きな気持ちは、本当なんだよ」

バニーのその言葉一つ一つが、アリスから不安を取り除いていく。

「アリスは・・・僕のこと・・・」

バニーはそこまで口に出してそれ以上は黙ってしまった。

もし、アリスに嫌いだと言われたら？

そう考えると、続きが出ない。

どれだけ相手を思っても、相手から思ってもらえないこともある。それに、アリスには、元の世界に家族もいる。友達もいる。

「・・・だよ・・・」

アリスは、ぽつりと言った。

「・・・え？」

「バニーを信じる。だから・・・ずっと、俺を好きでいて・・・。俺も・・・バニーのことが、好きなんだと・・・思うから・・・」
今はまだ、断言ができないけど。

あなたの言葉にこんなに一喜一憂するのは、きっと・・・。

「アリス・・・！」

バニーは、そのアリスの言葉に思い切りアリスを抱きしめる。

「ずっと、僕はアリスを愛し続けるよ・・・」

その抱きしめる腕は、かすかに震えていた。

アリスは、その心地のよい胸の中で、いつの間にか眠りについていた・・・。

翌日。

それはもう、超がつくほどいいお天気だった。

「・・・まだ、目、はれてるなあ・・・」

「しかたないよ」

鏡を覗いていたアリスの後ろからバニーがひょっこり現れる。

「・・・！！！」

それだけのことなのに、アリスは赤くなってうつむいてしまう。

「アリス」

その様子を見ながら、バニーは軽く笑いながら、アリスを呼ぶ。
「な、何？」

そう言いながら、振り返ると。ちゅっと、バニーに軽くキスされた。

アリスはゆでだこになりながら口をパクパクさせている。

「クイーンたちが待ってるよ」

優しく微笑むバニーに差し出された手をとって。アリスとバニーはクイーン達の元へ向かった。この時、アリスは一つのことを、心に決めていたのだった・・・。

～ 続 ～

第11話 続・嘘と真実（後書き）

愛してるを連呼するバニー……。ある意味お前はすごいよ!! 何とかハッピーエンドの方向ですね!（何とかって……?）だんだん愛の国っぷりを発揮してきております。たぶん、嫁騒動は次で終わると思います。続きを楽しみにお待ちください

第12話 決着（前書き）

長らく続いた嫁騒動。こんな結末・・・ある意味予想しきれません・
・（笑）私の中では今回の話が読め騒動のメイン。

第12話 決着

「本当ですか！？アリスさん！！」

一番最初に声をあげたのはマスターだった。感激のあまりか、うつすら涙が見える。

朝、アリスはクイーンたちのいる部屋へと行くと、ここへ残るところ、バニーの正式な婚約者となることを伝えた。

「よかったねえ、バニー」

リアンも笑顔で息子の髪をぐしゃぐしゃにしている。・・・嫌がらせか。

「じゃあこれで、正式な婚約者は決まったわけだ？」

ガーデンが、その場にいたソウとケイゴを見ながらそう言った。

「そうだな・・・」

クイーンも、ソウとケイゴに向き直る。

「アリスが婚約者になったんだ！おめでとお！じゃ、ケイゴ、家に帰ってパパとママに報告するー！！」

元気一杯ケイゴくんはそう言うといそいそと帰り支度を始める。

リアンは、トランプ兵を呼び、ケイゴを無事に親元まで送るよう伝えた。

まったく。

残念そうなそぶりなどない。

というか、どうでもいいんだね・・・。

「僕も、別にかまいません。バニー様にはアリスさんが合っていると思いますし・・・それに・・・」

ソウは、にこにこ続けた。

「僕、一目ぼれをしてしまったんです。自分はバニー様の妻になるの思いを持ってきたのですが・・・友人を思う、その心に惹かれました」

ソウは、その思い人へ向きかえる。

「絶対、あなたを振り向かせてみせます。裕馬さん」

一瞬。

時が止まった。

「……へ？」

まったくもって。

自分へ話しの矛先が向くとは思っていなかった裕馬は。思いつきり。

間抜けな声を出した。

「これはまた……意外な……」

リアンは笑いをこらえるような笑いを浮かべ。

「じょ……冗談じゃ……!!」

裕馬は突然の申し出に青くなる。

「モテモテですね、裕馬さん」

にこりとマスターが笑む。

ていうか。

モテたくねーっつーの!!

「お……俺はホモじゃね〜!! あ、アリス!!」

いつぞやの誰かのような雄たけびをあげつつ。すぐのようにアリスを見る裕馬に。

「親友として応援してやるよ!」

いつもの仕返しとばかりに。笑顔全開。

「……ひど……!!」

落ち込む裕馬に、リアンが肩を叩く。

「かわいそうにねえ。裕馬くん。アリスは鈍感だから気付かないんだよ」

こんなに、アリスを思ってるのにねえ。と浸るリアンに。裕馬はきよんとし、リアンを見つめる。

「何が・・・ですか？」

「え？何って・・・裕馬くんがアリスを好きってこと」

「そうなんですよ？」と問うリアンに対して。

「ぶっ・・・！！やだなあ！それ！すげーキモイっすよ」

ゲラゲラと声をあげて裕馬は笑い出す。

「俺がアリスのこと心配したりしてんのは、別に恋愛感情とかじゃないッスよ。マジ、友人として、です」

「きっぱり言いのける裕馬に。リアンはそうなの？とつまらなそうに声を上げる。」

「・・・それでさ、裕馬は、どうすんだ？」

笑い転げる裕馬に、アリスは表情を曇らせながら問いかける。

自分が、呼んでしまった、裕馬。

でも、裕馬にも、自分と同じように家族がいて、友人もいる。ずっと、ここににいるわけにはいかない。

「あ？まあ、帰るのは無理だろうし。俺もこっちに残るわ」

そんな、アリスの戸惑いを、一蹴するこの悪友。

「アリスのこと忘れるのも早かったしな。みんな。こっちの時の流れって向こうより遅いんだろ？もう俺のこと忘れられてるだろうし。ま、人生こんなことがあってもおもしろーよな！」

それでいいのか！？

と突っ込みたくなるのは・・・間違っていないだろう。

まあ、そこは・・・裕馬だし、ってことで片付けるといたしまし
よう。

そんなこんなで。円満にその場が流れていたところへ。

「てめえ！！離せ！！」

静寂を突き破るような怒号。

「・・・来たか」

クイーンが扉を振り返る。そこへ入って来たのは・・・。

トランプ兵に連れられた、レンだった。ぎゃあぎゃあ喚くレン。

「さて、最後にこいつをどうするか。アリスに決めてほしいんだが」
クイーンはため息をつきながらそう言う。

「てめーら！王族だからって俺にこんなこととしていいと思ってんのかよ！！ふざけんな！！」

「どこまでも騷のなつてない犬だねえ」

リアンも静かにレンを見下ろしながらやれやれといったふうである。

「だいたい・・・！お前らみんな、そいつに買収でもされたんじゃないの！？でなきゃ、俺がそんな奴におとるわけねーだろ！！」

もう、言いたい放題。

謝罪する気ゼロ。

「・・・騷がなつてない上にナルシストかよ」

呆れたように言うガーデンに。

プツ・・・と何かが切れる音が聞こえた・・・。

ぷつ？と思っている間に。アリスがつかつかとレンの元へと向かう。

レンの前で一度止まった・・・と思った次の瞬間。

ゴツ・・・！！

鈍い音がして、レンの体が後ろへ倒れる。

「誰が・・・テメーに劣るってえ？」

地を這うような、声。

「昨日のことを謝るかと思えば・・・」

その様子に、裕馬が反応する。

「げ……！！アリスが切れる……！！」

そう言つと、ぱつとテーブルの後ろに隠れる。

「だ……誰が謝るかよ……！！」

アリスから唐突に蹴りをくらつて一瞬、面食らつたが。そのおかげでランプ兵の拘束から自由になった。それをいいことに、レンはアリスめがけて殴りかかる。

しかし……。

レンはまだ知らなかったのだ。

本来ならば、ここで土下座をしてでも謝っておくべきだったことを……。

「アリス……！！」

バニーがそれを見て声をあげた。しかし、そんなバニーの心配もよそに、アリスはひょいっとレンの拳をよける。そして、足をかけ、相手のバランスをとる。

そこへ、これでもかとはかりに。

踵落とし。

「あいつ……死ぬぞ……」

恐ろしい予言をする裕馬に。

一同は……テーブルの後ろに隠れるべきかな……と思うのであつた。

バランスを崩したところに踵落としをくらつたレンは、地に体をつく。

そこから、起き上がろうとした瞬間。

頭が。

地に引き戻された。

「まあ、キレたもんね」

レンの頭には……アリス様のおみ足が……。

「あ……足をどける！！こんなことして……いいと思つてんの

か・・・!!」

屈辱的な体勢となつてもなお。

怒鳴りちらすレンに。

「ああ！？親の力がねーと何にもできねえくせに・・・いい気になつてんじゃねー!!」

さらにもう一発。

「・・・!!げほ・・・!!」

しかも鳩尾。一直線。

「・・・いやあ・・・元気に育つてくれて、お兄ちゃんは嬉しいよほろりと、テーブルの後ろで浸るリアン。

「前にキレた時はこんなのじゃなかったんだがなあ」
のんきに分析をするクイーン。

「止めたほうが・・・」

「いいんだよ。マスター。あれくらい」

しれつとガーデンは言うが・・・あれくらい？

レンとアリス以外の全員が・・・テーブルの後ろなのにですか・・・？ガーデン様。

「よ・・・よくもつ・・・!!」

それでもめげないレンくんは。

自棄になつて近くにあつた果物ナイフを手にとるとアリスに切りかかった。突然のことにアリスはよけきれず、アリスの頬を赤い雫が伝う。

「アリス・・・!!!!」

その血を見てバニーは慌てて飛び出そうとする。他の人間もレンを止めようと立ち上がる。が。

「わっく!!お前らよせ!!血を見たアリスは見境ないんだ!!やめろ!!手を出すな!!」

と、裕馬が必死の形相でバニーを食い止める。それを聞き、一同、とりあえず様子を見ようかな、なんて、
バニーを裕馬が必死で止めている間。

アリスは、自分の頬を伝う温かいものをぬぐう。
真っ赤な、血。その雫は、絨毯に点々と染みを作った。

「は……!! ざまあみやがれ!!」

レンは乾いたように笑いながらアリスを見やる。

その。笑いは。

次の瞬間。

悲鳴に変わった。

「ぎゃあ!!」

血を流しながらアリス様。渾身の一撃を顔面めがけて容赦なく。

「……俺の顔に……何しやがんだ!! お前の顔とは違うんだぞ!! テメーやつぱ死ね!! てか殺す!!」

何と言うか。

美人が怒ると般若になるっていうよねって感じ?

アリスはレンの胸倉を掴み、無理やり立たせる。

これには。さすがのレンも恐怖を覚えてきたのか……。

「ひっ……!!」

顔から余裕は一切消え、恐怖のみがうつる。

「……もう、そろそろかな……」

そんなバイオレンスなアリスと時計を交互に眺めながら、裕馬くん。

「覚悟は……」

「ひー!! すいません! すいませんでした……!! もう勘弁してくれ……!!」

ついに泣きの入るレン。

「……! え? あ、うん。わかればいいんだけど」

アリスは、今までの形相はどこへやら。あっさりとレンを離す。

「……? どうなつとるんや……?」

あまりの恐怖に今まで黙っていたブラックがぼつりとこぼす。

「あゝ、アリスなんですけど、キレても3〜5分で元に戻るんですよ……」

人騒がせツスよね」と裕馬。

その人騒がせなアリスに対し。レンはついに土下座まで始めている。

「わゝ！顔上げろって……！！」

「本当にすいませんでした　　！！」

「……きつとレンっちゅー奴は……今一生分の謝罪をしとるんやろな……」

ちよつと遠くを見ながらホワイトはつぶやく。

「あゝ、ごめん。俺、キレてた？その顔……」

「しかも、本人キレてた間のことをはつきり覚えてないんですよ……」

こちらも遠い目な裕馬くん。……そんな友人持ちたくねえ……。

「人騒がせやな……」

本心から、しみじみと。

そして、こちらではまだレンの謝罪が続いている。

「本当にすいませんでした！！あんなこと言って！！全部嘘です！！」

「……いいんだよ。レンさんがそう言ってくれたおかげで、俺も自分の気持ちに気付けたし。……俺も、バニーが好きなんだ。ごめんね。バニーは、譲れないや……」

その言葉に、レンは涙をこぼす。

汚い手を使ったのは、バニーの妻になるため。

権力が欲しかったのもあるかもしれないが……。本当は、レンもバニーのことを好きだったのかもしれない。もしかしたら、婚約者だと認識した、その時から……。

そんなこんなで。レンはトランプ兵に連れられて自分の家に帰っていった。

「やゝ、これで嫁騒動も一段落だねえ」

どっかりソファに座ってやれやれと言うのはリアン。

・・・あんた、言うほど何かしたか・・・？とつつこみたくなる衝動にかられながら。

「アリス、傷は大丈夫？」

相変わらず、アリスにだけ甘いこの男。

「あ、うん。思ったより深くないみたい。かすり傷だよ」

キレたところまで見られて何かもう恥さらしまくりのアリスは、うつむきかげんでバニーに答える。そんなアリスの頬に。手当てされた絆創膏の上から軽くキスをする。

「・・・わー!!」

アリスは突然のバニーの行動に真っ赤になる。

「・・・早くよくなるように。おまじない」

バニーは可愛らしく答える。

そんなラブラブな2人を完全無視し。

「そういえば、ソウはどーすんの？」

にこにこと、その場に残ったソウは。裕馬を見上げ。

「ふふ。ここに残って裕馬さんと暮らします」

ターゲット・ロックオン。

「な！？帰れよ・・・!!お前・・・!!」

青くなる裕馬に対し。

「わぁ、ご近所さんが増えるんですね。嬉しいなあ」

能天気なマスター・・・。

「どうぞよろしく願います」

深々と頭を下げるソウに。こちらこそと話し出す正妻たち。

「え！？や・・・ちよつと待・・・!!お、俺は・・・!!」

何やら怪しい雲行きに。

裕馬は珍しく慌てふためく。

その裕馬に対し・・・。

ぼん、と肩を叩いて哀れみの表情を浮かべるクイーンとガーデン・・・。

「・・・!!！」

いやはや。こうして嫁騒動は一段落ついたものの。まだまだ、一波乱も二波乱も起こりそうな余韻を残して。アリスとバーニは、正式に婚約を交わすこととなったのであった。

） 続 ）

第12話 決着（後書き）

いかがでしたでしょうか。どうやら仲間が増えましたね。ソウくと裕馬くん。今私はずっと悩んでいるのですが・・・。ソウと裕馬・・・裕馬×ソウとするか、ソウ×裕馬とするか・・・うん。こっちがいい！というご要望お待ちしております（笑）どっちがいいかなあ・・・。と、いうことで、アリスな話！はまだまだ続きますので、お付き合いのほど、よろしくお願い致します！

第13話 朝食戦線（前書き）

今回は、アリスと裕馬が出張ってます。あまりラブっぽくないですが。新たな波乱（？）への伏線です

第13話 朝食戦線

平和な、平和な朝が訪れました。ただ今、午前8時。ほっとくと暇な人間はうゝん、あと2、3時間・・・と（作者だけ？）惰眠をむさぼるその時間。というか、こっちに來てだいぶたつアリスなんか思い切りそのパターンで。真面目に朝ごはんを食べるのが実は今日がはじめて。

アリスに裕馬、そしてソウと。新しいご近所さんも増えましたということで。食事をしばらくクイーン邸でもある公館でみんなで摂ることとなりました。

爽やかな朝日とともに、マスターの淹れる紅茶の香り。

そして。

朝からむせ返るような・・・。

「重っ・・・!!」

料理の品々。

アリスは眼前に繰り広げられる、え？今は夕食の時間かな？と小首を傾げたくなるような料理を目の前に、うっとその一言を発する。そしてその横では。ちよつと精気の抜けたように呆然と料理を眺める裕馬がいた。

「これ、何・・・？」

嫌がらせ？とか思ってみたり。

アリスと裕馬は、渋好みなのか2人とも朝はご飯に味噌汁と決めていた。洋食は食べれないことはないのだが、長年の食習慣からかあまり受け付けない。しかも、パンにスープという次元を超越したこのメニューは・・・。2人の胃に。食べる前から大きな負担をかけるのであった・・・。

一方、2人が料理を目の前に愕然としている中、他の面々はという。

クイーンは眼鏡をかけ、何やら文書に目を通している。バーニーもその横で何やら難しげな本を読んでいた。この2人、ものを読む時の顔が一緒だ……。そして、ガーデンはというと、自分の目の前で何やらうるさく騒ぐ例の双子に鋭い一瞥を投げかけていた。投げかけられた双子には、その一瞥の意味は通じてはいないようだったが。リアンとソウはいそいそと朝食の準備にいそしみ、マスターはにこにこ紅茶を淹れる。そんな、のどかなのどかな風景に、見合わない料理。

「ていうか・・・そこだけ別世界・・・」
遠い目をしてアリスはつぶやくのであった。

ああ、食文化の違いっておそろしい。

そんな心の叫びも虚しく。
モーニングタイムは始まるのであった・・・。

改めて眼前に並ぶメニューを見て。
思わず目をそらしてみたよ。つか、匂いも強烈ね。このご飯たちふと裕馬を見やると、がつがつ食べるホワイトとブラックを引きつつた顔で眺めている。何と言うか・・・ご馳走様。

「どうしたの？アリス、食べてないみたいだけど」
心配そうに声をかけるバーニーに。今回ばかりは放っておいて欲しい気満々。

「アリスは昨日大変だったしねえ。食欲ないんじゃない？」
珍しく、リアンがアリスの欲しい助け舟をくれる。

その言葉に、アリスは便乗し、そうなんだよねーあはは。なんて答える。

「じゃあ、フルーツだけでもどうぞ」
いつでも優しいこのお兄さんは、気を使ってフルーツが盛ってあ

る皿をとつてくれる。

「ありがと」

涙が出るほど嬉しいツスよ。と思いながら。適当な量を皿に取ると、それを同じ思いの裕馬にまわす。

「急に環境が変わって、裕馬もあんまり食べれねーだろ？」

そんなアリスに対して。サンキュー！アリス！愛してるぜ なる笑顔を向け。そのフルーツの盛られた皿を受け取る。

そのやりとりを。

静かに見つめるバニーとソウがいた。

「いやはや。これはおもしろい」

それを見ながら、こんな不謹慎なことを言つてのけるのは。もちろんリアンさん。

「楽しそうだな・・・」

呆れ顔でリアンを見ながらクイーンはつぶやく。

「そお？」

言ってるその顔には・・・満面の笑み、であつた。

そんな楽しい朝食会も終わり。だるだるとしかし、各自が好き勝手に過ごしている時間に。

「・・・腹へつた・・・」

何ともそぐわないアリスのこの一言。

いつもはおなか一杯食べるご飯と味噌汁を抜いて。しかも起きた時間は早いし。食べたのはフルーツのみ。そりゃあ、健全な男子高校生はお腹もすくよ。ソファで隣に座る裕馬なんて。アリスより代謝のいい分。余計辛そうに見える。

そんな状態で昼ご飯までの時を過ごそうとしていた2人に。扉のところではリアンが手招きをしている。

「・・・？俺たちかな？」

「みてーだな・・・」

2人は、呼ばれるままにリアンの元へと駆け寄るのであつた。そ

してそのまま、その部屋をあとにした。

「どうしたの？リアン。どうか行くの？」

行き先も告げず、公館を出て行くリアンに対し、アリスが問う。

「ふふ」。ま、ね。2人とも、腹減ってんでしょ？ま、誰だって朝からあの料理はちよつと引くよねえ」

あはははは」とリアン。

「気付いてたんですか？」

裕馬のその言葉に。リアンはやりと、当たり前だよん。とだけ答えた。

そして、3人は公館から5分ほど歩いた場所に着いた。

そこには……。

「うつわ……」

ここは、さっきまでいた場所と同じ敷地にあるもの？と、一瞬目を疑いたくなるような。竹林。

「純……日本建築……」

その一角に建つ、昔ながらの日本家屋。

リアンは、呆然とその屋敷を見つめる2人をどうぞ、と中へ通した。

「ここはね、離れなんだよ。俺、日本文化好きだからさ」わがまま言ってクイーンに建てさせたんだよね」

笑って言える次元じゃねーよ。それ。

リアンはそんな恐ろしいコメントを残し、アリスたちを客間に通すとちよつと待っててね」と部屋を出ていった。

「すげえ……これ、かけじく？」

「これって、檜？？」

残った2人は……ちよう低次元な会話を繰り広げるのであった……。

30分も待つただろうか。

リアンがお盆を持って入って来た。

「お待たせ〜リアンさん特製和朝食よん」

アリスと裕馬の前に置かれたのは。

白いご飯にお味噌汁。お漬物に根菜の煮物だった。

「ありあわせのものだからたいしたモンじゃないけど」

「ごめんね〜と言うリアンに。」

「く・・・食っていいの？」

「う、うまそう・・・」

飢えに飢えてるんだね・・・。

「どーぞ」

その言葉に。アリスと裕馬は景気よく。いったきま〜すと食べ始めるのであった。

「今まで和食派だったなら、こっちの食事は慣れるまでキツイかもねえ。めっちゃ洋食よ。こっちって。しかもやたら重いんだよねえ」

苦笑しながらリアンは言う。

住む世界が変わるということは、こういうことでもあるんだなあと。2人は改めて感じるのであった。

「まあ、ここにはたいいていのものは揃ってるし。和食が食いたきや作ってやるから。いつでもいいなよ」

おいしそうにがつつく2人を嬉しそうに眺めながら、リアンはそう言った。

「は〜おいしかった！ご馳走様！！」

淹れられた煎茶まできっちり飲み干して。大満足と、顔に書いてある。

「ほんと、うまかったです。ごちそうさまでした」

「いえいえ、おそまつさまでした」

ここまでやりとりをし、誰からともなく笑い出す。
久しぶりの、なごやかな時間。

3人で食べたあとを片付け。

アリスの要望で、屋敷の中を案内してもらったこととなった。
檜のお風呂に縁側に。お茶室に。畳の香りが、木のぬくもりが、
どこまでも温かい。

「ここはちよつと毛色が違うんだけど・・・」

そう言つて、リアンが止まったのは。この屋敷ではじめてみるド
アノブのついた扉。中に入ってみると、この部屋だけフローリング
だった。

「はゝここはフローリングなんスね」

結構な広さのあるその部屋を見渡しながら裕馬が言う。

「リアン・・・あれ、ピアノ・・・？」

アリスが指差すその先には。漆黒のグランドピアノ。その部屋の
片隅に、ひっそりと置かれていた。

「そーそー。グランドピアノってかっこいいじゃん？どうしても欲
しくてさあ」

ひけるわけないんだけど、と前置きをし。

「むこうとシンクロした時パクツてきちゃった」

あなたの本気はどこまでですか？

ざつと一歩引くアリスと裕馬に冗談だつて！と言うが・・・本当
のところはどうなのか。とりあえず。疑問にはフタをするとしまし
よう。

アリスは、気を取り直すと、そのピアノのフタを開ける。
そして、静かに鍵盤をなぞる。

ポーン・・・

静かな部屋に、その音が大きく響く。
空気が、締まる。

「・・・綺麗な・・・音・・・」

アリスは、今度は椅子に腰掛け、鍵盤を一つ一つ丁寧に押している。

「アリスはピアノが弾けるの？」

意外そうにリアンが聞くが、アリスはその問いに対して返事をしない。

「無駄ですよ。もう、アリスの耳には何も届きません」

裕馬は苦笑しながら、でも、少し困ったように言った。

「アリスの前の父親が結構有名なピアニストで。アリスも弾けることは弾けるんですけど・・・」

「音が、いいな」

ぼつりと、アリスはつぶやくと。

本格的に、ピアノを弾く体制に入った。

～ 続 ～

第13話 朝食戦線（後書き）

いかがでしたでしょう。あまりラブっぽくない回ですね！続きをお楽しみにってことで

この場を借りて。いつも『アリス』を読んでいただきましてありがとうございます。最近は評価やメッセージもいただけて本当に嬉しいです。こんなところで何ですが。いつも感謝しております。皆様からのコメントやメッセージは参考にさせていただきますので。どんどんリクエストや更新早くしろとの意見（笑）ありましてらお願いいたします。励みになりますので。では、これからもよろしく願っています。

第14話 心の音・前編（前書き）

更新遅くなって申し訳ありませんでした（平謝）！もう何かそれし
か言っていないくらいな勢いです！ハイ！！では、本編へどうぞ
！！

第14話 心の音・前編

「ここにもいないな。いったいどこへ行ったんだか」

朝食を摂っていた公館から。気付いたらアリス・リアン・裕馬の3人が消えていた。それから。バニー宅・ソウ宅とまわってみたが、3人を見つけることはなかった。そして。もとの公館に戻ってきた。「もう！裕馬さんってば。僕を置いてくなんてひどいなあ」

ソウはぶんぶん可愛らしくご立腹中だ。

あと、3人のいそうな所は・・・。

と、クイーンとバニーが思いをめぐらせていると。

「あ・・・」

2人の声が重なる。

「・・・え？」

ソウが2人を振り返ると。

「あそこかもしれんな」

クイーンはバニーと顔を見合わせると、こっちだと、バニーとソウを連れて書斎へと入っていった。

実は、この公館にはクイーンの書斎がいくつかある。その用途によつてクイーン曰く、使い分けているらしいが。この書斎は、クイーンが半分息抜きに使う部屋。クイーン好みの洋書や新聞がきちんと並べられている。そして。本棚と対した壁には。大きなモニターがつけられていた。

クイーンは、ピピッとリモコンを操作する。すると、モニターにはいくつかの画面が現れた。

「これは・・・？」

「例の離れにつけた隠しカメラの映像だ」

・・・今、さらにアンタ、何て言ったよ？

離れの存在は知っていても、隠しカメラの存在は知らなかったバニーはいささか驚いた顔をしている。そこへ。ソウが。最もな質問

をしてみた。

「・・・なぜ、そのようなものを・・・？」

「リアンはよく一人で離れに行くからな。妙なことはしないだろうが。ま、いるかどうかを確かめるためだな」

しれつと言うクイーンだったが。その後ろからモニターを見つめる2人は。絶対嘘だと確信をしていた・・・。

所在の確認にこんなもん必要ねーだろ。

まさに。その通り。

どこまでも、いいご趣味なクイーン様でした。

「と、ここだな」

リモコンで各部屋を映していると、その映像の中に3人を見つける。

高性能なモニターくんからは音声も流れている。

そこに写っているのは。感心したようなリアンと。嬉しそうな裕馬。そして。真剣なまなざしでピアノに向かうアリスの姿だった。

『おー。こりゃ、アリスの演奏聞けるかな。アリス、ピアノが気に入らないと弾かねえもんなあ。すっげーうまいのに』

裕馬は興奮気味にしゃべっている。

『そんなにうまいの？』

裕馬はリアンの問いに、アリスを真っ直ぐ見据え。

『天才的です』

そう、答えた。

胸が、ドキドキする。ピアノを前にしてこんな気分になるのは何年ぶりだろう。

アリスの頭の中は、目の前のピアノでいっぱいだった。

そんなアリスの様子をバニーは穴があくほど見つめている。

ソウも同様に裕馬を見つめているが、どこか切なそうな瞳をしていた。

「・・・行ってみるか？離れ」

クイーンは、静かにそう言った。

ふうっと、アリスは大きく息をはく。高まる鼓動を鎮めようと、集中力を高める。

そして。

静かに鍵盤に指を置く。

ピアノの澄んだ音が部屋に満ちていった。優しく、しかし決して弱くない、音色。

透明で、澄み渡るような、そんな音。

アリスはまるで生き物をなでるかのような優しい手つきで鍵盤に指を滑らせる。

リアンも裕馬も言葉なく、その音に聞き入っている。

やっぱり、いい音色だ……。この、ピアノ。

アリスの頬が自然と緩む。

そのまま、アリスは没頭してピアノに向かっていった。途中、クイーンたちが入って来たのにも気付かず。

どのくらい没頭してピアノに向かっていただろうか。そんなアリスがピアノから指を離れたのは、音に小さな違和感を感じたから。

「……違うな……」

急にアリスが演奏をやめたので、それまで静かに聞き惚れていた全員が怪訝な顔をした。

「どうかしたのか？アリス」

裕馬がアリスの傍に寄り、声をかける。

「え？あ・・裕馬か。あ・・あれ？いつの間に……みんな来たの？」

「気付かなかったのか？アリス」

クイーンたちの存在に今気付いたらしいアリスの反応に、クイーンが驚いてそう言った。

「あ・・・うん」

ちよつとバツが悪そうにアリスが返事をする。

「すごい集中力だねえ」

リアンもそれには感心したらしく、へえつと声をあげる。アリスは曖昧に笑顔を返しながら振り返る。そして。振り返った先で、バニーと視線が合う。その瞬間、アリスの頬がかすかに赤らむ。今日、初めてともにバニーの顔を見る気がする。こちらに向けられる、無償の笑顔。自分だけに、向けられる・・・。

つて！！何考えてんだ！！俺ツ・・・！！！！

思わずバニーに見惚れるアリスくん。まだまだ青い。

「何赤くなつてんだ？恥ずかしがることねえじゃん。うまいんだからさ！」

そして。嬉しくも検討はずれな裕馬のセリフに。現実に戻つてみたり。

アリスは静かに立ち上がる。

「え？もうやめちゃうの？もう一曲くらい聞かせてくれない？」

ピアノから離れるアリスを、リアンが引き止める。

「や、ちよつと音がおかしいトコがあつて・・・調律したいんだけど、道具つてある？」

「・・・僕が持つてくるよ」

どこことなく、沈んだ表情のアリス。そのアリスの言葉を受けて、バニーが道具を取りに部屋を出る。

「・・・じゃあ、俺たちは帰るか」

「・・・そうだね。また聞かせてよ。アリス。この部屋は好きなだけ使ってくれていいからねえ」

バイバイ、と手を振ってクインとリアンが部屋を出て行く。

「・・・裕馬さん、僕たちも行きましょう・・・」

「え？いや、俺は・・・」

アリスと一緒に。そう伝えようとした先のソウの表情は。どこま

でも切なく。声もなく、裕馬のシャツをひっぱる。

「・・・・ああ・・・・じゃ、行くか・・・・」

さすがの裕馬も、ソウのその表情にソウの意見に従った。

誰もいなくなった部屋で、アリスは一人、ピアノを見つめていた。

もう、二度と弾かないって決めてたのに・・・・。

アリスは、俯くようにして、瞳を閉じた。

そうしていると。

あの日のことが、脳裏によみがえってくる・・・・。

あの、寒い、寒い冬の日。

アリスの人生の中で。

忘れることのできない、あの日の出来事・・・・。

（続）

第14話 心の音・前編（後書き）

いかがでしたしょう。何か暗く本編が進んでおりますね。しかも前編とかにしちゃいました。たぶん、次でこのもどかしげなカップル事情は一段落つくはず。各カップルの幸せを願いつつ、次話をお待ちくださいませ（^^;）

第15話 心の音・後編（前書き）

やっとアクションがある回までいけました。伏線？というか前置き？の長い話でした。そして、今更なのですが。ピアノに関してはおかしいところが満載だったかもしれませんが・・・スルーの方でお願いいたします・・・（笑）！！

第15話 心の音・後編

アリスは、父親の横に座ってピアノを奏でている。

「アリスのピアノは優しい音を出すね」

静かに、微笑む父。

「そう？でも、俺は父さんのピアノの音のほうが好きだな」

アリスは、父親の弾くピアノが大好きだった。自分には、決して出すことのできない、音。

「ピアノの音は心の音だよ。アリス。ピアノは最愛の人の前ではとても綺麗に鳴く。心と、ピアノが共鳴するんだ」

その父親の言葉は、幼いアリスにはよく意味がわからなかった。ただ、その言葉は強烈に、アリスの中に残った。

「ピアノの音が汚い時は自分の心が汚いのだと思いなさい。本当に綺麗なピアノの音は・・・ピアノが美しく歌うのは・・・ピアノと一緒に、心が最愛を歌っているからだよ・・・」

その時、アリスには最愛の意味がわからなかった。

そして。時はすぎ。

運命の日を迎える。

父と、母の離婚。その理由はアリスには伝えられなかった。ただ、もう、父親と二度と会うことはできないのだと、子ども心に感じていた。

アリスは、その時に父親と交わした最後の言葉を覚えていた。泣きながら、交わしたあの会話を・・・。

「父・・・さん・・・」

「・・・泣くんじゃないよ。アリス。母さんのことは頼んだよ・・・」

いつものような微笑ではなく、困ったような、悲しそうな笑顔で父はそう言った。

「やだ・・・！！・・・行かないで・・・！！」

決して、叶うことのない願い。

アリスは、泣きながら父親にしがみついた。そんなアリスの頭を優しくなでながら、父はアリスに優しく言った。

「アリス・・・父さんはいつまでもお前のことを思っているよ・・・もう、会えないけれど・・・お前のために、いつもピアノを弾くからね。私の、最愛の息子のために・・・」

慈しむように、紡ぎだされたその言葉。

アリスは、その言葉がとても嬉しかった。

大好きだった父親に、最愛だと、言ってもらえたのだ。

「俺も・・・俺も父さんがサイアイだよ・・・！！だから・・・もう、ピアノは弾けない・・・！！」

アリスは、父から離れながらそう言った。

「ピアノは、サイアイの人の前じゃないと・・・綺麗な音にならないから・・・」

そう言ったアリスに。

父親は寂しそうな顔をしていた・・・。

それからずっと。

ピアノはまともに弾いていなかった。

これからも、弾くつもりはなかった。

サイアイの人であった、父が、そこにはいないから。

それなのに。

このピアノにはひかれるものがあつた・・・。

どこか、懐かしいような・・・。

「父さん・・・ごめん・・・」

アリスの瞳に、涙が溢れる。

どこか、温かい、涙。

今までは、貴方が最愛の人だった。

離れてしまつても、私の心をつなぎとめていたのは、貴方だった。

優しくつた父さんが、本当に。

好きだった・・・。

アリスは、ピアノの前に座り込んで、その膝に顔をうずめた。

「・・・もう、あなたが最愛じゃない・・・」

愛する人が、できました。

私を、愛してくれる人が、できました。

今なら、あの時の父の言葉の意味がわかる気がする。

最も、愛する人。

それは・・・。

「アリス？どうしたの？」

道具を持ってきたバニーは、うずくまるアリスを見て慌てて駆け寄ってくる。

心配そうな、バニーの顔。

そつえば、バニーはいつもアリスを心配している気がする。当

たり前のように流していたけれど。その行動が。どこまでもアリスへの愛を感じる。

ためらいがちに声をかけるバニーが。

なぜかとても、とてもいとおしくて。

アリスは思い切りその首に抱きつく。

「ア・アリス!？」

とっさのことに、バニーは思い切り動揺する。

そのバニーへ、アリスはにこりと微笑む。父親がしていた、あの、慈しむような微笑み。

「調律がすんだら、バニーのためだけに弾いてあげるね」

ちゅっと、バニーの頬にキスをして、バニーから離れる。

そして、呆然としているバニーを残して調律を始める。

「・・・バニーはどこへも行かないでね・・・」

アリスのその言葉は、どこまでも、どこまでも響く。

「行かないよ。僕はアリスを愛しているから。ずっと、アリスのそばにいるよ」

それだけは、何者にも誓えるよ。

その、貴方の言葉が。

私にはとても嬉しい。

人に愛されることが。

人を愛することが、こんなに素晴らしいことだなんて思わなかった。

ねえ、父さん。

最愛の人が、できたよ。

「・・・最愛の人の前では、ピアノは綺麗に鳴くんだよ。バニー・・・」

・
」

アリスは、調律を終えるとそう言って再びピアノに向かった。

「・・・最愛の人って・・・僕の、こと・・・？」

アリスは、そのバニーの問いに、はあ？と返す。

「当たり前だろ？裕馬やリアンたちも好きだけさあ。それと最愛の人はまた別じゃん。最愛の人は、一人だけだから・・・」

アリスが全部言い終わる前に、アリスはバニーに後ろから思い切り抱きしめられる。

「わわ・・・！！バニー・・・！？」

突然のことに、アリスは真っ赤になる。

そこには、柔らかい時が流れ。

しばらくの間、アリスはバニーのぬくもりの中にいたのであった。
・
・
・

裕馬は、その様子をクイーン邸の例の書斎で見っていた。

「何かなあ・・・。やっぱ、おじさんのこと・・・ずっと、心に残ってたんだな・・・」

ずっと、アリスの中にあつたわだかまり。

自分はそれを知っていながらも。

どうすることもできないでいた。

それを、裕馬に言わせれば。バニーはいとも簡単に取り除いてしまった。

アリスは、見つけてしまったのだ。

本当に、心を許せる相手を。

「ちえ。心配してるこっちがバカらし・・・」

ようやく気付いたか。つつー突っ込みをこっちはしたいですがな。

とか思いつつ。

裕馬は、ちらりと横を見ると、そこには寂しげに俯くソウがいた。

「・・・あ・・・ソウ」

裕馬は、頬をかきながらソウに声をかける。

「はい？」

裕馬に名前を呼んでもらえ、ソウは嬉しそうに裕馬へ振り返る。

「アリスはバニーにまかせときゃいいし。俺も少し、自分のことを考えてみることにするわ」

珍しく。赤くなりながら。裕馬はそれだけ言った。

ソウは最初、きょとんとしていたが、裕馬のその言葉の意味を悟って。

「裕馬・・・さん・・・！」

ソウは、目いっぱい涙をためて裕馬にしがみついた。

そして。

「僕、僕・・・！絶対、裕馬さんを幸せにしてみせますから・・・！！！！」

あれ？

「・・・ん？」

幸せに、しますって・・・？

「男は初めてでも大丈夫ですよ！！僕がちゃんと開発してあげますから！！」

「・・・！！？開発・・・！！？ちょ・・・お、俺が・・・もしかして・・・！！」

何か、一代決心した途端。怪しい雲行きなのですが。

「僕の、お嫁さんになってくださいね」

天使の微笑で。

悪魔のような言葉を囁くソウ。

。そういえば。しがみつかれている腕がはずせないんですけど・・・

「ふふ・・・。ガタイのいい人、好みなんですね・・・」

「お・・・！お前・・・二重人格・・・！？」

さすがの裕馬も何だか身の危険をいっばいに感じておりますが。

「やだなあ。策士って言うてください」

よけい悪いわ・・・！！！！

ようは。

しおらしくして周りや裕馬に可愛さをアピールしつつ。

実は羊の方から罠にかかるのを待っていた狼さんだったってことで。

「・・・やっぱり、喰えない奴だったな・・・」

その様子を見ながら、クイーンはぼそりと言うのであった。

「はは。しかも、何か2カップルがいちゃいちゃしてるし・・・」

ご馳走様。とリアン。

「ところで、クイーン」

くるりと全開の笑顔つきでリアンはクイーンへ向き直る。

「？何だ？」

「あれは何かかな？」

可愛らしい声で、指さす先には、例のモニター。

「・・・あれは、お前の所在を確認するための・・・」

しれっとした顔で話すクイーンに。

バチーンと平手が飛ぶ。

にこにこと、笑みながら平手をくらわせたリアンは。

「何で風呂場や脱衣所や寝室にまでついてんだ！！このヘンタイ！

！！だいたい、俺に言うてから取り付けろ！！！！」

珍しく。

お怒り頂点。

「風呂場や脱衣所につけたのは俺の趣味だ。それに、今言った。だいたい、言ったら取り付けさせんだろ」

どこまでも、しらじらと言うクイーン様。

その後。

リアンは離れに行き、カメラをぶちぶちはずし。クイーンを離れに立ち入り禁止に処するのであった。

しかし。

実は、リアンの知らない場所に。まだまだ超小型カメラが潜んでいるのであった。

余談。

カメラをはずし終わり、その数の多さに。

「こんなにカメラつけやがって！このバカ！！」

と、思い切りリアンは文句を言うのであった。

「いいじゃないか。減るものじゃないし」

それに対し、やはり悪びれなくクイーン。

「ていうか。一国の王に手あげるか？お前？しかもバカ？バカだったね？後で覚えとけよ？」

この2人も。結局デイクープにらぶらぶなのであった・・・。

第15話 心の音・後編（後書き）

いかがでしたでしょうか？例のピアノはリアンがパチってきたものなですよ（笑）

ようやく各カップルが落ち着き？ましたね。裕馬のどこなんて・・・とこなんて・・・！！笑いが止まりませんよ・・・！！結局ソウ×裕馬の方向で話を進めていきたいと思います。これからはソウに振り回される日々が始まるんだろうなあ。合掌。

さて、次回はアダルティにクイーンとリアンの話にでも移っていきましょうかと思えます お楽しみに

第16話 愛を謳って・1（前書き）

久しく放置しておりました。申し訳ありません〜！！今回からしばらくクイーンとリアンがメインの話になります。それでは、長らくお待たせいたしました！！

第16話 愛を謳って・1

ここは、例のリアンの離れ。

「こんにちは」

そこを訪れたのは、アリス、ソウ、マスターの3人。

「いらしゃーい。どうぞ。あがつて」

今日はこのメンツでお茶会。・・・といえば聞こえがいいが。実質はそんな優雅なものではなく。ただのノロケ&愚痴大会だったりするわけなのだ。・・・。

「もう、裕馬さんってば本当に可愛いんですよ！」

「よかったですね、ソウさん」

「はい！」

満面の笑みでのろけているソウだが・・・なぜ妻の会（勝手に命名）に夫（予定）のソウが何事もないかのごとく混じっているのか・・・。

と、そんなところへの突っ込みはスルーして。

「いや、いいねえ。若いって。ソウもアリスとこもラブラブじや〜ん？」

そこへ、オヤジ化したリアンがからかうように口を挟む。

「やつだも〜！リアンさんってば！」

まったく否定しないソウと。顔を真っ赤にして俯くアリス。まあ、何と極端な2人か。

「初めてみた瞬間に、この人だっと思ったんです」

そして、ソウのノロケはまだまだ続く。

「一目ぼれですか？」

そのノロケにマスターが愛想良く付き合う。

「はい！！」

そうなんですときゃあきゃあ話すソウを眺めながら。
唐突に、アリスは言った。

「そういえば・・・リアンとクイーンの馴れ初めと、マスターとガーデンの馴れ初めって、どんなの？」

この一言が。

大きな波乱へつながっていくとは。

この時は、思いもなかったのだった・・・。

さてさて。

こちらはところ変わって、クイーン邸のクイーンの書斎。

「ばかじゃねーの？」

「うるさい」

ここにいるのは、クイーン・バニー・ガーデンに裕馬だった・・・もちろん、妻の会のような可愛い集まりではなく、しづしづといった集まりである。

そして、眼前にはもちろん。

例のモニターがあるのであった。

「まだモニターつけてたのかよ。今度見つかったらそれこそリアンに離婚でもされんじゃねーの？」

バニーは親を親とも思わぬ口調でクイーンに話しかけている。

「お前も同罪だろ。別に見たくなければ外へ出ててもいいんだぞ？」

クイーンは、にやりと息子へ笑む。やはりまだ、クイーンのほうが上手のようである。

クイーンと同罪は嫌だが、アリスのことは気になる。バニーは、言い返せずぶすつとしている。

「いいじゃん、いいじゃん。要はバレなきゃいいんだろ？」

裕馬は相変わらずケロリと言つてのける。

別にソウが心配なわけではないのだが。悪友であるアリスに、ソ

ウが余計なことを言わないか気になるのである。

そんなこんな話をしていると。

モニターの前では例の話題になっていた。

『僕と・・・ガーデンさんの・・・？』

『俺と、クイーン・・・の・・・？』

『馴れ初め・・・？』

リアンとマスターは、間の抜けたような声を出している。

そして。モニターの前では。クイーンとガーデンがバツの悪そうな顔をしている。

「そつえば、僕も知らないなあ」

バニーは、につこりとクイーンへ向き直る。

「へー、ちよつと興味あるかも」

そう言う怖いもの知らずな2人を。クイーンとガーデンはぎろりとにらみつけるのであった。

「あゝ・・・馴れ初め・・・ね・・・」

「馴れ初め・・・ですかあ・・・」

リアンとマスターはあさつての方向を見ながら齒切れの悪い言葉でその場をにごす。

「わゝ、馴れ初めかゝ！僕も聞きたいです」

ソウは、興味深々といったふうである。

「なれそめ・・・ねえ。・・・俺さあ、油絵描くんだけど」

リアンは、真剣なまなざしで話始めた。

アリスとソウは、真剣にその話に聞き入る。

「この離れに油絵描くアトリエがあるのね」

リアンは、話しながらおもむろに立ち上がる。

「で、だね。俺、筆洗いに行かないといけないから！あとは好きに

やっつて！じゃー！！」

リアンはそういうと、何とも言えないすばやさで部屋を出て行く。

「……」

ぽかーんとその場に残った3人……。

「……！！逃げましたね！！リアンさん！！」

「リアン！」

リアンに置き去りにされ、マスターは青くなっている。

青くなっているマスターを置いて、アリスはリアンの後を追う。

だって。あのリアンが。ここまで本気で嫌がることなんてめったにないし。

これはちよいと。

つつこんどくべきところじゃん？って感じで。

そして。

残されたマスターとソウは……。

「行っちゃいましたね……」

よくわからない展開にしばらくぼーっとしていたソウだが、はたっと思い返し。

「で！？ガーデンさんとのなれそめは……！！？」

マスターに向き直り、詰め寄る。

「え！？えつと……それは……」

マスターはソウに詰め寄られ、青くなったり赤くなったりしている。

「マスター、帰るぞ」

そこへ。

いきなりガーデンが現れると、マスターを引き寄せ、立ち上がりせる。そして、ソウから守るように自分のもとへ引き寄せる。

「……！！ガーデンさん……！！」

ガーデンの突然の登場に、マスターも驚いている。

驚きついでに再びぽかんとするソウに。

「ソウ、裕馬が外で待つてるぞ」

「え！？裕馬さんが・・・！？」

ガーデンは、ソウに向かってそれだけ言つとマスターを連れて行つてしまった。ソウはというと。ガーデンの言葉を信じ、外へ出たあと。

思い人が見つからず。ようやく、気付いたのであつた。『はめられた』と。

「ガーデンの奴・・・」

自分も行つてリアンを奪還したいところだが。なにぶん、この間の隠しカメラ事件で離れへの出入を禁止されているクイーンは苦々しくはき捨てる。

「ああ、だまされてるよ・・・。仕方ないなあ。俺、ソウんところ行つて来ますんで」

何だかんだで、裕馬もまんざらでもない様子。

そんな感じで。ガーデンと裕馬が去り、そこにはクイーンとバニーが残つた。

「・・・あんたにしても、ガーデンにしても・・・どんな出会いかたしたんだよ・・・」

バニーは、なかば呆れたように隣でふてくされている男に尋ねる。

「・・・」

その質問に対する、クイーンの答えはなかった。

「リアン、教えてよ」

ここは、リアンが逃げ込んだアトリエ。どうやらリアンは本当に絵を描くらしい。その部屋は油絵の具の独特な香りがしており、いくつものキャンパスやスケッチブックが置かれていた。

「・・・嫌」

断固拒否なリアン。

ここまでリアンがかたくなになる理由が知りたくて、アリスはリアンにしつこく付きまとう。それを無視し、リアンはアトリエの整理をしている。プーとリアンの様子にアリスはふくれる。そして、ふと、手近にあったスケッチブックを開いた。古くて、厚いスケッチブック。

「・・・これ・・・」

「ばしゃーん！！」

大きな音がして、リアンは水の中に洗っていた筆を落とす。

「ア・・・アリス！！どっからそれを・・・！！？」

リアンは真っ赤になってアリスからスケッチブックをひったくる。そのリアンの慌てぶりに。アリスは珍しく人の悪い笑みを浮かべる。「ねえ、それって・・・クイーン、知らないでしょ？」

にやりと、言うアリス。

リアンはギクリと青くなる。

「アリス」

「クイーンに、黙っててあげるからさ」。馴れ初め、教えて」につこりと、語尾にハートマークのつきそうな勢いでアリスは言った。

うーん。アリスにあのことを話すのと・・・この中味をクイーンに知られるの・・・。

どちらがいいだろうかと。しばらく悩んだすえ。

リアンは、クイーンとの出会いを話すことにしたのだった・・・。

そして。書斎では。

モニターではキャンパスやスケッチブックに描かれた絵までは明瞭に見ることができないため、何が描かれているのか確認ができない。

そのため。

「ちょっと待て！そのスケッチブックには何が描いてあるんだ！？」
この男が黙っちゃいないわけで。

「あんたに見られたくないものだってことは確かなんじゃない？」
それに対し、さらりと言うバニー。

「あのことを、人に話したほうがいいくらい、俺に見せたくないってわけか・・・？」

「・・・たかが出会いだろ？」

大げさな。とバニーは呆れたように言う。

クイーンは、モニターを食い入るように見つめながら、ポツリと言った。

「俺は・・・リアンから好きだとか、そういう言葉を聞いたことがない」

唐突にそんな話をしだすクイーンに、バニーははあ？と間抜けな声を出す。

「・・・リアンはしかたなく、俺のそばにいるんだよ・・・」

〈 続 〉

第16話 愛を謳って・1（後書き）

続きます 2人の馴れ初めとは？どんなものなのでしょう。表でやっていける範囲で話を書いていきたいです。もしかしたらムーンライトあたりで、「アリス」の番外編なんか書くかもです。また書いた時にはお知らせいたします いつも評価ありがとうございます！ママさんや、初めてBL読まれる方など、本当にいろんな方々に「アリス」は読んでいただけているのだな～と思いました。最近は忙しくて更新が遅いですが、気長に待ってやってくださいませ。それでは、これからもしよくお願いいたします！ここまで読んでいただきまして、ありがとうございます！！

第17話 愛を謳って・2（前書き）

お待たせいたしました。本当に最近更新が遅くて申し訳ないかぎりです。ほんとスイマセン。何か毎回謝ってますね……。進歩ない……。では、本編へどうぞ。今回より回想編です。

第17話 愛を謳って・2

「言っとくけど聞きたいって言ったのはアリスだからね」

リアンは知らないよ、とアリスに告げる。そして、天井を仰ぎ、クイーンとの出会いを話し始めた。

「あれはまだ、俺がアリスと同じ高校生だった頃・・・」

ばからしく。楽だと思って図書委員選んだけどさ・・・これって寂しすぎ・・・。

アリスが通っていたのと同じ高校。実は、リアンもこの学校に通っていたのだった。何せ、家から近いしね。そして、今は放課後。図書委員のリアンは、司書の代わりに番をしているのだが・・・。何分ここは男子校。しかも、放課後でみんな部活に出払っている。まばらにいた人も今はもう見る影もなく。つか、今後誰か人が来るとは思えません。

「あゝ、俺も早く美術部行きてえ」

誰にとはなくそう口にする。

図書室の貸し出しカウンターにこれでもかというほどやる気なく座りながら、リアンはブーたれていた。

そこへ。

図書室のドアが開く音がする。

珍しいねと、リアンがドアのほうを向くと。

うつわ・・・外人さん・・・

金色の髪に、青い瞳。

日本人とは遠くかけ離れた容姿。その整った顔立ちに、リアンは

思わず見入ってしまった。そして、その男はつかつかとリアンのほうへ近づいて来た。

「・・・お前、何してる？」

澄んだテノールが部屋に響く。どうやら言葉は通じるらしい。と、リアンは質問に答えるよりも、その男の一挙一同に心動かされる。

「・・・おい!!」

「は！はい!？」

バンッとカウンターを叩かれ、リアンは正気に戻る。

「お前、こんなところで何してんだ？」

「何って・・・仕事だけど」

「つかこの人、何怒ってんの？」

「貴様は親に言葉の使い方も教わらなかったのか!？」
ちよつとも。すげー怒ってんですけど。

何よ。言葉遣いって。

仕方ないじゃん。今の日本人の言葉のレベルなんてこんなもんだっつーの。

つか、俺、日本語そんなに大きく間違えてた？今??

リアンはうんざりした顔でその男を見やった。

「それとも何か？自分の国の国王の顔を忘れたのか？」

はい？

「国・・・王・・・？」

えっと、ここは日本ですね。

国王って何かな？いつから日本は王権制度になったのかな？

ていうか、この人ってあれかな。こんな綺麗な顔してあっちの世界の住人とか？

おゝい、帰ってこゝい。ってやつ？

「・・・!!」

きつと、うるんな顔をしてその男のことを眺めていたのだろう。

その視線を受け、男は何かに気付いたようだった。

「・・・お前、まさかこっちの・・・？」

ああ。

こっちとか言ってるし。

絶対そうだし。

リアンの中では勝手にこの男の話ができあがっており、しまいには何だか暖かい目なんだか哀れみの目なんだかわからない表情で相手を見やっている。

「わかった、わかった。あんたの言うことはよくわかったよ。俺、別にそういうの悪いと思わないし。ただ、ここは違うから。とりあえず・・・職員室行こうか」

とりあえず、誰かに渡してしまえ。

「・・・」

そんなリアンの様子に、再びムツとなったらしい。しかし、今度は何を言い返すわけでもなく、ただ。

「・・・お前、名前は？」

横柄な態度でそう聞いた。

「・・・佐久間 里杏」

「・・・リアン、か」

男は、リアンの名前を聞くと薄く笑んだ。
もう何か。

とつとこの男と離れよう。

リアンの警戒網に、ひっかかる。

何だか、よくない予感がしてきた。

ちょうど、図書委員の終わる時刻に差し掛かり、リアンはほつと
する。

「あつと・・・時間だ。ほら、アンタ・・・」

「クイーンだ」

「あゝ・・・クイーンさん？外出てくんない？ここはもう閉めるか

ら」

言いつつ、リアンは無言を言わずクイーンを図書室から出し、鍵を閉める。そして、職員室へと向かった。クイーンなる男は、というとなぜかリアンのあとをついてくる。

「失礼しま〜ッス」

元気よく、ガラリとあけたその扉の向こう。

そこには。

「……れ？」

誰も、いなかった。

「おつかし〜な……」

いつもなら、教員に生徒に。結構にぎわっているはずなのに。不思議なこともあるもんだねえと。リアンは図書室の鍵を所定の位置にもどし、「失礼しました」と職員室を出た。

職員室を出て、美術室に向かうため校舎内を歩いていると、とても奇妙な感覚を覚える。

人の気配がしないのだ。視界だけでなく、“声”も“物音”もない。まるで。

そう、まるで。この世界から人がいなくなってしまったかのよう。その空想的すぎる考えに、リアンは笑いながらも薄ら寒さを感じた。

何かが、おかしい。

「あたりまえだ。ここはお前の知ってる世界じゃないからな」
凜、と響くその声。

リアンはぱつと後ろを振り返る。

そこには、楽しそうに笑む、さきほどの男がいた。まだ後をついてきていたらしい。

「・・・お前・・・何なのさ・・・。何、言ってるの？さっきから・・・」

リアンはなぜか、大きな大きな不安を感じた。
危険だ。

リアンの中の警報がけたたましく音を立てる。

キケン。

「俺の話を、聞かないか？」

その男は悪魔のように綺麗な笑みを浮かべながら、リアンの耳元に囁いた。

リアンは、知らず、うなづいていたのだった・・・。

く 続 く

第17話 愛を謳って・2（後書き）

・・・待たせたわりに進展ない話ですね。ていうか、アリスの初シンクロ時代を思い出しますね。初シンクロ、リアンバージョン。しばらく続きます。ではでは、気長に更新を待ってやってくださいまし。ペコリ。

第18話 愛を謳って・3（前書き）

何か、リアンの発言に教育的指導が入りそうでビクビクしながら本編を書いている今日この頃です。どこまでがオツケーなのか・・・幅広く読んで頂きたいとも思いますしね。そんな18話です。

第18話 愛を謳って・3

「シンクロ・・・ね。まるでSFじゃん」

クイーンから一通りの説明を受け、リアンはぼつりと呟いた。

「・・・意外と冷静だな。もっとパニくると思ったが・・・。キヤパを越えた話で頭がバカになったか？」

くくつと楽しそうに笑うクイーンをちらりと見やり。

そうかもしれないな・・・とリアンは人心地に思った。

自分が他人よりも話のわかる奴で。結構、非現実的なことでもわかりかしんがり認めたり納得したりする方だとは思っていたけれど・・・。この話はそんな次元を超越してるよなあ。さすがに・・・。と思いながらも。どこまでも冷静に受け止めている自分がいる。つか、もはや・・・。

「ま！なっちまったもんはしょーがないつか！！ははははは！！」
てな世界??

うーん。この物分りのよさはいいか悪いのか。

「で？どうすれば元に戻るわけ？」

とりあえず。

リアンは解決の方向へ頭を切り替えることにし、あっけにとられているクイーンにそう尋ねた。

「・・・」

クイーンはリアンの問いには答えず、しばらくの間何かを考え込んでいた。そして、何かを思いついたようにその造りのいい唇をにつとゆがませる。

「な・・・何だぁ・・・？」

何ですか？その笑顔は。

何か、すごい、嫌な予感がするんですけど・・・。

リアンの背を冷たいものが伝う。

「リアン、やらせろ」

知らず後ずさりを始めたリアンに一言。
肩を掴んで。

もう、離しません。

「……………はあ……………!!?」

リアンの顔から血の気がひく。

え?というか。やらせろって……………って……………そういう意味ですよね??

リアンは、変に男子校慣れ（偏見）をしている自分を、この時思い切り呪った。

ぐるぐるとクイーンの発した言葉の意味を考えている間に、クイーンはさくさくと事を進めていた。リアンを近くにあつた教室へ連れ込む。

「こんなところでやるのは気がすまないが、しかたないか」

何事もないかのようにリアンに覆いかぶさってくるその男に。リアンははつと我に返った。

「や!しかたないじゃないしね!!どけっつの!!」

「うるさい。静かにしてろ」

「誰が静かにするか!!てか、シンクロと関係ないだろ!!ってギヤ……………!!どこ触つてやがる!!」

人の話をまったく無視し事を運ぶクイーン。

名は体を表すとはまさに。

もちろん、リアンも抵抗に抵抗を重ねてみたのだが……………。何分、人には生まれ持った体格と体力というものがある。

そう、悲しいかなリアンさんは、クイーンの魔の手にかかってしまったので……………。

「わあああああ!!!!!!」

「わ!??」

そこまで話すと、今まで黙っていたアリスが真っ赤になって絶叫した。

「わ〜わ〜！！もういいよ！！2人の出会いはよくわかったから〜！！」

耳を塞ぎながらアリスはリアンの話をさえぎる。

「え〜？アリスが知りたいって言ったのに〜。その後ねえ、俺の抵抗もむなしくゴウカ・・・」

「だから言うなって！！！」

もう真っ赤になって涙まで浮かべて。

そんなアリスを見ながら、いやあ、楽しいなあと思うリアン。やはり、アリスはリアンには勝てなかったようである・・・もうなんか。開き直って超楽しそうに昔を語りだしてますもん。リアンさん。

そして、その様子をモニターで監視中のこちらでは。

「リーアーン・・・」

ペラペラと過去を語りだしたりリアンにモニター越しに文句。

「てか、バツカじゃねえ？強姦なんて普通するかよ・・・」

息子からは、冷ややかな視線。

「・・・あの頃の俺は気に入ったモノをすぐ手に入れなくちゃ気がすまなかったんだよ」

「で？そのゴーカン魔とリアンはどうして結婚したわけ？」

“ゴーカン魔”という言葉にぴくりと反応しながら。その質問には答えず、クイーンはブスツとモニターを見やるのであった。

「あ、でも・・・何で・・・その・・・」

「ゴーカンされた相手と結婚したかって？」

リアンのストレートな物言いに、アリスは赤くなりながら頷く。
「それはねえ・・・」

ふっと、遠くを見やりリアン。

「もうなんつーか、意識飛んでたっつーか。頭バカになってたっついうか。まあ、アレよ！思いのほか痛いんだか気持ちいいんだか！みたいな感じになっちゃっててさあ！！」

あははと笑いながら、教育的指導が入るようなコメントはやめてください・・・。

「そんな頭が回ってない状況で“ 氣に入ったから俺の妻になれ” だかなんだかって言われちゃってさ」

嫌だ。そんなうる覚えなプロポーズ・・・！！

「よくわかってないのに“ うん” って返事しちゃったんだよね」

笑い事ではありません・・・。

「んで、気が付いたらこつちの世界で？もう帰れないよ、みたいな」

あっけらかんと話すリアンに、アリスはあいた口がふさがらない。

「そ・・・そんな理由って・・・」

思わずアリスが脱力するのも・・・当然ってことで。

俺のあの怒涛の日々は何だったのか・・・。そう、思えてきてしまっ。

「だから聞かないほうがいいっていったのに」

そんなアリスの様子にリアンは苦笑する。

そして、脇に置いていたスケッチブックを手に取る。そして、1ページずつ慈しむように見入る。

「・・・そんなに、好き？」

そのリアンの様子を見ていたアリスが、ポツリと聞く。

アリスの問いに、リアンは満面の笑みで答えた。

「世界で一番」

く続く

第18話 愛を謳って・3（後書き）

いつものことながら・・・更新遅くてすいません。次から怒涛の展開になっていく予定です。また愛の国チックになっていくのかしら・・・。次話はなるべく早く・・・！（毎回言ってる気がする・・・）では、お付き合いいただきましてありがとうございます！！引き続き、ごひいきにしてやってくださいまし！！

第19話 愛を謳って・4（前書き）

『愛を謳って』完結です。長かったなあ・・・いろんな意味で（本当に申し訳ありません）。今回は頑張って（？）ちよつと長め。

第19話 愛を謳って・4

ぶち。

今、何か切れた音が・・・思いつきりましたが・・・。

「・・・え？」

その音のほうを、バニーは見やる。

そこには、無表情に怒りを湛えたクイーンがいた。クイーンは無言でまわりのものにあたり散らし始めた。その瞳には、すでにバニーの姿は映っていない。

そして、その八つ当たりが止まったかと思うと、次は大きな音をたてて扉をあけ外へ出て行く。走っているわけではないのに、すごいスピードである。その無表情のうちから溢れる激情に、すれ違うトランプ兵たちは壁に張り付いて道をあける。その後ろから、バニーも追いかける。

「・・・まずいな・・・完璧キレてんじゃないか・・・早くアリスを・・・！」

バニーは、どうやら本気でこ立腹なクイーンの様子から巻き添えをくらってなるものと近道をしてリアンのとアリスのいる離れへと急いだ。

「アリス！！急いで！早く帰るよ！！」

クイーンより早く離れについたバニーは、それだけ言うと、きょとんとしているアリスを有無を言わず担いで離れを出て行った。

まさに、風のように・・・。

「・・・どうしたってのさ・・・」

さすがのリアンも、息子の奇行にしばし呆然とした。

まあ、そこはリアンさん。ま、いっかと気を取り直すとアトリエ

にあった大きな、古いキャンパスの前に立った。真っ青に塗られた、キャンパス。そのキャンパスに、リアンは優しく手を這わせる。

「・・・いつか、このキャンパスを・・・渡せる日が来るんだろうか・・・」

リアンは、ふっと、悲しそうに笑むと手に持っていたスケッチブックを両手に強く抱きかかえた。

「・・・やっぱ、ひねくれてんのかねえ」

それは、遠い昔に自分が決めたこと。

人知れず、この思いを抱いたまま。

伝えることは、ないだろう、と。

リアンは、天井を仰ぎ一息つくとアトリエを出ようと振り返った。そして。そのまま動きを止めた。

「ずいぶん顔色が悪いな、リアン」

そこには、無表情で立つ、クイーンがいた。感情なくリアンを見据えている。

「・・・クイーン？ここは立ち入り禁止のはずだけど？」

いつもとはあきらかに違うクイーンの様子に圧倒されながらも、それを表に出さないようにしごく自然にリアンはそう言った。

「俺に見られたら困るものがあるからか？」

クツとクイーンは乾いた笑いをこぼす。

「・・・まだモニターついてるわけ？ほんと、悪趣味なんだから」
リアンは呆れたようにため息をつく。そして、さっさと部屋から出るため扉へ手をかけようとした。その手は、扉へ届くことはなかった。

クイーンはリアンを壁にはりつけると、いきなり貪るようにキス

をした。逃げられないように、壁にはりつけられて。リアンの爪が、壁をかく。

酸欠になりそうなキスの中。

リアンの瞳に、あの真っ青なキャンパスが映る。

あれがあるから。

俺の、心の支え……。

あの、真っ青な……。

俺の、大好きな……。

理由はよくわからないけれど。どうやら、モニターを見ていて何かが氣に入らなかったようだ。

アリスになれ初めを話したことが。

クイーンに見せてないスケッチブックがあることが。

それともっと、他のことなのか。

リアンは、クイーンの怒りを全身で痛いほど感じながら。

“あの時”と同じように。

クイーンの氣がすむのを、ただただ、待っているのだった……。

ようやく、噛み殺されそうなキスから解放される。

「は……は……」

リアンは自由になった口で大きく息をする。

くたつとしているリアンの様子を、クイーンは冷ややかに見下ろす。

しばらく、そこには沈黙が続いた。

「……何も言うことはないのか？」

冷たく、重たい声。

その問いにリアンは答えない。

ただ、息を整える音だけが、部屋に響く。

そのリアンの様子に、クイーンは手近に合った小さなキャンパスをリアンの顔すれすれに投げつける。

「！！！」

リアンはさすがに恐怖を覚える。知らず、全身が小さく震えている。

「……なぜ、お前はここに残った……！！！」

クイーンは、堰を切ったように叫びだす。

「なぜ！愛してもいない男と結婚をした……！！！！？」

つまれた画材が、クイーンの腕によつて地に落とされる。

そして、クイーンはリアンの胸倉を掴み、その顔を歪めた。

「他に、愛している奴がいながら……なぜ、愛してもいない俺と結婚した……！！！！？」

「ねえ！バニー！！！」

呼びかけてみるものの、バニーから返事はない。

「バニーってば……！！！」

自分を担いで足早に歩く男の背を叩きながら名を呼ぶ。

「あ、ああ」

バニーはようやく気付いてアリスを下ろす。

「……いつたい、どうしたんだ？」

いつもと違うバニーの様子にアリスは心配そうに尋ねた。

「……クイーンが、キレたんだよ……」

はあ、と大きなため息とともに静かにバニーはそう言った。

「……え？」

信じられない、といったふうなアリスの反応。

クイーンが、キレた。

いつたい、何があったというのか。そして、クイーンがキレたことと、離れから担いで連れ出されたこと……いつたいどんな関係が……？

アリスは疑問いっぱいバニーを見上げる。

「・・・実はね、悪いけどアリスたちの行動をモニターを通してクイーンの書斎で見てたんだよ」

「!!!?ええっ・・・!!!?」

おさまっていたアリスの赤面が再度そのものとなる。

「そこで、リアンとスケッチブックを見てただろ?アリス」

「う、うん」

アリスに突っ込む隙を与えず、バニーはさくさくと話しを進める。アリスも、バニーの真剣な様子に抗議できずおとなしく質問に答える。

「・・・クイーンは、リアンに“愛してる”とかそういった類の言葉を言ってもらったことがないんだって。それなのに、そのスケッチブックに描かれている人のことを“世界で一番好き”とか言っちゃったから・・・それで、ね。」

クイーンがキレちゃったって話。はあ、とバニーは大きくため息をついた。

その話を聞いたアリスはきょとした顔でバニーを見据えた。

「・・・え?・・・だって、あれ・・・」

「何の・・・こと?」

リアンは掠れた声でようやくそれだけ答えた。

「何のこと?はっ!アリスと一緒にスケッチブックを見ていただろ?それに描いてある奴だよ!俺には見せれないだろう!?そうだよな!一応俺たちは夫婦だからな!他の奴が描いてあるスケッチブックなんか見せるはずないよな!」

クイーンは一気にまくし立てる。

いままでの、すべての感情をのせるように。

「一応って・・・何だよ・・・」

クイーンはかっとなってリアンを殴りかけたが、ぐっとそれを堪える。

「一応だろ！？お前はもうむこうに帰れないもんな！一人で生きるより誰かに足開いたほうが生きやすいよな！たとえ愛してもいない奴でも！！」

クイーンは、悲痛に叫ぶ。

「お前は一度だって俺に“愛してる”と言ったことはないだろう！でも！そのスケッチブックの奴には“世界で一番”だと言っただろうが！！」

リアンの瞳に、涙が溢れ出す。

「行けばいい！！お前の愛している奴のもとに！！」

「そうしたら・・・そいつの前でお前を殺して俺も死んでやる！！」

リアンの頬を、涙が伝う。

「・・・クイーン・・・」

「俺は！お前が誰を愛していても・・・お前だけを愛している！！絶対に、手放すものか・・・！！！！」

クイーンは、リアンをかき抱きながらそう、叫んだ。

どこまでも、愛してやまないもの。

愛して、やまないもの。

リアンは、クイーンの腕の中で瞳をいっぱい開いて空を見つめている。その瞳からはとめどなく涙が流れている。

「クイーン・・・」

リアンに呼ばれ、クイーンはわずかにリアンから離れる。

リアンは、クイーンにさきほどのスケッチブックを手渡した。

「俺が・・・世界でただ一人・・・愛している人だ・・・」

リアンは、どこまでも優しく微笑んだ。

「クイーンだよ」

「は!？」

今度はバニーがすっとんきょんな声を上げる。

「だから、スケッチブックに描いてあるのも、世界で一番リアンが愛してるのもクイーンなんだって」

「な・・・」

アリスのその話に。

バニーは、言葉を失ったのだった・・・。

「これは・・・」

クイーンは、スケッチブックを1ページずつ見ていた。そして、すべてのページを見終わったあとに、ゆっくりとリアンへと向き直る。

「ほら、気が済んだ?さ、俺を殺して?それで、アンタも死ぬの。そしたら、アンタは永遠に俺のものだね」

リアンのはつきりと、そうクイーンに告げた。

そのリアンを、再びクイーンは抱きしめる。

「他に・・・好きな奴がいるんだと思っていた・・・」

掠れた声でクイーンは呟く。

「・・・んなわけないでしょ」

リアンは動かずに、ただ、クイーンに身を任せた。

「お前は何も言わないから・・・しかたなくここに残ったんだと思っていた・・・」

その言葉に。

「ばっかじゃないの!!?」

今度はリアンがキレた。

「さっきもアンタそんなこと言ってたけどさ!だれが好きでもない奴と結婚なんかするかっての!好きでもない奴に抱かれ続けるなんて俺はできねーよ!!」

「・・・リアン・・・」

「つとに・・・！」

まるで強がるように、リアンはそうこぼす。

泣きながら、愛を謳うあなたが。

どこまでも、愛しくて、愛しくて。

クイーンは、下を向くリアンの顎を掴んで上を向かせる。クイーンのブルーアイズがリアンの瞳に映る。

真っ青な、クイーンの瞳が。

「何で、今まで愛してると言ってくれなかったんだ？」

クイーンの、曇りのない、その、瞳。

「アンタ・・・昔言ってたじゃん・・・」

リアンは耳まで真っ赤にしてボソツともらす。

「前に言ってたろ！？手に入ると・・・それには興味がなくなるって！！」

リアンは、クイーンの手をはずし、俯いてしまう。

「・・・リアン・・・」

その様子が、愛らしくて。

愛らしくて。

「リアン・・・心配しなくても、俺はお前のものだ・・・」

クイーンは笑顔でリアンを抱きすくめると、その額に優しくキスを落とした。

「だって、リアン言ってたよ。ここに残ったのはクイーンがいるからだって。あと、クイーンを愛してるからだって」

「・・・じゃあ、何でそれを相手に伝えないんだ？」

伝えていれば。

今回のような騒動にはならなかったのに。

「笑いながらだけど・・・何か、それを言つとクイーンに捨てられる」とか言ってた。・・・あと・・・ひねくれてるからかなって言

つてたよ」

「・・・わけがわからん」

バニーは頭を抱え出した。

「ま、あの2人なら大丈夫だって！」

アリスは明るくそう言った。

「だって、バニーの親だもん」

それってどういう意味・・・？

「ま、まあ・・・何とかなるかな・・・」

そう言つと、バニーは思いついたようにアリスにキスをした。

「な・・・！！？」

それだけで、アリスの心臓はものすごい音で鳴り出す。

これは、まだダメかな・・・。

真っ赤になつて挙動不審となるアリスの様子にバニーは苦笑する。
バニーは、まだ当分の間はおあずけを食らいそうである。

そんな、初々しい2人・・・。

「あー！！」

「?どうしたの?アリス」

突然、アリスが何かを思い出したかのように大きな声を上げる。

「・・・マスターと・・・ガーデンの出会い・・・」

さてさて。1つの謎を残したまま・・・。

バニーとアリスは家路につくのであった・・・。

〈続〉

第19話 愛を謳って・4（後書き）

いかがでしたでしょうか。何か先の見えすぎた話でしたね。あは。近々、ムーンのほうでクインとリアンの馴れ初め過去編をリアン視点で書く予定です。BL要素が強くなるかもですので大丈夫な方はよろしくお願いします。PNはがー子でございます

いつも感想などありがとうございます！本当に励みです！！うちのパソの関係でお返事ができないのですが、感想や評価は本当にありがたく、嬉しく思っ読ませていただいております！！読んでいただけるだけでも嬉しいのに・・・！頑張っ次作も書いていきたいと思っます^^

第20部 傷跡・1（前書き）

お待たせいたしました！20話です！記念すべき20話！！のはずなのに……。今回のお話の主人公は……。アレ？（笑）

第20部 傷跡・1

それは、平和な日に起こった。

空は晴れてていいお天気。

いつもは午後はバラバラのメンツも、なぜか今日は公館もといク
イーン邸に集まっていて。久しぶりに、みんなで和やかにお茶会と
相成って。

そんな、平和な時間に。

厄介事を持つてきてくれたのは・・・。

最近、とんと出番の少ない、ブラックとホワイトであつた・・・。

バンッとアリスたちが揃つてお茶を楽しんでいた部屋の扉を荒々
しく開くと。

ブラックと、ホワイトが乱入して来る。

この2人は、朝、ご飯を食べる席にもいないことが多い。最初こ
そいたものの、もともとじつとしていないことができない人種なのか、
やれ今日は何をする〜といつも出歩いているのだった。

「おんや〜珍しいねえ。2人とも。お茶でも・・・む・・・？」

リアンのセリフに返すこともなく、2人はズンズン進んでくると。

「お願いやー！」

「かくまって・・・！！」

手を組んで。

うるうると、おねだりモード。

そして、言うが早いかテーブルの下に潜り込む。

「！？・・・おい、何なんだ！？一体・・・」

さすがのクイーンも説明もせず不可解な行動をとる2人に怪訝そ
うな顔をしている。

「どうしたのさ、2人とも!？」

アリスも、いつもと違う2人の様子にテーブルクロスをまくって2人に尋ねる。しかし、まくったテーブルクロスは、ホワイトによって再び降ろされてしまった。

「何なんだ? 一体……」

その場にいる全員が、わけがわからない、と言った顔をしていると……。

「あ、あの……クイーン様……」

おずおずと、トランプ兵が声をかける。どうやら、ホワイトたちの後に入って来たらしい。

「何だ?」

「その……お客様がいらしているのですが……」

トランプ兵は、ちらりとテーブルの下へ目をやりそう言った。

「……通せ」

どうやら、本当にブラックとホワイトは誰かから逃げているらしい。

果たして。

それは誰なのか……。

「失礼致します」

トランプ兵に促されて入って来たのは……。

「……これは……また……」

まったく同じ顔をした、2人の青年。長身なうえに、黒い髪に黒い瞳に寡黙な様子がその2人からどこか威圧感を漂わせる。

全員が、その2人を前に呆然としていると。そのうちの1人の青年が口を開いた。

「お初にお目にかかります。クイーン様、皆様。私はサクラと申します」

低いバリトンに、無表情で敬礼をする。

「ツバキと申します。突然の乱入、お許しください」

こちらにも、右に倣え。

どうやら、前髪が右わけがサクラ、左わけがツバキらしいが・・・
何ともややこしい・・・。

「いや、かまわん。ところで、何の用だ？」

クイーンは、そんな2人の威圧感ものともせず、無然と答える。
「こちらに、ブラックとホホワイトがお邪魔していると思うのですが」
相変わらず無表情にサクラは言う。

「そこにいる」

クイーンは、間髪入れずにテーブルの下を指差して答える。

「ひどいで！！クイーン！！」

「ちつとは考えるとかせーや！！情けつちゅー言葉を知らんのかい
！！」

2人は、ぱつとテーブルの下から顔を出すと、クイーンに詰め寄
って文句を言う。

「・・・単純バカ・・・」

バニーはその様子を見ながら呆れたように呟いた。

「ブラックー！！」

「ホワイトー！！」

サクラとツバキが、2人を見やって声をあげる。

その2人の声に。

ブラックとホホワイトは黙って静かに振り返った。

「あの2人が・・・黙った・・・！」

・・・それは驚きすぎだろうよ。ガーデン様・・・。
そんな何だかピリピリした空気の中で。

「リアンさん！サクラさんたちって、ブラックさんたちとどうい
う関係なんですか？」

ひそひそ。

「あ！僕も知りたいです」

ぼそぼそ。

マスターとソウの“何々？”という興味津々な表情を受け、リアンは。

「そんなの・・・俺が知りたいって・・・」

どうやら、今回の件に関してはリアンも知らないらしい。

一体、サクラとツバキとはどういう人物なのか？

そもそも、この4人の関係は何なのか・・・。

「・・・この国ってさあ」

傍で見ていた裕馬が、ぼつりと。

「双子多いのか？」

論点はそこじゃありません。

「さあ？」

その言葉に、真剣に悩まなくていいですよ、なアリスちゃん。

「さあ、早く帰るぞ」

サクラが、ぐいつとブラックの腕を取る。しかし、ブラックはその手を強く振り払った。

「何でや！お前と同じとこなんて帰らへんわ」

ブラックの、初めて聞く、強い口調。

「わいもお前と帰る気いなんてあらへんで。ツバキ。はよ帰り」

冷たい視線をツバキに向け、ホワイトは低く言い放つ。

「連れて帰る」

何だか・・・。

火花が散ってんですけど・・・。

「こ・・・こわ・・・」

ぼそりとアリスが言うのも、無理ないってことで。

そこへ、こほんと咳払いをし、クイーンが4人の間に割って入る。

「・・・とりあえず・・・事情を知りたいんだが・・・？」

こめかみを押さえながら、一言。

「どうやら、クイーンすらも、この4人の関係を知らないらしい。

「わけなんてあらへん。勝手にこいつらが追いかけて来たんや」

「勝手に？もうとづくに期限はすぎてるんだぞ！？」

「んな事知るか！だいたい、結婚は両者の同意に基づいて行なうもんやろ！？わいらは同意した覚えなんぞないわ！！」

数十秒間の、沈黙。

『何 ！！！！？？』

これは、その場にいた当人たち全員の叫び。

「け・・・結婚！？」

これはバニー。

「ブラックとホワイトと！？」

クイーンに。

「本当に！？」

リアンと。

「あんたらが？」

最後はガーデン。

そして。声をそろえて。

『悪いことは言わない。今からでも考え直せ』

きつぱりと、大変失礼なことを言つてのけるのであった。

「何や引つかかるけどまあええわ。ほんま、考え直し」

「嫌だ。お前は俺の妻だ」

そして、また問答が始まる。

「あほか！！勝手なこと言いなや！！」

「お前だつて俺の妻だろうが」

ぎゃあぎゃあと。

同じ顔が4人で、押し問答。見てると誰が誰だかわからなくなってくる……。

同じ顔で、こつちがしゃべったかと思えば次はあつちで。あつちはこつち？ん？あなたはどつちでしたっけか？

何だか、催眠術にでもかかりそうだ……。

「だいた……！」

「うつるさ……い……！」

ぶっちんと。

誰がキレたかは言うまでもなく。

アリスの一声に、あたりは水を打ったように静まり返った。それからアリスはキツとブラックとホワイトを睨みつける。

「ちよつと黙ってる！話がわからん……！」

「ひいひい……！アリス、目えすわつとるでえ……！」

「こ、怖いわ……！」

さすがの2人も、アリスの怒気に気おされ、おとなしくなる。

その様子に、うつとりと。

「可愛いなあ。アリスは」

大物発言ですな。バニー様。

キレた人間を見てそんなことが言えるのは、やはりその人を愛しているからなのだろうか。

「……苦労するぞ、バニー」

クイーンは無然とそう言った。

それに対し、バニーはにっこりと。

「あなたほどじゃありませんよ」

と言つてのけるのであった。

「さすが俺とクイーンの息子……！」

ぶぶつと噴出すリアンさん。

「性格の悪さは一級品」

間髪入れずにガーデンさん。

「ガーデンさん!!」

そしてさらに間髪入れずにマスターさん。

なんだか端で関係ない突っ込み大会が始まっている……。

そんな大人たちを放っておいて、裕馬が切り出した。

「で？結局、どういった関係なんですか？」

あなたたち、4人は……。

「あかの他人や!!」

『婚約者もとい夫婦だ』

真剣に叫ぶ4人だが。

その内容たるや……。

「まったく、かみ合ってますね……」

ソウも、もうどうフォローしていいやら、と。

そして、その場にいた当人たち以外全員が。

この時。

何かに巻き込まれていく運命を、感じたのであった……。

〈 続 〉

第20部 傷跡・1（後書き）

いかがでしたでしょうか。いつもいつも、お待たせして申し訳ありません！

今回からしばらくお騒がせ2人組みのお話です。でもチマチマとアリスやソウのところのカップルの動向も入れていこうと思っていますので、楽しみにしてくださいね

実は、今までの話は中学の時に考えて書き溜めていたものだったのですが、この話の途中で実は途切れております（笑）この先、うまい具合に話進めていけるかな・・・ドキドキ。この時期の感性よ、降りて来い・・・！！ではでは、これからも暖かく見守っててくださいまし。ペコリ。

第21話 傷跡・2（前書き）

まだまだ続きます。お騒がせボーイズのお話。次話より、タイトルに沿った流れになって行く予定です。

第21話 傷跡・2

「どうぞ、紅茶です」

サクラと、ツバキの前に琥珀色をした紅茶が置かれる。

「すみません」

2人は静かにマスターに頭を下げる。

結局。埒があかないので、とりあえず、話をきこうということになつて。

和やかだったその席に。どこまでも仏頂面の2人と。どこまでも不機嫌そうな顔の2人が加わつて。何だかとても楽しい感じなお茶会と相成つたのであつた。

「・・・くつろいどらんと、はよ帰り」

それでもいまだ喧嘩ごしの姿勢を崩さないこの2人に。

「お前たちが帰るまでは帰らん」

どこまでも譲らない人たち・・・。

あ・・・胃が痛い・・・と、ちよつとか弱い人なら軽くストレスで胃に穴が開きそうな雰囲気の中。

深い、深い沈黙が続く。

「で？ いったい何なんだ・・・？ 悪いが、説明してくれないか？」

クイーンは、はあとため息をつきながらサクラとツバキの方を向き、そう言つた。

「はい」

「説明なんかいるかい！！ はよ帰れ！！ よけいなこと言いなや！！」

「お前らがそんなだから説明が必要なんだつーの・・・。
「バニー、ガーデン」

疲れたように、クイーンが2人を呼ぶと。

同様に疲れた顔をした2人がブラックとホワイトを羽交い絞めにし、その口を塞ぐ。

「ん~~~~~!!」

「ん~~~~~!!」

何だかバタバタ抵抗しているが、この際そんなことは放っておいて。

「それじゃあ、話してくれるか？」

クイーンの促しに、最初にツバキが口を開く。

「私たちは・・・幼い頃から婚約していたんです。何度か、お互いの家を行き来したりもしていて」

そして、その続きをサクラが受ける。

「そして、昨日をもって私たちは夫婦となったんです」

昨日をもって？

その言葉が引っかけたアリスは小声でバニーに話しかける。

「どういうこと？結婚式とかしてないでしょ？」

結婚したのならば、もっと大々的に結婚したことがわかるものではないのだろうか。

「ああ、アリスは知らないんだよね。僕らの世界では婚約した時に“期限”を決めるんだ。で、その“期限”がくれば自動的に夫婦となるんだよ」

「へー・・・」

その説明を聞いて。

あれ・・・？てことは・・・。

俺とバニーにも、期限があるっていうことか・・・？

アリスの脳裏に、ふと疑問が浮かぶ。

まあ、また聞いてみればいいか。

とりあえず、今は。

この騒動をどうにかしなくては・・・。
どんよりと、現実に戻るのであった・・・。

「は、そういうワケだったのね」

リアンは合点がいったというようにうなづいている。
ただあとは、その結婚を、理由は知らないが今になってブラックとホワイトがゴネている、と。そういうわけなのね。

「それって、親同士の決めたものなんですか？」

親の勝手な政略結婚。それを嫌がっているのではないか、とソウがその意を含んだ質問をする。

ソウの質問に、サクラはブラックを見やり答える。

「いえ、私たちも了解の上で、です」

そのサクラの答えに、今までガーデンに羽交い絞めにされていたブラックが、そのガーデンの腕に噛み付いた。

「・・・つつ!!」

「ガーデンさん!？」

ガーデンのその力が緩んだ隙に、持ち前のフットワークのよさでブラックはガーデンの腕をすり抜けた。ガーデンを心配し、かけよるマスター。

そんな2人を無視して。

ブラックはサクラを指差して抗議した。

「了解の上やて? 5歳のガキに婚約じゃあ結婚じゃあの意味がわかるかい!! んなモン無効や!! 無効!!」

ブチ切れブラックに対し。

「・・・俺は理解していた」

どこまでもさらりと。サクラが答える。

どこまでも・・・。

どこまでも・・・。

ブラックじゃサクラには敵わないだろう。と。その場にいる全員が思うのであった（ホワイト除く）。

「お・・・」

細かに震えながら。

「お前が理解しとっても・・・！わいは理解しとらんかったんや」
「！！！！」

ブラックは、その主張を。

どこまでも響かせるのであった・・・。

～ 続 ～

第21話 傷跡・2（後書き）

いかがでしたでしょうか。相変わらず更新がトロくて申し訳ありません；次話より話に展開が出てきますので。楽しみに待っていてくださいね

お知らせですが、ムーンライト（ノクターン）のほうに、クイーンとリアンの話をUP致しました。あまり過激なものにはしないつもりですので。大丈夫な方はそちらも読んでやってくださいね そちらにも評価や感想をいただけるとありがたいです。それでは、これからも“アリス”をよろしくお願い致します！

第22話 傷跡・3（前書き）

お待たせいたしました。今更なんですが……。双子が何弁をしゃべっているのかわかりません……。へたに関西弁とかにするからこんな収集のつかないしゃべり方になってしまっんですよね……。
ウフ。（反省）

第22話 傷跡・3

「サクラさんとツバキさんはまだ帰ってないよ」

リアンは、扉を開けるなり相も変わらずブスくたれてるブラックとホワイトに、半ば呆れ気味にそう告げた。

「・・・何で帰らんのや・・・」

「しつこい奴らやな・・・」

ブツブツと・・・クッションを抱えながら呟かない。
怖いっつーの。

あの後。

まさしく収集のつかない現場から。逃げ出したのは・・・やはりブラックとホワイトだった。といっても。クイーン邸の数ある客室の一室を乗っ取ったってだけなのですがね。1階にサクラとツバキがいるので、自分たちは2階の客室を選ぶくらいが、2人ができるせいぜいの意地なのかもしれない。どうせ、どこまで行っても追いかけてくるのだ。だったら。たくさん人もいて安易に手を出すことのできないここで根競べをすればいい。

あとは、あいつ等があきらめるまで待てばいい。そう、2人は判断し客室に引きこもっているのだった。

もちろん。

他のメンツは、予想通り。思い切り巻き添えをくらうはめになったのであった。

「・・・ねえ、ブラックとホワイトは何でそんなにあの2人のことが嫌いなのか？」

ブラックとホワイトが籠城している客室には、アリス・マスター・ソウ・リアンもいた。その中で、アリスは気になっていたことを質

問してみた。

この2人がここまで頑になるところを始めて見たのだ。そこま
で、あの2人のことが嫌いなのだろうか。あまり悪い人っぽくはな
かったんだけどなあ。とアリスは密かに思う。

まあ、好きでもない人間との結婚とは嫌に決まっではいるが。
他にも何か、理由がありそうで……。

「……別に……」

「嫌つとるわけや、ないんやけどなあ……」
困ったような、笑み。

「……話してみて、くれませんか？お二人がここまでされる理由
を……。もしかしたら、力になれるかもしれないから……」
その2人の表情に、マスターが心配そうに声をかけた。

アリスも、ソウも、リアンも。真剣なまなざしで2人を見やる。
ブラックとホワイトは、しばし2人で視線を交わした後、ぽつり
ぽつりと話始めた。

「わいらは……。わいらが本当に婚約しとったんは……。あいつ等
やないねん……」

「あいつ等の……。兄貴やねん……」

ブラックとホワイトは目を伏せたまま、話を続ける。

「婚約は……。わいらも同意の上やったん。ちゅーか、まあ。これ
でも結構いいとこの坊ちゃんやからな。わいら。そういうんがある
んは、仕方ないってのもあつたんやけどな……」

苦笑を浮かべブラック。

「親同士も仲よかってん。わいらも……。その、スミレ言うねんけ

ど、スミレのこと嫌いじゃなかったし・・・」

それを引き継ぎ、ホワイトが言う。

「・・・ん？ちよつと待てよ・・・スミレって一人？」

そこまで聞いたところで、リアンが口を挟む。

そのもつともな質問にブラックがうなづく。

あれ？

婚約つて、つーか結婚つて、基本は1対1ですよ？いや、まあ一夫多妻制つてのもありますけれども・・・。

皆の頭上に？が飛ぶ。

まさか。そのスミレさんとやらも、どこぞの高飛車さん方のようにいくらでも妻つっーか愛人つっーか困っちゃうような人ですか？

「その婚約の書類ゆーのがあやふやなモンでなあ」

皆の無言の問いにホワイトが答えづらそうに話し出す。

「明記してあるんが“自分たちの子どもを婚約・結婚させる”っちゆーことだけで、その辺の細かいところが書かれてないねん」

さすがこの2人の親・・・！！！！（とその仲良しさん！！）

とりあえず。皆の心の声にはそつとフタをして・・・。

「せやから、誰が誰と婚約する、とか結婚するとかいうんは決まってるないねん」

「でも、サクラさんはブラックさんと、ツバキさんはホワイトさんと婚約してるゝみたいなこと言ってますたよね？」

ソウの質問に。

「それはあいつ等が勝手に決めよつたんや！！」

「ぎゃーぎゃーと再びうるさく加熱し始めるこの2人。もういいかげんにしないとコンクリで埋めちゃうぞ」

「え？じゃあ、そのスミレさんは？」

アリスのその言葉に。

2人の表情が一瞬にして凍りつく。

「・・・え？」

なんか、マズイとこに・・・ふれ・・・た？

「・・・だ」

しばしの、沈黙。

それを小さな呟きが破る。

「・・・スマレは・・・死んだ・・・」

顔を上げて、皆を見据えて。

「・・・スマレは・・・わいらが殺したんや・・・」

2人は、そう呟いた。

「そうか、事情はだいたいわかった」

こちらは、サクラとツバキのいるさきほどの客間。ここにはクイン・バニー・ガーデン・裕馬がいた。こちらでも少しずつ話をしているようだ。

「だが、ノーテンキなあいづらが・・・あそこまで頑なに嫌がるとはな」

婚約の書類の内容の話まで終わったところで、クインはそうもらす。

「・・・ノーテンキ・・・？」

そのクインの言葉に、サクラとツバキは眉を寄せる。

「あの2人は、ノーテンキなんかじゃありませんよ？」

その2人の言葉に、今度はクイン達が眉間に皺を寄せる。

ノーテンキじゃない？

あの2人が？

“バスケや〜！” “サッカーや〜！！” と日々走り回り、いるだけでまるで公害のごとく騒ぎまくるあの2人が能天気でなかったら何だと言うのか。

まさしく、それを顔全面にクイーン・ガーデン・バーニーが出している。

「・・・俺も・・・、てか、俺はあの2人とは付き合い短いからよくわかんないッスけど・・・。俺も、あの2人が能天気だとは思えないんだけど・・・」

裕馬がそこで初めて口を出す。

確かに、ブラックやホワイトと会って関わった時間はとても少ない。でも、何だか。遠くからあの2人を見ていると・・・。

「・・・どうして、そう思う？」

クイーンが、静かに問う。

「わかんないッスけど・・・あの2人は・・・どこか無理してる気がする・・・」

皆の視線が裕馬に集まる中、裕馬はそう答えた。

〜 続 〜

第22話 傷跡・3（後書き）

少し話しに展開が・・・！！次話ではアリスとソウの各カップル話が入ってくる予定です お楽しみに！

余談ですが、20話もいったし、いつも遅い更新を暖かく待ってくださってくださっている読者様むけに感謝企画でもしようかと。アリスキャラでの座談会チックに。各キャラへの質問やこんなシーンが見たいなどリクエストお待ちしております（メッセージでも評価でもいいので。アドとかは別に入れなくて結構ですので^^）！感想や評価くださった方へのコメントも入れたいと思っていますので！名前がわかっていいる方は出させてもらおうとも思っております（嫌な方は言ってね）！多くのご参加お待ちしております 9月下旬か10月半ば頃作成予定 UPするまで受け付けております。

第23話 傷跡・4（前書き）

お待たせいたしました。今回はアリスとソウのお話が紛れておりますよ。では、本編へ

あと、前話のあとがきにも書きましたが、お知らせがありますのであとがきも読んでね

第23話 傷跡・4

「何かびっくりしましたよね。まるで2人とも別人みたい」

ソウは、ブラックとホワイトの寝顔を見ながらしみじみとつぶやいた。

「本当。何か、らしくなかったよね」

そのソウの横で、アリスもうなずく。

ブラックとホワイトは、話の途中で疲れたから、と眠りについてしまった。残された面々は、それぞれに・・・悶々としていた。

「ああ！！やっぱり気になる！！気になるところで話が途切れたあゝ！ブラックたちとスミレさんとの間に何が！？」

突然発狂したように叫びだすリアン。

そのリアンを、2人が起きますよ、とマスターが咎める。だってえと言いながら、リアン。

「・・・下に降りてみませんか？サクラさんたちの話も聞いてみたいし」

マスターは、リアンを咎めた後、思い立ったようにそう言った。

何だか、話が尋常じゃない方向に流れてきた今。

もっと確かな情報が欲しい。

「んゝ・・・そうだねえ。そうしますか」

リアンも同じ事を思ったのか、腰を上げる。

リアンとマスターはそう言うと、静かに部屋を出て行った。

何となく。

その場に残ったのは。

アリスと。

ソウ。

そういえば。2人きりになるのって初めてだな・・・。

ふと、アリスはそう思った。

ちらつと横を見やると。そこらのアイドル顔負けの、清楚なお顔。男子校に通っていれば、きっとアリスと悩みを分かち合えたらう。そんな顔立ちに、雰囲気。

「・・・アリスさん・・・」

じつと横顔を眺めていると、ソウがこちらを振り向く。

「え？」

「あまり見つめないでくださいよ」

照れます。と顔を赤らめてソウは言う。

か・・・可愛い・・・。

なぜかアリスまで赤くなる。

「あ、や、・・・ごめんごめん」

そのアリスの様子に、クスッとソウは笑み。

「もう、あんまり熱烈に見られるとムラムラしてきちゃうじゃないですか」

につこりと恐ろしいことを言いなさる。

「!!!?」

皆様、お忘れかもしれませんが。

「なーんて。冗談ですよ。僕の好みはガタイのいい人なんです」

この可愛らしいお顔をしたソウくんは。

「今は裕馬さん一筋ですしね。ね、裕馬さんってヤリがいがあると思います・・・」

「わーわーわー!!!」

バリバリの男の子くんだったのです。

てか、黒い笑顔で裕馬の貞操を狙わないでくれ！！
と、いうか。

発言が教育指導ものです。

「もう！アリスさんてば可愛いんだからあ」

・・・どこまで本気だ。あんた。

ああ。何か。このノリは・・・。

リアンに似ている・・・。

遠くでそんなことを思いながら。

「・・・ていうか・・・ソウって、ほんとに裕馬のこと・・・」

アリスは、現実へどうにか戻って。

ずっと気になっていたことを聞いてみた。

「はい。愛してますよ？」

あ、そんなつづらな瞳で言われると・・・めまいが・・・。

「最初はほんと、外見が好みだなって思ったんですけどね」

いや、うん。

確かに、裕馬はいい男だと思う。

身長もあるし、ほどよく筋肉もついてるし。

女の子にもモテるし。

「最近はまだ・・・僕と目が合うだけでほのかに顔を赤らめると
ころとか・・・」

え？誰がですかね？？

「ふいにキスした時の驚く顔とか、抱きついたりちよつとイタズラ
したりした時の何ともいえない表情に・・・ふふ。」

えっと。それは俺の知ってる裕馬ちゃんと本当に同一人物ですかね？
ていうか、今何て？

い・・・いたずら・・・？

「ちょっともうそろそろ・・・押さえがきかないかなあ・・・なんて・・・」

裕馬・・・！！！！貞操の危機・・・！！！！？

遠くを見ながら黒く笑むソウ。

アリスは。

悪友が遠くへ行ってしまう予感をひしひしと感ずるのであった・・・。

「・・・や、やっぱり・・・」

打ちひしがれながらも。

アリスは、黒く笑んでいるソウにもう一つ、質問を試みた。

ずっと、気にはなっていた、こと。

「何ですか？」

「その・・・し・・・したい、もん・・・？」

や、それは男だし。

その気持ちはよくわかるんだけどさ。

何分、勝手が違うじゃん？こっち（元いた世界）と。

だから、どうなのかな、とも思うわけよ。

「・・・アリスさんとバニー様って・・・もしかして、まだ？」

もう、耳から顔から赤くなっているのが自分でもわかる。

アリスは恥ずかしさをこらえながら、俯いたままうなずく。

出会って、もうだいぶん経つ。

両思いになってからも、どのくらい過ぎただろう。

相変わらずバニーは、その優しい笑みで、俺を見てくれる。

相変わらずバニーは、優しく、額や頬に、キスをしてくれる。

でも。

どれだけ一緒に夜を過ごしても。

バニーはそれ以上のことは決してしてこない。

いや、それでも困るんだけど、ね。

それでも・・・。

俺に、魅力がないからなのかな・・・。とか、思ってしまうから・・・。

「すご～・・・」

乾いた、ソウの声。

「や、やっぱ、ありえない・・・？」

これだけずっと一緒にいて、手も出されないなんて、やっぱりおかしいよな・・・。

あ、何かちよつと、泣きそう、かも。

じわつと、目頭が熱くなるのをアリスは感じた。

「大事に、されてるんですね・・・」

「・・・え？」

思っても、みなかった、こたえ。

思わず顔を上げたその先で。

優しいそうな、どこか羨ましそうな、照れているような・・・ソウの笑顔と視線がぶつかる。

「それって、すごく大事にされてるんですよ。アリスさん。アリスさんの心の準備ができるまで、この世界に慣れるまで・・・きちんと待ってくださってるんですよ。きっと」

「・・・そ・・・なの、かな・・・」

「まあ、わかりますけどね」

「・・・？」

ソウはアリスの声に出さない思いに気付いたのか、にこっと笑んで。

「バニー様を見ていたら・・・バニー様がすごくアリスさんを大切に思っているのが」

ああ。

涙が、溢れてくるよ。

「ふふ・・・僕はお二人がとっても羨ましいです。何だか、とっても理想なんですよ」

涙が。

溢れる。

「・・・お二人を見ていると・・・僕も、裕馬さんを大切にしなきゃって、思えてくるんです」

アリスは、溢れてくる涙をぬぐいながら。
「そうだよ。裕馬は俺の親友なんだから」

人に愛されて。
人を愛することって。

「絶対、大事にしてやってよ・・・！」

こんなにも、心が温くなる・・・。

明るく笑うアリスに。

「もちろんですよ」

ソウも、笑顔で応えた。

「体の隅々まで、僕なりに大事に扱わせてもらいますよ」

いままでのプチ感動話を返しやがれ。

どこまでも、ゴーイングな。
ソウなのであった・・・。

「無理？」

クイーンは真剣な面持ちで裕馬の言葉を反芻する。

「ええ。無理に明るく振舞ってるような気がするんです・・・。まるで・・・何かを必死に忘れようとしてるような・・・」

ガシャン・・・！

陶器の倒れる音が室内にこだまする。

テーブルクロスには、琥珀色のシミが広がっていく。

「・・・すみません・・・」

サクラは倒れたカップを無表情に元に戻す。

「何か拭くものはありますか」

「あ、これを」

サクラの問いに、裕馬は近くにあったナプキンを手渡した。

サクラはそれを受け取ると、琥珀色のシミをふき取り始めた。

一方、ツバキは相変わらず無表情ではあったが、どこか思いつめたような瞳をしている。それを横目に、クイーンとガーデンは静かに言葉を交わす。

「・・・何かあるな」

「ああ・・・」

そうこうしていると、リアンとマスターが部屋に戻ってきた。

「ねえ、サクラくん、ツバキくん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

リアンは、どかりとクイーンの隣の椅子に腰掛けると、間髪入れずに話を始めた。

「スマレさんのこと、聞きたいんだけど」

“スマレ”

その言葉に、案の定。

サクラとツバキはぱつと顔を上げ、反応する。

その反応を見て、マスターが続ける。

「・・・ブラックさんたちが言っていたんです・・・。その・・・

スミレさんは・・・自分たちが・・・殺した、つて・・・」

）
続
（

第23話 傷跡・4（後書き）

いかがでしたでしょうか。久しぶりの愛の国物語（笑）裕馬危うし・
・・というか、ソウが黒いよ・・・。書いていくうちにこんなキャラに・・・アレ・・・？そんなソウくんからお知らせです。

「こんにちは。ソウです。前話でも告知しましたが、作者が読者様への感謝企画をもくろんでおります。アリスキャラでの座談会を予定しているみたいなので、ぜひ僕らへの質問や見てみたいシーンなどお寄せくださいませ。僕と裕馬さんのラブラブシーンが見たいとか、裕馬さんのドレス姿が見たいとか、裕馬さんの・・・」「それはお前の希望だろ！！？」「裕馬・・・大変だね・・・。では、評価やメッセーじお待ちしております」「！？ちょ・・・アリス！ま
とめんなよ！！」お待ちしております（^^）

第24話 傷跡・5（前書き）

やっとこの話の前半戦が終わった感じ……。ブラックとホワイトのくせに話が長いですね（笑）

第24話 傷跡・5

はい。皆様こんにちは。アリスです。

えーと、今どういう状況かと言いますとね……。

ソウまで、眠りの世界に行っちゃいました……。

『何か、いい話したら眠くなっちゃった』（そのいい話を最後の最後にブチ壊したのはアンタだ）。アリスさん！何か進展があったら起こしてくださいね〜！』

そう、言葉を残して。

ブラックとホワイトが寝ている、客室のキングサイズのベッドに潜り込んでいったのであった……。

そんなわけで。ただ今一人で呆けております。

手持ちぶさたになったアリスはつまらなそうに辺りを見回した。すると、ベッドの脇に何か落ちていることに気付く。

「ん？何だろ……これ……？」

アリスは、それを拾い上げる。どうやら、ペンダントのようだ。拾い上げたそれを、角度を変えて見回していると。

急にペンダントのフタがあき、ザアッと何かがかすめる。

「わぁ……！？」

驚いてガシャンとそのペンダントを落とすと。その何かは揺らめき、そして。形を持っていった。

「立体……映像って……ヤツ……？」

それは、形を作り一人の少年の姿となった。

どの姿は、どこかしらツバキとサクラに似ていたが、どこか柔らかく、人を安心させるような雰囲気醸し出していた。

「・・・これが・・・スミレさん・・・？」

その顔には、どこまでも優しい笑みが、刻まれていた。

アリスは、ちらりとブラックとホワイトを見やると、もう1度立体映像にその瞳を移す。

それから、ペンダントを大切に拾い上げフタをすると、眠る2人の横にそっと、返しておいた。

ここは、どこだろう・・・。

とてもとても、暗い場所。
明かり一つ、ない場所。

隣には。自分の片割れがいるのに。お互いを見やることも、話することもできない。

「ブラック、ホワイト・・・」

声に振り返ると、そこには、いつもの笑顔のスミレがいた。そして、その唇が、言葉を放つ。

「愛しているよ・・・2人とも・・・」

そう言うと、スミレは炎に包まれた。

スミレ・・・！！

叫ぼうにも、近づこうにも、動かないし、声も出ない。
そうしているうちに、スミレは見る間に炎に包まれていく。

その、笑顔のまま。

いやや・・・!!スミレ・・・!!!!

手が、届かない。

スミレが、そこにいるのに。

そして、フツと炎が消え、ブラックたちはようやくソレに手が届く。

ソレは・・・。

無残にも足元に崩れ落ち。

指の隙間から、ハラハラと散っていったのであった。

いやや・・・スミレ・・・!!

置いていかんといて・・・!!

スミレ・・・!!スミレ・・・!!

「は・・・は・・・!」

「う・・・!」

2人は、同時に目を覚ます。

そこは、暗く、何もない場所ではなく。明るい場所だった。額には汗がにじみ、その頬には涙のあとがくつきりと残る。

嫌な、夢。

そう、あの時の。スマレを殺した時の夢……。

「わ！？2人とも、どうしたの！？」

アリスは、起きた2人のその表情を見てギョっとした。

「……何でもないんや……」

ブラックは、小さな沈黙の後、その手の甲で汗と涙をぬぐいながらそう言った。

ホワイとも、涙の後をゴシゴシ消している。

「……ブラック・ホワイト……」

「変な夢見ただけやから……気にせんといて……」

ホワイは、力なくそうつぶやいた。

「ブラックとホワイトがそんなことを！？」

マスターの言葉に。

サクラは顔色を変えてテーブルに身を乗り出した。ツバキも渋い顔をしながら、つぶやく。

「……兄さんのせいだ……！何だってあの人は……！こんなことになるのなら、あの時、どうしても止めるんだった……！」

「あの時って……？」

そのつぶやきに、クイーンが反応する。

「……それは……」

「話してみたらどうだ？少しは力になることもあるかもしれん」

ガーデンも、2人を後押しするように言う。

2人は、顔を見合わせた後、重い口を開いた。

「まだ、あいつ等・・・おるん？」

「あ、うん。そう・・・みたい」

唐突に、ブラックが尋ねる。

「まだおるんか・・・！わいらも下行こうで。何言われるかわかったもんやない」

ホワイトは、ベッドから降りると、つかつかと扉へと向かう。その後を、無言でブラックもついていく。

「ちょ・・・！？オイ・・・！？2人とも・・・！！？」

いきなりの行動に、アリスはどうしていいのか戸惑う。

そして、しばし迷った末。アリスも2人を追いかけて、階下に向かった。

「・・・あの2人には、話さないでくださいね」

きつちり、釘を刺して。ツバキは話始めた。

「・・・兄さんには・・・別に恋人がいたんです」

（続）

第24話 傷跡・5（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか。ちょこつと核心に触れつつ、終わった前半戦。・・・後半戦の内容・・・はや考えなな・・・。

「はい！よいこの皆さんこんにちは！アダルト担当のリアンさんです！今回の感謝企画の宣伝は俺です！まだまだ質問やリクエスト受付中です。ちらほら集まってきてるよ。俺への質問もよろしく！あ、でも俺ってばシャイだからあんまり過激な質問はダメよ。」「どこがシャイだ・・・。」「ちよつとクイーン、横から茶々入れないでくれる？」「では、たくさんの方のご参加お待ちしております。」「そんなにこやかに・・・！てか、俺まだしゃべり足りない・・・終。」

25話直前！アリス感謝祭（前書き）

やってまいりました〜！感謝企画 とてつもなく頭悪そうなものができた予感（笑）セリフのみで進行していますので、少し見づらいかもですが・・・では！どうぞお楽しみくださいませ〜！！！！

25話直前！アリス感謝祭

ごあいさつ

アリス：えっと、みなさんこんにちは。いつも“アリスな話！”ご愛読、ありがとうございます！日ごろの感謝を込めて、今日は感謝祭もとい座談会を企画しましたので、違ったアリスの魅力を楽しんでいってください！今回、司会進行のアリスです。よろしく願いします！で、これでいいのかな……。 （不安）

リアン：アリス、カンペ棒読みすぎ！もつとリラックスしたら？
アリス：だって……。！こんな大役……。！リアン、代わってくれよ！ （必死）

リアン：え、メンドイから嫌！あはははは！ （サラリ）

マスター：リアンさん……。 （あきらめたような笑み）大丈夫ですよ。アリスさんなら。ね？

アリス：マ、マスター……。！ （感動）

ガーデン：何の根拠もねえけどな。 （ズッパリ）

マスター：ガーデンさん！！！！

こっちの世界の構造は？？

アリス：俺、これ、スッゲー疑問。 （私も疑問……。）

裕馬：確かに。地理とかもそうだけどさあ。国？なんですか？こっちの政治体制みたいなのでどうなってるんすか？

クイーン：地理から言えば、10の地域からなる。1つの地域がそっちの世界でいう日本くらいの大きさか。その地域をくぎるように線状の海がある。各地域にはそれぞれ富豪がいてその富豪によってその地域はまとまっている。それをさらに王家の人間がまとめる、といった感じか。

ガーデン：地域をまとめる程度は富豪レベルでできるが、この世界をまとめ、維持することは王家の人間にしかできないからな。

ソウ・ちなみに僕もサドナっていう地域の富豪の出です。

アリス・へ、そんなシステムなんだ。 (今決めてみました・・・)

王家・・・て？

アリス・王家・・・って何回か出てきてるけど・・・？

バーニー・10ある地域のうち、このレグナって地域だけは王家の管轄なんだよ。だから、王家やその分家が多く住んでるんだ。

裕馬・ソレ！俺、ずっと気になってただけだよあ・・・。もしかして、みなさん、王家のつながりなんじゃ・・・？ (恐る恐る)

リアン・あれ？知らなかったっけ？マスターはクイーンの弟になるんだよ。

アリス&裕馬・ええ！！？ (似てない)

マスター・ええ。そうなんです。あと、ガーデンさんとは父方の従兄弟同士になるんです。

アリス&裕馬・従兄弟！！？ (クイーンとガーデンにはつながりを感じる・・・)

リアン・さらにさあ・・・クク・・・ブラックとホワイトはクイーンの甥になるんだぜ！！ (大爆笑)

アリス・クイーンがおじさん・・・！！？ (ちよつと笑える)

クイーン・余計なことは言わなくていいんだよ！ (怒)

こっちの世界での生活

アリス・スケールが違うよね・・・。建物とか服とか食べ物とか、根本は変わらないんだけど・・・。

裕馬・どっか中世のヨーロッパ風なところはあるよなあ。向こうみたいに電化製品ガチャガチャあるわけじゃねーし。

リアン・生活でいうとそんな感じかもねえ。でも、スケールの大きさは王家の生活だからだよ。一般のご家庭じゃこんなどの御殿？みたいな生活してないって。

バニー：？これが普通じゃないのか？

クイーン：普通だろ？

リアン：あはは。黙ってる。このボンボン共。（ザツクリ）

裕馬：このスケールには相変わらず、何か慣れないよなあ（苦笑）

感想などについて

アリス：嬉しいかぎりです！ほんと。読んでくれるだけでも嬉しいのに、感想や評価までいただけると本当に嬉しいです！！

バニー：BLには抵抗があったけどって人や、主婦&ママ業しながら読んでくれる人とか。BL好きな人とかね（笑）僕たちも恥を忍んで日々の恋愛中継してるかいがあるよね、アリス。（にっこり）

アリス：……！！（赤面）

リアン：どこらへんを忍んでるのか教えて欲しいわ。（ツツコミ）

マスター：でも、作者としてはボーイズラブ（BL）を書いていいものかいろいろ悩んでの投稿でしたから……こうしてみなさんに作品を読んでもらって楽しんでもらっていることはとても嬉しいことですよ。（涙目）

ソウ：マスターさん……。本当ですよ！僕もそう思います……

！要は……。これから読者を離さないようにガッツリ私生活を公開していけてことですよね！！？

マスター：え……。？や？（違う……。！！）

アリス：……。ほんと……。どこまでも……。

ガーデン：いい話をブチ壊す奴だな……。 （遠い目）

コメント・質問

アリス：えっと、今までに寄せられたコメントや今回、感謝企画を進めるにあたって寄せられた質問を紹介、お答えしていきたいと思っています！えっと、まず始めは……。

（霜月黎夜様よりのご質問）

『やっぱり、と言いますか．．．．裕馬くんが受け、ですか？』

裕馬：．．．．！！！！？（赤面）

ソウ：あ、僕たちのことですね！裕馬さん！

裕馬：アリス！！何でこんな質問持ってくんだよ．．．！！

アリス：いや、だって、来たんだもん。

裕馬：テメ．．．！！

ソウ：やっぱりっていうか、そうですね！

裕馬：ソウ．．．！！

リアン：へへ、やっぱり裕馬くんの方が受けなんだ？

裕馬：リ．．リアンさん！？やっぱりって．．．！！？

ソウ：（裕馬を無視して）僕、ガタイのいい人組み敷くの．．．大好きなんです．．．。（うっとり）

裕馬：．．．！！

アリス：あはは。何だか結構、ソウと裕馬の動向を気にされている方もおられるようなので。次のシリーズあたりでは、2人の話も出てくるんじゃない？（しょせん他人事）

裕馬：．．．！！？な！そんな恥ずかしい話できるか．．．！！

リアン：そんな恥ずかしいような恋愛話なわけ？2人の関係って（ニヤニヤ）

ソウ：そうですよ！いつ教育的指導が入るかヒヤヒヤものの作品になりますよ！！

裕馬：ソウ！！！！

クイーン：．．．．お前、ソウを嫁にもらわなくてよかったと心底思ってるだろ．．．．。

バニー：本当に、心の底から思いますよ．．．。（遠い目）

とりあえず．．．裕馬と言う名のスケープゴートに合掌。

（ゆんち様よりのご感想）

『強姦されたなんて過去があつたなんて驚きです。それからどうしてクイーンを好きになつたのか・・・！？（気持ちよかったから？）』

リアン：いや〜ん、そうなのよ〜って・・・、そこ、ヒかない。冗談だつて。

アリス：ヒくわー！（赤面）

リアン：まあ、そこらへんはノクターンの方で番外編書いてるから、詳しいことはおいおいそこでわかってくるんじゃない？

ガーデン：おーい。何だか一人喜びに打ちひしがれてるのがいるぞ。クイーン：（何だか静かにニヤケ顔）

バニー：恥ずかしい両親を持って僕はもうどうしていいかわからないよ、アリス。（涙目）

アリス：バ、バニー・・・。（きゅん）

リアン：ソコ、どさくさにまぎれてアリスに抱きつかない。つか、恥ずかしいお前の母親はアリスの義理の兄だつての。つか、クイーン、にやけ顔キモイから。

ガーデン：・・・お前はもう少し恥じらいと優しい言葉を身につけたらどうだ・・・？

リアン：・・・ちよう心外。

バニー：どっちもどっちだろ。

（いつもメッセージありがとうございます！今回はお手数おかけしました！）

（青空海陸様よりのご感想）

マスター：お友達の紹介でアリスを読んでもらったそうです。

ソウ：お友達、グツジョブ！！ですね！！

アリス：何でも、青空さんはリアンに似ているらしいよ。

リアン：俺に？そりゃ、スゲーいい性格じゃん！！

バニー&クイーン：別の意味でな・・・。（失礼）

リアン：俺に似てたら将来安泰よ！バッチリ

バニー&クイーン：……！！（思い切り足を踏まれた）

ガーデン：ある意味な……。 （哀れみの目で2人を見る）

マスター：でも、リアンさんみたいな方が他にもおられるって素敵ですね。一緒に話しているところとか見てみたいですね（ほんわか）

アリス：あ、でもコレ、他にもおられたんだけど、リアンの話し方が男の人に思えないって。

リアン：あらまあ。

アリス：目の前にして話すとどこまでもおちゃらけてるって感じしかないんだけど。確かにそうかも。語尾を伸ばすっていうか……。リアン：場を和ませようとしてわざとこういうしゃべり方なのにな。軽くオネエ言葉だからねえ。

ガーデン：文字だけ見ると頭悪そうだもんな。

リアン：ほめ言葉として取っておくわ。

アリス：……何か火花散ってるんですけど……。

（くるみ様からのご質問）

『アリスとバニーに進展は……。！？』

アリス：や、えっと……。その……。 （赤面）

バニー：僕はどこまでも先に進みたいと思ってるんだけどね。（にっこり）

アリス：……。ええ……。！！？

バニー：ふふ。でも、こればかりは相手のいることだし。どっかの誰かみたいにゴーカンまがいのことなんかしたくないしね。

クイーン：おい。

バニー：（無視）少しずつ、2人で愛をはぐくんでいこうね。アリス。

アリス：……。う、うん……。

リアン：……。我が息子ながら何だか周到すぎて恐ろしいやねえ。

（苦笑）しかし・・・どこまでも爽やか路線で通す気が。
ガーデン：お前等の息子なんだから性格に難アリなのは仕方ねえだ
ろ。

マスター：ガーデンさん！！

ソウ：アリスさんとバニーさんはゆつくりとした恋愛ですね。・・・
代わりに僕が頑張らなくっちゃ！！

裕馬：頑張らんでいい！！

（友人代表N様・・・）

『続きを早く・・・！番外編の続きも！！』

リアン：また来週ッ！

アリス：違っただろ！？

裕馬：これきつと、読者の思い全部反映されたコメントだと思うぜ。
・・・

リアン：カメな作者を許してね・・・！！

今後の展開

アリス：どうなるんでしょうか・・・。

クイン：・・・作者しだいだなあ・・・。

裕馬：そんな現実的な・・・。

ソウ：うちはラブラブって決まっていますけどね！！

裕馬：お前、頼むからもうしゃべるな・・・！！

バニー：（アリスを選んで本当によかった）

リアン：いいかげん、寄り道しすぎてるって作者も自覚してるから、
近いうちにアリスとバニーの話に戻ってくるんじゃない？今はそれ
ぞれ脇役がメインでやってるし。

マスター：ですね。婚約後、の進展とかも・・・。

ソウ：僕はマスターさんとガーデンさんの出会いとかも気になると
ころですけどね！！

（一部ブリザードが吹く）

アリス：お、俺、一般庶民の生活とかもみてみたいなあ！！

裕馬：お、俺も！！ははは！！（乾いた笑い）

バニー：そうなの？じゃあ、近々お祭りもあるし、一緒に行ってみようか。

アリス：祭り！？うわ！行く行く！！

リアン：ま、何はともあれ、ブラックとホワイトの今の話が一段落ついたらだ・・・

全員：！！？

アリス：そ、そういえば・・・ブラックとホワイト・・・は？（今頃）

マスター：姿、見ませんね・・・？

ガーデン：・・・そこらへんで転がってんじゃねーか。

リアン：（アンタ2人を何だと思ってんのよ）・・・もしかして、招待し忘れ？？

沈黙。

バニー：ま、過ぎたことはしょうがないですから！（爽やかに）

クイーン：ま、あいつらがいても場の収集がつかなくなるだけだしな。（ウザそうに）

アリス：（い、いいのかな・・・）じゃ、じゃあ、時間も来たことだし、最後に一人ずつ読者の方にメッセージをどうぞ！

ソウ：幸せに、なります！！

裕馬：・・・狙われてます・・・。

マスター：これからもよろしくお願いします。（ペコリ）

ガーデン：むごん。

クイーン：遅々としているが暖かく見守ってやってくれ。（礼）

バニー：みなさんの期待に添えるように頑張ります。（にっこり）
リアン：リアンファンクラブでは、随時会員募集中（勝手に発足）
アリス：（収集つかね〜・・・）えっと、こ、これから、アリス
な話！をよろしく願います！今回ご協力いただいた方をはじめ、
いつも読んでくださっているすべての読者様に感謝を込めて。本当
に、ありがとうございます！！

ボタン！！（唐突にドアが開く）

ブラック：ああ！！？もう締めに入っとるやん！？

ホワイト：ホンマや！！ひどいわ・・・！！わいら除けモンかい！
！？

（息を切らしてご登場）

クイーン：よくわかったな。（さらり）

ブラック：あっさり肯定〜〜！！？（ガビン）

ホワイト：そらないわ・・・！！

バニー：まあまあ、2人とも・・・。

ブラック：・・・！バニー！！わいらの気持ち、わかってくれるや
ろ！？今からもう一回仕切り直そうや・・・！！

バニー：もう時間ですから、無理です。（きつぱり）それじゃあ、
みなさん、これから“アリス”をよろしく願います！（にこ
やかに）

ホワイト：強制的にまとめよった〜〜！？

ブラック：この冷血一族が〜〜！！（泣き）

ブラックとホワイトの嘆き声がどこまでもこだましつつ。

これにて、感謝祭、終了〜〜！！

25話直前！アリス感謝祭（後書き）

いかがでしたでしょうか？今回のために質問を送ってくださった方、今まで感想や評価でコメントくださった方、読み専の方々、とにかく皆様に感謝感謝でございます！！なかなかテンポよく更新できずにいてすみません。こんなカメのように進むアリスシリーズですが、これからも暖かく見守ってやってくださいます！！今回のこの企画はとっても楽しかったです！本当にありがとうございました！！

第25話 傷跡・6（前書き）

あああああ。本当にもう、何と出したらよいのやら・・・！！
1ヶ月以上もお待たせして申し訳ありませんでした！！感謝企画の
次がそんなかよ！というツツコミは謹んで承りたいと思っております
す・・・。それでは、本編へ・・・！！

第25話 傷跡・6

「・・・何・・・？」

リアンは顔を曇らせてサクラたちを見据えた。
重い沈黙がその場に流れる。

「ブラックたちは・・・自分たちが兄を殺したと思っているみたいですが・・・実際、兄は・・・」

「自殺、したんです」

サクラとツバキは目を伏せて。重く、重くその言葉を紡いだ。

「・・・あれは、もう30年も前のことです・・・」

「さあさ！今日の仕事はこれで終わりだよ！みんな帰った帰った！」

「お疲れさんですー！！」

だっだびるい厨房。

その厨房に響き渡る数人の男の声。一番歳のいった男の掛け声に、厨房にいたコックたちはそれぞれ後始末を終え、散っていった。一番最後に残った男も、厨房をぐるりと一瞥し。

「よし。俺も帰るとするか」

異常のないことを確認し、その厨房から出て行った。

その後。人のいなくなつた厨房に。

シューシューという不吉な音が。その静寂の中に響きわたつていた・・・。

「今日は遅くなつたので旦那様たちは別宅に泊まって帰られるそうですよ」

にこやかに笑む、初老の紳士。

相手に対する、慈しみの感情がその瞳には溢れている。

「なんや。帰ってこんの？」

「ほな、もう寝ようか」

同じ顔をした、少年が2人。

白いパジャマに身を包み、顔を見合わせ話をする。整った顔に、完全に成熟しきってないその体が、どこか危うい印象を与える。

「ロジ、もうさがつてもええよ。僕らは2人で大丈夫やから」
にこりと、その紳士を安心させるように笑む。

「ですが・・・」

「ロジんとこ、今日は婿さんおらんのやろ？サジさんとユナちゃん
2人や心配やん。行つてあげて」

いそいそと、2人は寝支度を始めながら紳士に声をかける。

「ほら、もう寝るだけやもん」

「朝、また来てくれたらええよ」

ベッドに腰掛け、2人は言う。

「・・・すみません。お2人が起きられる前には戻りますので」

紳士は、しばし考えこんだ後。そう言った。

その言葉に、2人の少年は嬉しそうに微笑む。

「ん。おやすみ、ロジ」

「おやすみなさいませ・・・ブラック様、ホワイト様」

「どういうことだ！兄さん・・・!？」

「今、話した通りだよ」

その青年は、静かにそう口にした。

青年を信じられないといった面持ちで注視する二つの視線。その
痛いほどの視線を、まるで感じないかのように。その青年はその口
元に、笑みすら浮かべて。

「・・・！今言った通りだって！？どういっつもりなんだ・・・!？
他に・・・他に恋人がいるなんて・・・!!」

ツバキとサクラには、兄がいた。名をスマレという。

二人にはない、とても柔らかな雰囲気を持った兄。そして、その温和人柄に合わず、実はこうだと決めたらそれを最後まで貫き通す強固なまでの意志をも持つ兄。だからこそ、今日、スミレが突然“自分には婚約者のブラックとホワイト以外に、かけがえのない恋人ができた。だから、婚約を解消する”と言い出した時、兄は本気なのだろうと悟った。

しかし。

なぜ。

ずっと昔から、この婚約は決まっていたことだった。

確かに、曖昧で、不確かな内容ではあったかもしれない。それでも。

ツバキとサクラは、この婚約は絶対なのだと信じていた。

ブラックとホワイトは。

いつか、この兄と結婚するのだと。
否。

ブラックとホワイトも。

そう、信じていたのだ。

それが。

突然の、スミレの裏切り。

ツバキとサクラは、兄の突然の告白に衝撃を隠せない。

どうしてこうなった？

なぜ？

いけない。

許してはいけない。

婚約は絶対であり、今更覆すことなど、できるはずがない……！！

「……僕は今から二人にこのことを話に行つてこようと思う」
ツバキとサクラの葛藤など、まるでそ知らぬ顔で、淡々とスマレはそう言った。

まるで、早くカタをつけてしまいたいといったように。

「兄……！！」

そんな兄を行かせてはならないと、ツバキが制止の声をかけようとした、その時。

大きな音がしてその扉が開いた。

「大変でございます……！！」

息をきらして入ってきたメイドは、その非礼を詫びることも忘れ、ひどく慌てたようだった。

そして、その口から告げられたのは……。

「ブラック様と……ホワイト様が……！！」

3人がブラックとホワイトの住む屋敷についた頃には、その屋敷は、すでに手のつけようがないほどにまで紅く燃えていた。

「早く……！早く火を消すんだ……！！」

「ダメだ……！！火の回りが速すぎる……！！」

「ああ……！早くしとくれよ……！！ブラック様とホワイト様がまだ中に……！！」

屋敷を囲む、大勢の人。

屋敷に残る者を救助する者、火消しのため放水する者、ただただ、屋敷に残る者の無事を祈る者。

しかし、その火の手は。

もはやどこしようもなく。

1階から出火した火は。ブラックとホワイトのいる最上階にまで、その勢いを伸ばす。

もはやそこには絶望しがなく。

誰もが、その場にただ呆然と。

泣き、崩れる。

それは、ツバキとサクラとて例外ではなく。

メイドから事の次第を聞き、馬車を跳ばしてようやく屋敷についた、その時には。

誰が見ても、手遅れの状態だった。

そのあまりの火の手の勢いに、ただただ、呆然とその場に立ち尽くす。

ザバッ

その水音に、二人ははっと我に返る。

そして、振り向いたその先には……。

「・・・！？兄さ・・・！？」

ポタポタと、水がその体を伝い、紅く染まる地面に黒く跡を残す。

スミレは、水を滴らせながら、フツとツバキとサクラに向かって微笑んだ。そして・・・。

「きゃあああ・・・！！！」

何も言わず、その業火の中に消えていった。

（続）

第25話 傷跡・6（後書き）

1ヶ月待たせてこれかい！！つーほど進展がなくてすいません・・・！！ああ！！もうどこまでも読者様に頭が上がりません・・・（平謝り）！！待たせすぎて本当に申し訳ないです・・・。まったく毎度のこの反省が活かされていないという・・・。私の人となりがバレバレですよね・・・。うふふ・・・。

感謝企画への感想も、遅くなりましたがありがとうございました！！楽しんでいただけただけで何よりです。またしたいです（頼むからその前に本編を進めてくれ）！！あ、一つ。ノクターンやムーンライトは行っても法外なお金取られたりはしませんから大丈夫ですよ。年齢制限だけは守ってね。ムーンライトのほうが女性は入りやすいかと・・・。宣伝しといてなんですが、そっちの更新も早くしろって感じですね・・・（墓穴）つ・・・次で傷跡も佳境に入る予定でっす・・・！！

第26話 傷跡・7（前書き）

いよいよブラックとホワイトの過去が明らかになってきました。つか最近、どこまでもシリ阿斯調に進んでんなあ……。笑いの神よ……。！！！！って、こんな話のどこに笑いを入れると……（笑）

第26話 傷跡・7

「・・・ん・・・」

「んん・・・？・・・っわぁ・・・！！？」

寝苦しさ、息苦しさ、不審な物音を感じて、目を覚ます。

その目の前に広がる情景に、ホワイトから一気に眠気が吹っ飛ぶ。部屋の間隙から、白い煙が立ち込めている。

「いったい、何事なのか、と。」

最悪の事態を予想しながらも。そのドアノブに手をかける。

紅。

紅。

ただそこには、深紅が広がる。

この階まで火の子は届いていないものの、螺旋階段から見える階下は紅に染まっていて。

その煙が。

ホワイトの喉をつく。

「げほっ・・・！！！」

ホワイトは震える手でドアを閉めると、ブラックを揺さぶり起こした。

「ブラ・・・！！ブラック！！起きて・・・！！！」

その声に、ブラックは混沌としていた意識をそちらに向ける。

「何やの・・・？」

「大変なんだよ・・・！！火事・・・！！火事なんだ・・・！！！」

半分、興奮と恐怖で泣き顔になって。

「は・・・？けほ・・・！！な・・・煙・・・！？」

起きたばかりのブラックも、そのただならぬ雰囲気のパニックとなる。

「ど・・・どうしよう・・・！？下はもう真っ赤なんや・・・！降りられへん・・・！！」

ぎゅっと、ブラックにしがみつくとホワイト。

「そんな・・・！どないしたらええんよ・・・？」

そのホワイトの言葉と仕草に。

絶望を、感じ取る。

「・・・このまま・・・焼け死ぬ、いうこと・・・？」

パチパチ

ゴオオオオオ

その扉の向こうで静かに、静かに迫り来る、音。

足がすくんで、動くこともままならない。

崩れるのが先か。

炎がこの部屋に届くのが先か。

絶望と恐怖だけが、二人を包む。

「い・・・いや・・・！！」

「誰か・・・誰か・・・！！」

言葉にできない悲鳴が、響く。

おねがい だれか たすけて

ゴオオオ・・・バキバキツ・・・

ガタツ・・・ダン・・・

「・・・？」

部屋が、その白い煙に侵食され、2人の意識が朦朧となり始めた頃。

階下から、不自然な音がし始めた。

そして。

ボタン

「ブラック・・・！！ホワイト・・・！！」

その扉を開けて、入って来たのは。

なによりも いとしい ひと

頭には濡れた布を被っているものの、顔も体も、ススで汚れ、怪我をして。所々火傷もしている。

その様相に。

迫り来る火の手のすごさが窺い知れる。

「スミレえ・・・!!」

スミレは2人のもとに駆け寄ると、ぎゅっと2人を抱きしめた。

「無事だったんだね・・・!!2人とも・・・!!」

肩で息をするスミレに、2人は今だ続く恐怖と安心感に震え、涙する。

「大丈夫、絶対、助けるから」

なぜ、おかしいと思わなかったのか。

後にして思えば、そう思う。

愛する人ができて。

愛する恋人ができて。

どうして。

ためらいもなく、あの業火の中に飛び込めたのか。

ブラックと、ホワイトのために？

それもあるだろう。

いや、どんな状況であつたとしても、あの兄なら、2人のために命をかけることなど造作もなかっただろう。

けれど。

けれど、あの笑みは。

「2人とも、ちょっと離れておくんだよ」

スミレはそういうと、はめ込み式の窓に向かって椅子を思い切り叩き付けた。

その窓は、悲惨な音を立てて暗闇に消えていく。人の通れるスペースができたソコからは、冷気が流れ込む。

「ツバキ!! サクラ・・・!!」

声は到底届かない。しかし、その落下物の元へ、2人が駆け寄ってくる。そして、兄の意を汲み取る。

もしかして、と用意していたのは、大きなマット。

それを窓の下に広げる。

「さあ・・・! ブラック、ホワイト、ここから飛び降りるんだ・・・!」

その様子を確認し、スミレが2人を促す。

「・・・ス、スミレは・・・!？」

「2人のあとからいくから。先にいきなさい」

いつものような笑み。

どこまでも人を安心させるような、笑み。

ブラックとホワイトは、こくりとうなずくと意を決して窓の外へと大きく跳んだ。

ドスンという衝撃に、目を開けるとそこにはツバキとサクラがいた。

まわりから、わぁっと大きな歓声上がる。

その様子に、ああ、助かったんだな、と2人はいくぶんか安堵した。まだ体は小さく震えていたけれど・・・。

「兄さん・・・!!」

ブラックとホワイトをマットから降ろすと、再び、その紅く染まる部屋を見上げる。

次はスマイレだと。

誰もが思った。

スマイレは、静かに炎に包まれていった。

そして、まるでその瞬間を待っていたかのように、屋敷は大きな音を立てて崩れ始める。

十分、その炎から逃げられたはずだ。

スマイレは。

わざと飛び降りなかった。

「ス・・・ミレ・・・?」

「や・・・」

「スマイレ・・・!!!!」

倒壊する建物に近づこうとするブラックとホワイトを羽交い絞め

にし、食い止めながら。

ツバキとサクラは、最期の兄の姿を見た。

目が、合った。

やっと、君の所へいける・・・

ブラックとホワイトをよろしくね・・・ツバキ、サクラ・・・。

確かに、最期に兄はそう言った。はっきりと、そう、言ったのだ。

“ やっと きみのところへ いける ”

「焼け跡からは、兄の死体が見つかりました。そして、後から調べてわかったんですが・・・」

「兄が死ぬ3日前に、兄が本当に愛した恋人が他界していたんです・・・」

そこまで話すと、2人は口を閉ざした。

“ スミレを殺した ”

その真相は、スミレの自殺。

「・・・あの2人にそんな過去があったなんて・・・」

眉を顰めて、リアンが小さくこぼす。

「火事で死人が出たことは知っていたがな・・・」

「そんな理由があったから、俺たちにも詳しいことが降りてこなかったんだろうな」

クイーンとガーデンも知らなかった、と呟く。

マスターはすでに涙ぐんでいる。

「・・・ふ、2人とも、走るの早・・・！」

ハアハアと肩で息をしながらアリスがブラックとホワイトに次いで、その扉の前に到着する。相変わらず無駄に広い構造だ、とアリスは内心思う。

しかし、2人に追いついたものの。

ブラックとホワイトはその扉の前から動こうとしない。

わずかに開かれた扉。

微かに漏れてくる、室内の会話。

「?2人とも、どうし・・・」

「嘘や・・・」

その静寂を破るかのように、ブラックが小さく、しかしはっきりと、そう言葉にした。

「え・・・?ブラ・・・」

「嘘や・・・!スミレに・・・!他に好きな人がおったなんて・・・!!--」

ブラックとホワイトは、そう叫ぶと反転し出口に向かって走っていく。

「え?・・・ええ・・・!??」

今ここまで来たかと思ったら。

今度は外へ・・・?

もう、意味がわからない。

「ちょ・・・!ブラック!!ホワイト!!!!」

アリスは大声で2人を呼ぶも、2人は振り向きもせず屋敷から出て行った。

1人残され、途方に暮れるアリスのもとに声を聞きつけてツバキたちが扉の方を向く。

そこには、残されたアリスがただ1人・・・。

「・・・ブラックと・・・ホワイト・・・は？」

掠れた声で、サクラが問う。

「え？いや・・・何か・・・嘘だ、とか何とか言って走っていつちやっただけ、ど・・・で、ええ・・・！！？」

アリスが言い終わらないうちに、サクラとツバキも2人に負けないくらいのスピードで屋敷から飛び出して行った。

「・・・？？な、何事・・・？」

その2人を、呆然と見送るアリス。

ゆっくりと、残された面々へ視線を移すと。

リアンは渋い顔をし、あちゃ〜と頭を抱えている。その横では、マスターがどうしましよう、と半泣き状態でパニックっている。

「俺たちも追いかけたほうがいいな」

そう言って、静かにクイーンとガーデンが立ち上げる。

「・・・は？」

「ええ、このままだと・・・あの2人まで自殺しかねませんよ」
真剣な、裕馬の顔と台詞に。

状況を把握できないアリスも。

ただ事ではない、と感ずるのであった。

く 続 く

第26話 傷跡・7（後書き）

いやあ、双子の恋の行方が気になる場所ですねえ、ソウくん。「
いやあ、ぶっちゃけ、僕、興味ないですから」「ええ・・・!?」
そんなことより早く僕と裕馬さんを書けって話ですよ（にっこり）
ちよっとー！黒いよ！！ソウくん・・・！！」「あはは、冗談ですよ
（にっこり）」「どこまでが・・・？」「さて、次の回では僕も大活躍な
予定 みなさんお楽しみにね」「え！？そんな予定な・・・！（ソ
ウにより、後書きは強制終了となりました）

第27話 傷跡・8（前書き）

よ、ようやくと続きが出せました・・・！！いつも亀で本当に申し訳ございません・・・！！しかもまだ終わらない、双子シリーズ・・
・！！そして、双子シリーズだというのに、双子がいけないという（笑）では、お待たせいたしました！アリス続編、お楽しみください！！！！

第27話 傷跡・8

「ええ~~~~~!?何だつて~~~~~!?」

室内に響き渡ったのは。

アリスの叫び声だった。

先ほどまで、サクラとツバキのいた部屋に、今度はかわりにアリスがいた。とはいっても、さっきまでとは違い、クイーンもバニーも、祐馬もガーデンもそこにはいない。正確には、リアンも。

残ったマスターに、アリスは事の顛末を聞いていたのだが・・・。
聞くだけ聞いて、この叫び。何だかんだでみんなパニック、み
いな。

「ですから、今、話した通りです・・・」

マスターはもう涙ぐんで、今にも泣き出しそうである。

「マ、マスターまで弱気になってどうするのさ・・・!大丈夫だつて!すぐに2人は見つかるよ・・・!バニーたちが見つけてくれる・・・絶対・・・!!」

マスターを泣かすことなかれ、をキャッチフレーズで、この世界は回っております。とか、そんなことは置いておいて。アリスはマスターの肩を掴んで励ました。

マスターを、否。

自分を。

ああ。

なんて。

なんて。

胸が苦しいんだろう。

あなたのことをおもつと、なんて、むねがくるしいんだろう。

ブラックとホワイトは・・・。

いくど　あのえがおのしたで　なっていたのだろうか。

ボタン

「ハ・・・ハ・・・！」

扉が勢いよく開き、入ってきたのは息を切らしたリアン。どうやら走ってきたらしい。

「い、今・・・トランプ兵に命令を・・・！出してきた・・・！！」

「大丈夫！？リアン！？」

珍しく、本気で息も絶え絶えなリアンの元へアリスとマスターは駆け寄る。

「全力で走るなんてン年ぶりだよ・・・？ぜはっ・・・！！」

「い、今冷たい飲み物持つて来ますね！」

気遣いのマスターはそう言うつと、パタパタと奥へ駆けていく。リアンは力なくよろしくと言うつと、その広いソファにどかりと体を沈めた。

「はは・・・こんなリアンの姿、他に見れないね」

苦笑しながら、アリスは言った。

「・・・こんなことでもないかねえ・・・」

それに、リアンも苦笑で返す。

クイーン・ガーデン・バーニー・祐馬は、サクラやツバキが出て行った後ブラックとホワイトのいそうな場所を探しに手分けして出て行った。アリス達は万一、2人が戻ってきた時のため・何か連絡のあった時のために待機することとなった。

でも、こうしていると、本当に痛感する。

ただ、待っているだけの苛立ちを。

己の、無力さを。

「・・・スミレさんはどうしてブラックたちがいるのに・・・他に恋人なんか作ったのかなぁ・・・？」

アリスは、ぽつりとそう漏らした。

「・・・何も言わずに自分は死んで・・・それで満足？・・・残される人のことなんて、これっぽちも考えずに・・・それって、ひどいよね」

あんなにも、あんなにも。

ブラックとホワイトはスミレという人のことを想っていった。

かの人が死んでしまってから。

それは、見えない傷となって、2人を縛る。

どうして？

どこから違ってきたの？

「・・・人の想いはさ、どこでどうなるか、わからないと思うけどねえ・・・」

リアンの、優しい声。

「俺がクイーンに恋に落ちたように・・・アリスがバーニーに恋に落

ちたように、スミレも、恋に落ちたんじやないかねえ。他のもの、すべてを投げ出してもいいほどに、その身を投じてもいいほどに、その人を深く愛してしまったんじやないのかねえ……」

きつとそれは、運命と呼べるような出会い。

「悩んで、悩んで……」

きつと。

「それでも、その人のことが、好きだっただんたろうねえ……」

家を裏切っても。

幼い頃からの婚約者を裏切っても。

想い人は、死んでしまっても。

儚くも、強い、想い。

「俺やアリスだって、すべてを捨てて、ここにいるんだ。それは、忘れちゃいけないよ」

日々、気に病み続けることはない。

だけれど、覚えておかなければいけない。

自分たちは、すべてを捨てて、ここにしていることを。
大切なものに、無断で、ここに残っていることを。

「……ごめん……」

「……いいや……」

静かに、リアンは呟いた。

「恋は、狂気だねえ……」

どこまでも、人を狂わせる。

「う．．．ん？」

一方、こちらはどうと。一人、この大混乱の中、爆睡していたマイペース少年・ソウ。ようやくと、起きてみました。

「．．．？誰もいない．．．？」

寝惚け眼であたりを見回すが、静まり返ったその部屋には自分以外の人間はいないようだった。

「えゝ、みんな僕を置いてどこかいつちゃったのゝ？」

ぶっと、一人平和に不貞腐れながらベッドから降りる。と、カシヤツと音がして、何かが床に落ちた。

「？ロケット．．．？」

どうやら、アリスがベッドに上げたものがまた落ちたようだ。

ソウはゆっくりと、そのロケットの蓋を開いた。

そして。

「．．．これ．．．！！」

ソウは、そのロケットを手に握り締めると、急いで階下へ向かった。

その表情は、いつになく真剣なものだった。

～ 続 ～

第27話 傷跡・8（後書き）

いかがでしたしょう・・・。話進んでませんね。すみません・・・。
。ああ。もうちょっと、こう！進む予定だったのにな・・・！まあいいです。というか、ソウくん、一人平和すぎだろ。いつまで寝てるんだ・・・！！まあ、これからの活躍に期待 ですね！何やら走ってましたしね！つーわけで、今後の展開に期待！！（無理やりまとめやがったな）次はもっと早く・・・！って、いつも言いすぎて、信憑性にかきまわってるよ・・・！！

第28話 傷跡・9（前書き）

人を愛するって、まさに狂気なのかもしれませんね。とか言ってみたり。

第28話 傷跡・9

あなたがいれば他に何もいらない。

恋だけがすべてで。

愛だけがすべて。

ねえ、貴方の他には何もいらないの。

貴方がいる、それだけがすべて。

私の、すべて。

ああ。

恋は狂気だ。

「バカ、みたいやなあ・・・」

沈黙を破ったのは、ブラックだった。

2人は、ある場所に来ていた。そこは、ブラックとホワイトが初めてスミレに出会った場所。大きな、湖のほとり。暗い湖畔に、明るい月明かりだけが妖艶に笑む。両親に連れられて、自分たちはスミレと出会った。

一目で、恋に落ちた。

この恋が、永遠に続くと、信じていた。

「何かの、3文小説みたいや・・・」

くしゃつと、ホワイトは髪をかき上げる。

「・・・わいら、何のために、ここにいるんやろうなあ・・・」

貴方が助けてくれた命だったから。

私たちは、今まで生きて来れました。

「ずっと、信じとったんになあ・・・誰よりも、信じとったんに、
なあ・・・」

このひかりといろのないせかいで、わたしたちはいきつづけてきました。

どちらからともなく、顔を合わせる。

対になる、その顔。

その瞳の奥の、深い、深い闇。

その頬を、涙が静かに伝う。

「・・・もう、疲れたわ・・・」

どちらともなく発したその声は。

凜と、静寂の中に響いた。

「ブラックさんとホワイトさんは・・・!？」

お前、今頃何言ってるの・・・?

冷静に心の中で突っ込んでみました。

ソウは、階下に着くと、広間の扉を開けるなり、そう叫んだ。
「・・・!ソウ!？」

起きたんだ、とアリス。

広間は、緊張した雰囲気に包まれていた。

探しに出た面々は、方々を探し回ったが、2人の影はそこにはな

く。1度戻ってきていたのだ。地図を広げ、探し回った場所にチェツクを入れていく。

スミレの墓標。

焼けたブラックとホワイトの屋敷の跡地。

ブラックとホワイトが好んで行きそうな場所、等等。

「どこか、他に思い当たる場所は？」

クイーンが、サクラとツバキに問う。

問われても、2人は眉間に皺を寄せるだけだ。

「心当たりは・・・すべて・・・」

自分たちは、あの2人の何を見ていたんだろう。

こんな場面にあつても、2人の行きそうな場所を見つけることすら叶わないなんて。

あの2人から、ただ一人の影さえ・・・ぬぐってやれないなんて・・・。

「湖畔・・・！！湖は探しましたか！？」

アリスとマスターから、ここまでの流れを簡単に聞いたソウは、少し考えてそう投げかけた。

「・・・湖・・・？」

「湖といえば・・・ここか？」

再び、みな視線が地図に落ちる。

スミレの墓標から、少し行った場所にある、小さな湖。

ガーデンが指指すそこは・・・。

「・・・！！そこは、うちの所有地だ・・・！」

ツバキが、ハッとそうつぶやいた。

みんなの視線が、合わさる。

「行って、みましよう・・・！」

ソウは、ペンダントを握り締めながら、強い瞳でそう言った。

く 続 く

第28話 傷跡・9（後書き）

ようやく・・・ようやくここまでこぎつけた・・・！！次できっと最終話です！！長かったなあ・・・ってまだ終わってねーよ。次話では、某キャラが恋愛感を熱く語る予定（何だそれは）

<小夜さん、メッセーじありがとうございます。ありがとうございました。あて先がなかったのこんな場所から失礼致します。これからモアリスをよろしく
お願い致します！！カメのような更新ですが・・・！！

第29話 傷跡・10（前書き）

この回は、とっても気合いを入れて臨みました・・・！内容はちょっとグテグテなんじゃあ・・・と思う部分もありますが・・・！！気合い入れないと、あの子に押されてしまう・・・！！と、いうわけで、本編へどうぞ！！

第29話 傷跡・10

恋って何？

愛って何？

そんなの、聞くだけ無駄だし、考えるだけ無駄。
本能で感じたままに、動けばいい。

それが、運命なのだから。

「もう俺は、この世界で何見ても驚かねえ．．．!!」

「ぶっ．．．くくく．．．」

「俺．．．常識って何か、わかんなくなってきたなあ．．．」

こんだけシリアスに進んでいる流れにそぐわぬ会話の主は。

アリス・リアン・祐馬。

なぜ、こんな会話になったのかというと。

「じゃあ、各自馬車に乗って湖まで行こう」

そういつて、乗ることになった馬車は．．．。

「かぼちゃ．．．．．!!!?」

の、馬車だったのです。もちろん、運転(?)はトランプ兵。

つか、動力は何ですか？何だか車輪の下から聞こえてくるこの
うめき声みたいのは何ですか?? いやいや、恐ろしいことにはフタ
をしときましょう。

で、何だか。かぼちゃの馬車を見て、どつと疲れてしまった裕馬
とアリスだったわけで。その反応が、あまりにも想像通りで、バカ
受け、なりアンさん。

そんな中、珍しく。

静かにソウは裕馬の横に収まっていた。

「ソウ？大丈夫？さっきから難しい顔してるけど。ブラックたちならきつと・・・」

そんなソウに、アリスが声をかけると。

「・・・僕は、怒ってるんです」

静かに、ソウは言った。

「ソ、ソウ・・・？」

その瞳には、確かに。怒りがにじんでいた。

ほどなくして、一行はスマレの墓標の近くにある湖に到着した。

その周りを、全員が手分けして2人を探す。

その湖を見て、ソウは、ああ、ここだ、とつぶやいた。

手中に握られる、ペンダント。それを、再び強く握り、ブラックとホワイトを探しに行くのだった。

「ブラックー！ホワイトー！！」

静寂を破る、人の声。

声。

静寂を破る、音。

音。

ああ、世界は遠くて。うまくその音すら聞き取れない。

ああ。

ああ。

ぼくらのせかいは、ようやくおわる。

いろも、ひかりもない。

きぼうもない、このせかい。

「・・・！！ブラック・・・！！ホワイト・・・！！！！」

ああ、誰かの声がする。

声が、する。

お願いだから、そんなに強く抱きしめないで。
脆くて、脆くて、脆くて。

形がなくなってしまうよ。

ああ、ああ。

この、頬を伝う、熱いものは、何？

ねえ、

もう、ねむらせて・・・。

眼前に、光が広がる。

「・・・」

瞬きを、何度かする。

体がだるい。そのだるさが、自分がまだ現世にいるのだと、痛感させる。

「・・・！ブラック！！目が覚めた・・・！？」

自分を覗き込む、アリスの顔。

ねえ、何でそんなに心配そうな顔をしているの？

「ブラック・・・！！」

続いて、自分を見る、見慣れた、サクラの顔。いつも無表情のその顔が、苦渋に歪んで。その後。泣くように、強く、抱きしめられた。

「ホワイト・・・！目を覚めたのか・・・！！」

ふと、横を向くと。鏡に映したように。自分の半身も、強くかき抱かれていた。

「2人とも、もう少し発見が遅かったら・・・死んでいたかもしれなかったんです・・・！！間に合って・・・本当によかった・・・！！」

自分を抱く、その横からマスターが涙を流しながら、言った。
自分たちを見つめる、多くの瞳。

「なんで、たすけたん？」

ぼつり、とこぼす。

「もう、どうでもよかったんに・・・。色も光もない、この世界にある理由は、もうないのに・・・」

世界は、終わった。

表情なくつぶやくブラックとホワイトに、誰もが困惑の表情を浮

かべる。

大きな、大きな、心の傷。

その深さを、目の当たりにする。

痛いほどの、悲痛な、叫びが。

部屋の中に広がる。

つかつかつか。

ビシヤ。

「ちよつとは、頭、冷やしたらどうですか？」

ぽた、ぽた……。

「ソ……ソウ……!!!？」

その悲痛な空間を引き裂くように。

ソウは、2人の顔に思い切り水をひっかけると、持っていたコップを、サイドテーブルの上に音を立てて置いた。

「こんだけたくさんの人に迷惑かけて、心配かけて。それでもまだ駄々こねるんですか？ガキじゃないんだから、いつまでも叶わなかった初恋引きずるのはやめたらどうです？」

「ソ……ソウくん、ちよつと、も、そこらへんにイ……」

さすがにリアンも、ソウのキレっぷりにマズイと思ったのか、口を挟む。

そして。

「ちよつと、黙っててください」

一蹴、されました。

「は……ハイ……」

「だいたい、あんたたちも！傷を見ないフリして愛語って何になるんです。だからこのお二人がいつまでもバカみたいに死んだ人間の幻影を引きずらないといけないんでしょ？」

そう言つて、今度はサクラとツバキにダメだし。

「いつまでも傷物に触るみたいに接しないで！！乗り越えさせるためなら傷口だつて抉ればいいんですよ！！」

「・・・！そんなこと、できるわけないだろう・・・！」

サクラが、さすがに言い返す。

「傷口を抉つて、みんなに見てもらえばいいでしょう？そうしたら」

「みんな、その傷の痛みに気付くんだから」

誰も気付かなかった。

誰も知らなかった。

2人の、大きな、大きな傷。

その傷は、体の奥深くを、確実に蝕み、侵食し。
こうなるまで、その深さに。

その深刻さに、誰も気付かなかった。

「だいたい・・・！いつまでも居もしない人間のこと引きずるのはやめてください。不毛です」

ずっぱり、ばっさり。

「・・・さつきから黙って聞いてれば何やの？ソウに何がわかるん？」

涙が、頬を伝う。

胸が、熱くなる。

大きな声で、ソウを睨みつけながら。

「わいらにとって、スミレがすべてやったんや・・・!!」

「だった？今だってすべてじゃないですか」

「そうや！スミレがすべてなんよ・・・！その何がアカンのや・・・!!」

「現実を見ろって言うてるんですよ！！どれだけスミレさんを想っても、スミレさんは生き返らないし」

やめて。

やめて。

そんなこと、いわんというて。

「スミレさんに、他の人を愛した事実は変わらないんですから」

ああ。

げんじつを、つきつけないで。

「ソウ・・・！いくらなんでも・・・!!」

さすがに、見かねて裕馬が止めに入ろうとする。

「僕は、裕馬さんを心から愛しています」

は い ？

ソウは、突然、裕馬を振り返り、そう言った。
いつもとは違う、真剣な、真剣な表情。

「だから、裕馬さんを自分に振り向かせるためなら、どんな努力だってします。だって、僕だけを見て、僕だけを愛して欲しいから」
ソウは、その時だけ、ふっと、優しく笑んだ。

「無償に愛されることが続くんなんて、僕は思わない。恋愛は、与えるものじゃないでしょう？ 相手がいて、その相手とするものなんだから」

ちくり、と、その言葉が。

裕馬とアリスの心にも、小さなトゲとなって刺さる。

「ブラックさんとホワイトさんは、本当にスミレさんと“恋愛”をしていたんですか？ 気持ちだけが後から後から、大きくなっているだけじゃないですか？」

婚約、というその言葉が、いつまでも、どこまでも、錯覚を、引き起こす。

まるで。

そこには、愛があつたかのように。

冷たい、ソウの視線が突き刺さる。

愛があつたか？

そんなこと。

あつたに決まっている。

それが稚拙と言われようと。

勘違いだと言われようと。

あの時、あの瞬間。

スミレを愛していた。

その想いに、変わりはない。

「・・・わいらは、本当に、本当に・・・！スマレを愛しとった・・・！！」

「その想いは、嘘やない・・・！！」

とめどなく、とめどなく、その頬に、涙が伝う。

想いまで、否定しないで。

心まで、否定しないで。

痛いほどの、2人の叫びが。

その場に居る全員に伝わる。

「・・・だったら、それでいいじゃないですか」

ソウの口調が、突然柔らかくなる。

「お二人は、スマレさんを本気で愛していた。だけど、スマレさんは、他に愛する人を見つけてしまった。お二人は、失恋したんです。ただ、それだけです」

笑顔で、さらりと。

「で、まだその失恋相手のことが吹っ切れてないから、サクラさんとツバキさんの求婚には応えかねる、と。そういうわけですよね？」

「・・・え？や、う、うん・・・？」

何だか、虚をつかれ。ブラックとホワイトは、ぐじゃぐじゃの顔のまま、半ば放心。

「実際、お二人は、スマレさんから別れの言葉をきちんと聞けなかったから、強くわだかまりが残ってしまったんですよ。・・・お二人が傷つかないように、と思った行動が、逆に、ブラックさんたちがスマレさんをふっきる機会をなくしてしまっていたんです。」

ソウは、言いながら、ポケットからペンダントを取り出した。

「それ・・・！！」

アリスがああ時の！と声を出す。

「スマレの・・・」

スマレがいつもつけていた、ペンダント。
形見に、譲り受けたもの。

ソウは、静かにそのペンダントのフタを開ける。
ざっと、スマレの立体映像が現れる。

「ブラックさん、ホワイトさん、このペンダントに仕掛けがあるのを知っていましたか？」

「・・・し、かけ？」

初めて聞いた、とブラックとホワイトは顔を見合わせる。サクラとツバキも顔を見合わせていることから、きっとこの2人も知らなかったのだろう。

「スマレさんは、きちんと、恋の決着をつけていたんですよ。お二人が、次の恋へ進めるように」

ソウは、そう言うのと、カチリ、と中蓋を開け、中の歯車の一箇所を押した。

ざあっという音とともに、映像が変わる。

そこは、さきほどの湖だった。その湖畔を背に、スマレがいつもの優しい笑みで佇む。

ただ、その笑みは。

どこか、寂しそうな、悲しそうな、表情をしていた。

『親愛なる、ブラック、ホワイト』

その立体映像の中のスマレが、言葉を紡いでいく。

「・・・!こういうものがあるとは聞いていたが・・・」

どうやら、ここにいる他のメンツも、見るのは初めてのようだった。

『この映像を君たちが見る時は、僕はもう、この世にはいないかもしれないね。』

僕は、ちゃんと君たちにお別れが言えたかな？

もし、何らかの理由で伝えられなかった時のために、これを残します。

ブラック、ホワイト。僕は、本当に君たちのことが好きだったし、愛していたよ

ただ、それは・・・恋愛感情ではなかったんだ・・・。
ただただ、無邪気な君たちが、弟のように可愛くて。

好きな人が、できたんだ。

愛する人が、できたんだ・・・。

君たちに対する感情とは、まったく違う感情で、僕はその人に惹かれた。

僕は、その人のことを、愛してしまったんだ

だから、ごめんね。

もう、ブラックとホワイトの、婚約者ではいられない。

と言っても、まだ僕の片思いなんだけだね・・・

君たちとの関係をきちんと終わらせてから、想いを伝えにいく
と思うんだ』

柔らかい、微笑。

本当に、その映像からでもわかる、相手への深い・深い、愛情。

『ひどいことをして、ごめんね。

それでも、自分のこの想いは、変えれないんだ・・・。

都合のいいことを、と思うかもしれないけれど・・・。
これだけは、信じていて。

ブラックとホワイトに何かあったら、僕はこの身を投げてでも、

助けにいくから。

僕にとって、2人は大切な、大切な存在なんだ。

恋愛は、できなかったけど。

勝手なことばかり言っでごめんね。

これからの、君たちの人生が、幸多きものでありますように・・・

□

そこで、映像は止まった。

ブラックとホワイトは、映像を数分間、見つめ続けた後、堰をきったように、大声で泣き始めた。

ああ、どうか。

カミサマ。

僕の愛したあの、愛くるしい子達の、未来が、明るく幸せでありますように。

ああ、どうぞ。

カミサマ。

あの子達を、本当に愛してくれる人が、現れますように。

傲慢かもしれないけれど。

僕が言える義理ではないかもしれないけれど。

どうか。
どうか。

あの子達が、いつも笑顔でいれますように。

どうか。

どうか。

カミサマ。

く
続
く

第29話 傷跡・10（後書き）

やっと！やっと！！ここまでたどり着きました〜！！ほぼ、このお話も完結ですね！キーマンはソウくんでした。熱く語るソウを動かすのがおもしろくておもしろくて・・・！！いや〜、次への伏線もきっちり張ってくれるところがソウくんらしいですね！失恋や人の死を乗り越えるって、本当、時間もかかるし、大変なことなんだと思います。でも、乗り越えるには、やっぱりキツカケが必要だと思っのですよ。決るくらいにガッーンとね。ここまで引きずってしまっちゃったら。と、勝手に思ってみたり（汗）ちよつと一部、表現を曖昧なものにさせていただきましたが、あしからず。

第30話 傷跡・11（前書き）

気付けば30話・・・（実質31）！！？ええ！！？もうそんなになるの！？な、長いなあ・・・。ドキドキ。ま、まだ続けても大丈夫なんですかね？これ・・・。そんな一抹の不安に駆られながら。傷跡、最終話でございます！！

第30話 傷跡・11

「・・・しばらくぶりの、殺意だ・・・」

クイーンは、うんざりしたように言った。

眼前には。

「あゝゝ！アリス！そのゴマ団子、わいが食べようと思ったのにー！」

「え？もうたべひゃつひゃ」

「い・ま、まさに食いよったゝゝゝ・・・！！！」

「落ち着いてください。2人とも。こっちにもありますから」
「ぱく」

「！！？あああああゝゝゝ！！！」

「ソウゝゝゝゝ！！！！？」

和やか、を通り越して。

うるさい食卓。

よく晴れた、ランチタイム。

まるで、昨日の出来事が嘘のように、温かい、温かい時間が流れる。

つか。

「何で、マスターが取ってくれたんをお前が食べるんじゃゝゝゝ！！」
「！」

「わいの・・・！わいのゴマ団子~~~~！！」

温かいつーか、ウザイ。

そんな双子に。

今回、大・活躍な、恋愛のペテンsh・嘘です。すっかり口が滑りました。偉大な恋愛の教祖、ソウ様は。

「・・・僕が食べちゃ、いけないって言うんですか？」

これでもかってほどの笑顔でのたもつた。

「ど、どどどぞオ・・・」

「た、たくさん食べたってえ・・・」

そんな、やりとりに。

周りの人間は、知らず、笑みを浮かべるのだった。

誰も知らなかった、双子の心の傷。

ずっと、ずっと抱えていた、叶わぬ想い。

秘めて、秘めて。

崩れ落ちそうになるまで。

その二人に、今また、笑顔が戻っている。

何だか、この笑顔を見るのは本当に久しぶりのような気がする。くるくると、変わる表情が。

・・・口さえ開かなければ愛くるしい。

傷ついて。

傷ついて。

傷つけて。

傷つけられて。

ようやく、大声で泣くことができた。

ようやく、想いを口にすることができた。

ようやく。

前を向くことができた。

ようやく。

あなたのことを。

笑顔で思い出せるようになった。

それは、本当に奇跡のような出来事で・・・。

「今回は、本当にご迷惑をおかけしました」

「ありがとうございました」

楽しくも、にぎやかな昼食会も終わり。

ツバキとサクラ、ブラックとホワイトはクイーン邸を後にすることにした。今から、スミレのお墓参りにいくという。

今まで、行くことのできなかつた、スミレの墓標に。花を手向け

に。

クイーン、バニー、ガーデン、祐馬を前に、ツバキとサクラは深々と頭を下げ、挨拶をしている。

「で？これからどうすんの？」

その斜め後方で。ブラックとホワイトに、リアンが問いかける。どうする、とは、きっと婚約のことだろう。

「そやなあ。今ところは、何も考えてへんわ」

「ん。吹っ切れたばかりやからなあ」

問われて、二人は、苦笑しながら答える。

今までとは、どこか違う、二人の笑顔。わだかまりのなくなった、いい表情をしている。

「何がきっかけかわかれへんし？」

「はは、とブラックが笑う。」

「そうですよ」

マスターも、嬉しそうに笑顔で返す。

「まだまだ、これからですよ！目指せ！いい恋！！ですからね！！」

前回到引き続き、熱く語るは、ソウくん。

そこに、笑い声が広がる。

ああ。

ああ。

何て、幸せなんだろうか。

「じゃあ、二人とも気をつけてね！」

アリスも笑顔で見送る。

「まだ無理しちゃいけませんよ！」

マスターは少し心配顔で。

「ソウさん」

マスターとアリスが双子と話している横のソウに、ツバキとサクラがそつと近寄る。

「はい？」

相変わらず、無表情なその顔。

しかし、どこか雰囲気が柔らかくなったように思う。

「・・・ありがとう、ございました」

深々と、頭を下げる。

「・・・どう、いたしまして」

一通りの挨拶をすまし、4人は屋敷を去っていった。

長い、長い時間がようやく終わる。

それぞれのカップルも、クイーン邸をあとにするのだった。

「あの4人、どうなるのかなぁ・・・」

「どうかな」

アリスとバニーは、気持ちのいい風を感じながら帰路についていた。

前を向いて、ゆっくりと歩く。

「・・・愛とか、恋とかって・・・難しいね」

アリスは、小さく言った。

自分は、何も考えていなかった。

ソウみたいになんて、なかった。

ただ、与えられているだけだった。

「・・・アリスは、そのままいいんだよ」

歩を止めて、バニーは、アリスを見据えてそう言った。

「・・・え？」

「僕はアリスから、十分、愛をもらってるから」

優しい、笑顔。

ふふつと、子供のようになんて笑む。

「・・・お、俺も・・・バニーから・・・じゅ、ぶん、もらってる・・・から」

バニーのその笑顔に。アリスは真っ赤になって答える。

語尾が、震える。

涙が、こぼれた。

「・・・あ？れ・・・？」

涙が、ポロポロと頬を伝う。

「ど、してかな・・・？え？え？」

涙をぬぐいながら、アリスは自分の涙の意味が分からず、困惑する。

「アリス」

そのアリスを、バニーが優しく抱きしめる。

「・・・！」

「アリス」

優しい声が、耳から、全身を駆け巡る。

ああ。

ああ。

「・・・バンナ・・・」

しっかりと、その背にしがみつく。

愛おしい人が、手の中にいるといいことが。
こんなにも、こんなにも・・・。

「俺って・・・幸せ者だったんだ・・・」

幸せなのだ。

「・・・！」

そのアリスの笑顔に。

「・・・僕もだよ」

バンナは、アリスの唇にキスを落とした。

2人は、しばらく静かに時を過ごして。

再び、歩き始めた。自分たちの、屋敷に向かって。その手は、か
たく、かたくつながれていた。

く 傷跡・完 く

第30話 傷跡・11（後書き）

長かった双子話がようやく終わった~~~~!! 終わった今でも、ブラックの相手がどっちで、ホワイトの相手がどっちだったかをきちんと把握していない最低物書きもえにございます。今回はちよつとラブい雰囲気です。アリスたちの進展も図りたいし、ちよつと、今回いい男? っぷりを発揮したソウくんとの話も進めていかないとです。ね。いっそのこと、ダブルデートでもしやがれ!!（投げやり）あ、もう一つお知らせを。たい~~~~へん、遅くなりましたが、番外編の続きをアップしましたので、首をなが~~~~くして、文句も言わずに待っていてくださいました方々、どうぞ、みてやってください!! 評価やメッセージも、またお願いいたします!! では。次はどんなアリスワールドを展開しようかな~

第31話 秘密の花園・1（前書き）

ようやく！戻ってきました！！アリス&祐馬コンビ！！・・・で、あれ？何か違うつて？とりあえず。電波的な初回です（笑）

第31話 秘密の花園・1

「じゃ、気をつけて行っておいでよ」

にこやかな、リアンの見送りを後に。

その可愛らしくもファンシーな。

秘密の花園？的な扉を開いて、一歩踏み入ったそこは。

ジャングルでした。

完。

「つて！！危うく話終わしかけたつの・・・！！！」

「おおーい！！久しぶりに初っ端から出張ってんだぜ！？こんなところで終われるか・・・！！」

そう、たとえ。

電波少年的扱いを受けたとしても。

そう。

今回のお話の主人公は。

最近とんと脇役に押され、影の薄くなっていた。

この話の主人公、アリスくんと。

その御学友、もとい悪友の祐馬くん。

さてさて。そろそろ、主人公とその悪友というポジションを読者様に思い出してもらわねば・・・！と意気込んでの御登場が、これ。この小説の作者の質が知れるって話ですね。

まあ、そんな話は置いておいて。
時間をちよつと、遡つて。

「「あいさつ？」」

「そ！あいさつ！」

この日、朝早くリアンに呼び出された2人が訪れたのはガーデンの管理する庭の、最奥にある高い塀に囲まれた花園の入り口だった。ここは普段、扉に施錠がしてあり勝手に入ることはできない仕組みになっている。アリスと祐馬も、ここにだけは勝手に入るなど、ガーデンから強く言われていた。

その、花園に。

リアンは今から入れと言う。

しかも、だ。

あいさつをして来い、と言った。

「あいさつって、誰に？」

当然のごとくの質問を、アリスはリアンにした。

「行ったらわかるよ。ここには彼女たちしかないから」
にこにこ。

リアンはいつもの飄々とした体である。

質問を無視して、さつさと自分の作業を進める。

かちやりと、扉の開く音。

「彼女たちって・・・？」

「ここって、男しかいないんじゃないんすか？」

そんな、少年たちの素朴な疑問も、リアンさんのマイペースという言葉の前には塵を通り越して、ゴミさ！！

「いいから 行つてこゝい！！」

どん。

がちゃん。

扉から中へ突き入れて。

再び、施錠。

こうして。行き先も。

目的も。

すべてが曖昧なまま。

花園とは名ばかりの。

ここって、花園じゃなくて密林つすよね？ 的な場所へと、投げ出されたのであった・・・。

「・・・ちょ・・・!?!?」

「リアンさん~~~~・・・!!?!?」

たまの登場で、この仕打ちかい~~~~!!と、2人は厚い扉の向こうに向かって。

若さで叫ぶのであった。

「あらあら、おしろい。客人が入ってきたようね」

「まあまあ、本当ですわね。べにおお姉様」

「今回の依頼人は誰だったかねえ？」

「リアンだったと思いますわ」

「リアン？ あそこの子は数年前に授けたばかりじゃなかったかしら？」

「何でも、もう成人して婚約者を迎えた、とか」

「あらあら、もうかい？さすが、外来種が入ると違うねえ。じゃあ、今回はその婚約者が来るのかい？」

「みたいですわ」

「じゃあ、もう1人の子は？」

「さあ・・・？リアンからの手紙には何も書かれていなかったけれど・・・。あら、お姉様。リアンからの封筒の中に、もう1枚。封筒が入っていましたよ」

「おやおや、おしろいは相変わらずあわてんぼうだね。どれどれ、見せてごらん」

クスクスクス。

ふふふふふ。

悩ましい声が響く。

むせ返るような、甘い、香り。

「・・・すつげー・・・匂いだ・・・」

アリスと祐馬は、扉から入ってもう30分くらい道なき道を歩いていた。そこはまさに、手入れのされていない庭。否。やっぱ密林。という表現がぴったりくるような場所で。

生い茂る草木を掻き分け。

伸びたツルを掻き分け。

それでもなぜか。

導かれるように。

足は止まることなく。

奥へ、奥へと進んで行った。

「つーか、あいさつっていったい、誰にすんだろっな？」

祐馬は、ふと、アリスに向かって言う。

横を歩くアリスは、絡まるツタを乱暴にむしりながら。

「何のあいさつかもよくわからないよなあ」

はてなマークを飛ばしている。

「リアンさんは彼女たち、って言ってたけどな」

可愛い女の子か？はたまた魅惑のお姉様系か？

にやけながら期待する祐馬に。

アリスは。

「大丈夫だ、祐馬、これだけは言える」

今度は進路を遮る樹木をなぎ倒しながら。

「リアンの発言だけはあてにならない。きっと、かぼちゃ級の驚きが待ってる」

真剣な目をして。

人の儚い夢を打ち砕かないでください。

つーか。

まだ根に持ってたのか。かぼちゃ。

「あらー、人をかぼちゃ呼ばわりするなんてひどいぼっやなこと」

「馬車と同レベルで語らないでほしいですわ」

頭上から、女の声がした。

そう思って、大木を振り返り。

アリスと祐馬が目にしたのは。

「「……………！！！！！！？」」

たしかに。

かぼちゃ級の驚きだったかもしれない。

いや、2・8倍くらい驚き増しだったかな・・・。

「私はべにお」

厚い唇に、けだるそうな瞳。ゆるくウェーブのかかった肩までの髪。ふくよかな胸。その唇には、キセルのようなモノが銜えられている。

「私はおしろい」

同じく厚い唇にぱちりの二重。こちらは黒のロングでストレートの髪が、何とも愛らしい。そして、こちらも。ふくよかな、胸。

で、何が問題かと言いますと。

べにおは赤の。

おしろいは白の。

それぞれ、椿のような花の花弁から。上半身を覗かせていたのだった。

そう、彼女たち、は。

「私たちは、この花園の番人よ」「

上半身が人で、下半身が花、という何とも奇怪な生き物であったのだ。

「「ようこそ。ぼつやたち」

アリスと祐馬は。

無性に帰りたくなったのだった・・・。

）続（

第31話 秘密の花園・1（後書き）

前作がシリアスだったから、無茶苦茶この話書くの楽しかったです！！んも、馬鹿なノリ最高ですよね！！って誰に同意求めてんだ。私は。もっとアリスと祐馬の悪友&親友的な会話も出したいですしね。ちょっと楽しみなこのシリーズ。そういえば、評価への返信機能がありましたので、今更ではありますが。アリスへの評価へ返信させていただいてます（笑）よろしかったら更に返信を。エンドレスで返信しあいましょう（笑）も一つ。アリスの番外編、クイーン×リアンをノクターン（ムーンライト）で書かせていただいておりますが、無事完結いたしましたので。そんな性描写のキツイものではないとは思いますが、18歳以上の方で、サイト内容が大丈夫だという方はそちらも読んでみてくださいね。短編ことになっております！ではでは、続きをお楽しみに！！

第32話 秘密の花園・2（前書き）

書いていくうちに、そのキャラの内面を改めて知ることがよくあります。あらかじめこうしよう！と考えているわけじゃなくて（それもどうだ）流れのままにというか。まあ、大筋はきめてかかるのですが。リアンも、まさかあんな内面になるとは思っていませんでしたが。何か、このシリーズでも、この子たちの新たな内面を再発見しそうな予感でいっぱいです。ではでは、遅くなりました。新シリーズ第2弾へゴウ

第32話 秘密の花園・2

人生、いろいろ。

っーかね。そういうことを思いつてね、もう少し歳いつてからで
もいいと思うわけよ。

こっちはさ、若い身空なわけよ？えっと、公式設定いくつだっけ
？俺ら。

15か16あたりじゃねえ？

そんなさ、わっかい俺らはさ。そ、あれですよ。

処理能力？つてのに限界があるわけよ。

わかる？

限界。

そりゃあさ、こんな世界じゃん？何でもありだろつて。

シンクロしたアリスに呼ばれて。

何となくノリでこっちに残ったのは俺ですけどね？

その時に、まあ、それもまた、運命じゃん。とか軽く思ったわけ
よ。

どーにかなるじゃん？つてーか。なるようにしかないっつー
か。

でもさ。

結局のとこ。

覚悟がさ、違っただって。

俺は、この世界に残ったことを。

少し、後悔し始めてるのかもしれない。

「で？名前は何て言うんだい？」

麗らかなお日様の元。

ジャングルの中で。

正座で、よくわからない生き物を前にして半分放心状態です。ハイ。

「さ、佐久間アリスです・・・」

とりあえず。

質問にのみ答えるくらいしか。

脳の処理能力がおつつきません。

「瀬戸、祐馬っす」

どうやら隣の悪友も右に同じくな様子だ。

「フー・・・」

名前を聞き終わると、べにおは口から煙を吐き出す。

むせ返るような、甘い花の香り。

何だか、匂いに悪酔いしそうで。

「30点」

どーん。

「・・・え？」

ゆづに10秒くらい置いて。アリスはようやくそれだけ発した。

「まったく、つまらない子たちだねえ。リアンなんて私たちを見た瞬間にやあ、綺麗なお姉様方なこと。来たかいがあったねえ。何て言っただけなんだよ？それくらいの順応力がないとねえ」

それは、あの方だから言える（できる）ことでございます。

かの人を思い、アリスと祐馬は心の中で大きくハモツた。

「だいたい、貴方たち、ここに何をしに来たかわかっているの？」
その綺麗な顔を嘲笑に歪め、おしろいが問う。

「いや、まったく」

「・・・そんなところでハモンなくていいんだよ」
呆れたようにべにおが言う。

「やゝだ。これだから外来種は」

小ばかにしたようなおしろいの笑い声が、耳をつく。

ああ。

さつきから。

どうも気分が悪い。

「ここはこの世界の中心」

「私たちはこの世界の創造の源」

「私たちはすべての母」

「私たちはすべての愛の根源」

ぐらぐら、する。

「ど、いうことっすか？」

ああ、ちつとも頭が働かない。

「私たちはね、両性具有なんだよ。この世界で唯一のね。すべての生命は私たちの作る種から生まれるんだよ」

だから、男しくないこの世界でも子供ができる。

「その代わり、代償に愛をもらうの。私たちは」

「子を授けるかどうかを決めるのも、その愛が本物かどうか判断するの、私たちの仕事なんだよ」

くすくすくす

うふふふふ

「私たちのおめがねに叶わなきゃ、この世界じゃ子供は生めないのさ」

「愛を語る資格すら、ないわよ」

何だか。

ちよう厄介な物と遭遇してしまった感バリバリなんですけど。

「さあ、ぼつやたちの愛を見せてもらおうかね？」

その言葉を合図に。

辺りにぶわっと花粉が舞う。

「・・・！？うつわ・・・！！」

「わぁ・・・！！」

嗅覚が麻痺するくらいの、甘ったるい香り。

視覚を遮る、花粉の粒子のオーロラ。

遠くで、べにおとおしりの笑う声が響く。

2人の意識は、そこで途切れた。

「・・・どう思います？べにおお姉様」

おしろいは楽しそうにべにおを見上げる。

「そうさねえ。何にしても久しぶりのお客だ。楽しませてもらおう
じゃないの」

くすくすくす

うふふふふふ

ああ。

何て世界だよ。本当。

かぼちゃ、花人間ときて今度は花粉による襲撃か。
まったく、どこまでも人の常識を覆しやがる。

あいつもそつだ。

あいつも、俺の常識を打ち破ってくれる。

ソウ。

お前は俺を愛していると言っけれど。

俺は、どつやら。

お前のことが、嫌いみたいなんだ。

うふふふ

くす

くすくす

く
続
く

第32話 秘密の花園・2（後書き）

いやだわ……。この後、どう収集をつけろというの（聞くな）気になる所で終わりましたね！先にスポットが当たったのは祐馬くんでした〜！！アリスは……。！？という突っ込みには平に謝らせていただきます。何かね、ソウと祐馬の続きが気になる、という意見をいくつかいただいたので（言い訳）。意見と言えば。リアンさんが人気です（笑）あのしゃべり方がいいらしいです。ファンクラブに入ってくれている方もいますしね ャんちさん（笑）きちんと会員登録済み（笑）では、今後のソウと祐馬の展開に御期待を！

第33話 秘密の花園・3（前書き）

ああ・・・。書いても書いてもしっくりこず、ようやく続きが書けました。この2人、何気に難しい・・・！この2人の恋の行方はどうなるわけ！？（お前がそんなにどうする）

第33話 秘密の花園・3

愛していると、君は言う。

最初の恋人は、中学校時代の同級生。
ちよっとおませなその子とは、キスマでした。

初めてのお相手は、塾の講師の女の先生。
しばらく、関係は続いたけれど、高校進学と同時に、バイバイに
なった。

高校に入ってから、何人かと付き合った。

することはとくにすませたし。

女に不自由を感じたこともない。

でも、恋愛はめんどつくさい。
本当に、そう思う。

構わないとスネるし、好きと言わないとゴネるし。
電話やメールもはつきり言っでめんどくさい。
もちろん、付き合い始めたら、義務的に欠かしたことはないけれど。

「祐馬さん、好きです」

アイツも、他の女たちみたいに、そう言う。

俺は、苦笑する。

「祐馬さん、愛してます」

俺は、男だぜ？

何で、惚れられる？

しかも。

自分よりもタツパもあって、がっちりしたような男。
俺には、信じられないね。

「祐馬さん」

まわりついてくるその腕は。

女みたいに細くて。

全開の笑顔は、女みたいに愛らしくて。

でも。

最近、頭の片隅に、冷静な自分がいて。

そいつが。

言っんだ。

反吐がでそうだって。

「祐馬さん」

「か、わいらしく笑いながら……!!」

「人を襲うな……!!!!」

ソファでうとうとしていたら。

いつの間にか、眼前にソウくんのお顔。
つーか、人の腰に乗るな……!!

「やだ、祐馬さんってば可愛い」

ちゅっちゅっと、ソウは祐馬の顔にキスを落とす。

「ぎゃ……!! やめる……! ソウ……!!」

いつもの、じゃれ合い。

祐馬が嫌がると、ソウはいつも、えゝ、と言いながら身を引いた。

だが、今日は違った。

ソウは、おかまいなしに祐馬のシャツの裾から手を入れてきた。

「!?!?……やめる……!!」

祐馬は、びくりとして、ソウを引き離す。

その、ソウの表情は。

「……ソウ……?」

「・・・貴方は、ヒドイ人ですね」

「・・・」

「貴方は、アリスさんを恋愛感情でみてはいないけれど・・・」

当たり前だ。

ガキの頃から知ってる相手に。

しかも男に、恋愛感情もクソもあるか。

「僕にも、恋愛感情はないでしょう？」

それは、禁句。

きっと、ソウの中で禁句だったに違いない。

愛していると、君は言う。

好きだと、君は言う。

だけど。

祐馬はそれに応えたことはない。
いつだって。

決まりのように、ソウがその言葉を言って。
祐馬が流してきた。

気付いてはいけない。
口にははいけない。

だってその瞬間。

この関係は終わるから。

祐馬は、何も応えられなかった。

「・・・祐馬さんは、戻れなくなって、こちらに残っただけですもんね」

ソウが、その一言を口にした。

その時。

世界の終わる、音がした。

「そつえば、ソウは？」

ここは、アリスとバニーの屋敷。

いいお天気の中。バニーとリアンが、テラスでコーヒーを飲んでいる。

どこか、バニーは落ち着かない様子だ。

リアンはというと、2人を花園に押し入れた後、息子であるバニーの元へ来ていたのだった。2人を花園へ連れて行くことは、数日前に言っている。

もちろん、ソウにも。花園へ案内した後は、バニーの屋敷で、帰りを待つ予定になっていたのだが。

「・・・それがねえ。昨日、うちに来て1度実家に帰ってくるって

言っただけだよ……」

クッキーを頬張りながら、リアン。

「何だか、ちょっと様子がおかしかったんだよねえ……」

「……ソウが？」

「祐馬くんと何かあったのかね？」

「……ケンカとかってことか？」

その台詞に、リアンは噴出す。

「あはは。そりゃないでしょー！」

「何だよ……」

その反応に、ムスッとバニーが返す。

「あの2人は、ケンカするような関係ではないからだよ」

リアンはそう言うと、コーヒーのおかわりを注ぐ。

「……はあ？」

バニーは、眉根を寄せ、理解できないと言ったふうだ。

「だってあの2人は、始まってもないじゃないかい」

リアンは、楽しそうに微笑を浮かべ、そう言った。

嵐の、予感。

く 続 く

第33話 秘密の花園・3（後書き）

リアン投入にてどうにか収集をつけてみたけど、あまり収集がついていない気もする。つーか、どこまでも暗くなりそうな予感がするのは私だけ・・・!?あれ!?あれ!?一番、何かノリにノッてそんなカツプルだったのに!?あれ?まあ、そんなこともあるか・・・。しかし、何だかんだで時間が空いてしまつて申し訳ないです。更新を早くするという今年の目標が早くも崩れそうです（オイ）。最近、おススメ小説の所に、名前があがっているのを見つけたのですが・・・BLですけど大丈夫なんですか?!!とパソの前で突っ込んでいる小心者は私です。でも、これも皆様の暖かい応援のおかげですね・・・!!ありがとうございます!これからも頑張ります!（いつも言つてんな・・・）

第34話 秘密の花園・4（前書き）

少し間があいてしまつて申し訳ないです・・・！学習能力欠如して
いると思えん・・・（笑えない）！ではでは、続きへどうぞ・
・！！

第34話 秘密の花園・4

俺は、ソウのことが嫌いだ。

男だから？

それもあるかもしれない。

だって、ありえないだろ？

そんなことが、他人じゃなくて、自分の身に起こるなんて。

なぜ？ここではそれが自然の摂理なのに？

自分の常識や観念にあわないから？

それじゃあ、あの子の気持ちはどうなるんだい？

お前は。

なぜここに残ったんだい？

・・・。

もう、戻れなかったから・・・。

・・・お前は、ここにいる資格はないようだね。
お帰り。

私たちの可愛い子供を。

アンタにはやれないよ。

戻りたいのなら、私が戻してやるよ。

「・・・は？」

ぱつと、目を開く。

花粉で麻痺していた五感が、働きを取り戻す。

そして。

「祐馬〜！」

ここは。

「・・・は、はは？」

「遅刻するわよ！さっさと起きなさい！」

聞き覚えのある、声。

見覚えのある、風景。

そこは。

自分が育ってきた。

「・・・マジで・・・？」

家だった。

久しぶりに学校へ行つた。
みんな変わらなかつた。

普通に、時が過ぎる。

変わらない、時が過ぎる。

あれは、夢？

ここにある感触は本物で。
ああ。やっと。

常識が、戻ってきた。

ただ一つ違うことは。

あの悪友の姿が。

ここにはないことだった。

俺はどうやら本当に。

この世界に戻ってきたらしい。

く 続 く

第34話 秘密の花園・4（後書き）

今回、短めです。ちょっとキリのいいところで。つーか、帰ってきてしまった祐馬くん。つーか、追い出された？

第35話 秘密の花園・5（前書き）

離れ離れになってしまったソウと祐馬。お互いに何を思うのか・・・
とか、シリアス調に前書き書いてみたりして（そして、この時点でブチ壊し）

第35話 秘密の花園・5

「祐馬、女の子が呼んでる！」

「お」

「また祐馬かよ・・・!？」

「瀬戸モテすぎ・・・!!」

「おい、ソイツは悪い奴だぞ！」

「お前ら、うるせえよ・・・!!」

祐馬は、後ろで飛ぶ野次に苦笑しながら、校門で待つ女の子の元へ駆け寄る。

この制服は。

隣の女子高の制服か。

「忙しいところ、ゴメンね」

髪は肩までで、ちょっと茶色がかったかな。

目はぱっちりしてて、ちょっと、恥ずかしそうに俯く姿が何とも愛らしい。

「や、かまわないけど」

男子校に、一人で来るのはそうとう勇気がいったことだろう。明るい声は出しているが、肩が微かに震えている。

「あ、の。陸上の大会で、瀬戸くんをみて・・・それから、ずっと・・・瀬戸くんのが、好き、で」

「もし、よかったら、・・・付き合ってくれない？」

「・・・やっぱ、これだよな」

「え？」

「あ、いやいや。いいよ。俺、今フリーだし？可愛い彼女が欲しかったんだ」

嬉しさに泣き出す女の子。

そうだよ。

俺が求めてたのは、これなんだって。

女の子との、恋愛。

だって、アイツは男じゃん？どんなに目がぱっちりして、どんなに可愛い顔で笑ったって。

だって。

だって。

だって。

覚悟なんてない。

覚悟なんて。

ないんだ。

その日、俺は。

アリスの存在の残る物を。すべて片付けた。

「ソウ、一緒にお茶でもどう？」

眩しい木漏れ日の中。

大きな木の下で、ソウはうつうつとしていた。

昔からの、お気に入り場所。

「・・・かあさま・・・」

「向こうでの生活はどうだったの？」

「楽しいですよ。みなさん良くしてくださるし」

にこにここと、アリスさんが、リアン様が、バーン様が・・・とソウは向こうでの生活を語る。

そのソウの言葉に、丁寧な相槌を返す。

ソウにかあさま、と呼ばれるその人は。

ソウにそっくりの容姿をしていた。

ソウの、こちらの世界でいう母親。

似ているが、醸し出す雰囲気はどこか優しく、そしてどこか強い
...

「…かあさま…」

ソウは、それまでの明るい声とは違った、小さな小さな声で。

「僕は…裕馬さんにとって何だったのかなあ…」

ソウは、俯いたまま。

言葉をつむぐ。

「どんなに人を好きになっても…駄目なことってあるんですね・
・」

貴方が好きです。

貴方のことが、好きです。

ねえ。

ねえ。

聞こえていますか？

届いて、いますか？

「ソウ……」

「……祐馬さんにとって、僕は……」

「何だったんだろうなあ……」

ソウの肩が微かに震える。

そして、ぼつぼつと。

固く握られた拳の上に雫が落ちる。

「祐馬くん」

「祐馬くん」

可愛い唇からつむがれる、自分の名前。
それなのに。

心はちつとも動かない。

とっても、可愛いとは思う。

女の子特有の華奢な肩。

（そういえば、アイツも華奢な方だったな）
シャンプーの香り。

（いい香りがいつもしてたのは、何の香りだったんだろう）
くりくりとおおきな目。厚い唇。さらさらな髪。

何で。

何で。

アイツが出てくるんだ。

何で。

アイツを重ねてしまっんだ。

「祐馬くん？」

「・・・あ、いや」

彼女と一緒にいるのに。

他の奴、しかも。

男のことを考えるなんて。らしくない。

「疲れてるんじゃない？」

「そうかも」

ハハ、と愛想笑いを返す。

笑顔さえ返せば。

それで丸く収まる。

「そういえば、男子校ってさあ」

「ん？」

ファミレスの一角。ドリンクバーで粘りながら。

「やっぱ、ホモとかいるの？」

なんて、タイミング。

「いやさ、よく聞くじゃん？どうなのかな、って思ってた」

「ハ、ハハ。どうだろ。俺はよく知らないけど」

こんな会話、やめてくれ。

「そうなの？友達のお兄ちゃんもそこ通ってたさあ。いるらしいって聞いたんだよね」

動悸が、する。

「ありえないよね。男同士なんて」

ガシャン。

「わ、大丈夫？」

祐馬の前のグラスが、倒れる。

女の子がナプキンで、こぼれた琥珀色の液体をふき取る。

「・・・ああ。ゴメン、ゴメン」

綺麗に整えられた、爪。

「でもさあ、だって男同士だよ？」

「人には、それぞれあるんじゃないの？」

アリスだって、そうだった。

「えー、そうかなあ。お手軽にすませたいだけじゃない？」

リアンさん達だって。マスターさん達だって。

「そうじゃない人たちも、いるかもしれないだろ」

あんなに。

お互いを。

「うーん。でもオ、祐馬くん的にはどうなの？」

「なしだと思わない？やっぱり」

彼女の瞳が。

俺を射抜く。

覚悟がないんだ。

覚悟が、足りないんだ。

「それとも」

「覚悟が、ない？」

ぐるぐると、頭が回る。

気分が悪い。

頼むから。もう。俺に構わないでくれ。

俺を、惑わさないでくれ。

ようやく。

ようやく。

俺はすべてを捨てる覚悟をしたのに。

〈 続 〉

第35話 秘密の花園・5（後書き）

ようやく半分くらいかな。ソウと祐馬の話。な、なかなか書き辛いです……。この2人……。！ラスボスが待ってた感じ。あ、や、ラスボスはまだですね……。ハイ。あ。今回、祐馬ちゃんの彼女がいろいろ言ってますね。ホントはもっと過激に言わせようと思っただのですが（笑）否定するような話が出てくるのが駄目な方もおられるようなので、このあたりで。

配慮はしたつもりですが、グサッときた方おられましたすみません……。！つか、祐馬、切り替えはや！！

第36話 秘密の花園・6（前書き）

気付けば、アリス、読者アクセス数、3000を超えました・・・
！！うわオ！びっくり！！ほ、本当にありがとございます！！こ
れからも、よしなに・・・！！

第36話 秘密の花園・6

まるで。

すべての時間が止まったように。

まるで。

世界が隔絶されたかのように。

「どう、なの？祐馬くん」

あの、香りがする。

すべてを麻痺させるような。あの、香り。

「あなたにとって、ソウくんは」

「いない存在だった？」

「わずらわしかった？」

「向こうで生きていくためだけに、必要な存在だった？」

「嫌い、だったんでしょう？」

その唇が。

痛いほどの、真実をつむぐ。

頭が、働かない。

そして。

言葉となつて、出るのは。

真実。

「・・・嫌い、だった」

「わずらわしかった・・・」

「向こうで生きていくのには・・・確かに、必要だった・・・」

愛していたわけじゃない。

好きだった、わけじゃない。

覚悟が、ないんだ。

「何でそんなに」

覚悟が、ないんだ。俺には。

「泣きそうな顔をしてるんだい？」

祐馬は、その言葉にびくりとする。

危険だ。

危険、だ。

この女は何者？

ああ。

ああ。お願いだから。

それ以上。

気付けなしてくれよ。

「好きだったんじゃないのかい？」

「・・・違う・・・」

「好きに、なりかけてたんじゃないのかい？」

「ち、がう・・・」

「じゃあ、なんで。そんなに苦しそうな顔をしてるんだい？」

「違う・・・!!」

祐馬は、バンッとテーブルを叩きつける。

「俺は、あいつのことが嫌いだった・・・!もう、それでいいだろ
う!??たのむから・・・!」

祐馬は、力なく。
ソファに寄りかかった。

「頼むから・・・これ以上、かき回さないでくれ・・・」

両の手は、視界を遮り。

その遮られた視界で、何を見る？

「覚悟が、ないいんだろう?」

それでもなお。

その女はしゃべり続ける。

「・・・!! ねえよ・・・!! あるわけないだろう!？」

その女の言葉に。

切れたように、祐馬はしゃべりだす。

「あいつは、あっちじゃ名の知れた家の子息だぞ!? 元々は、国の次期王と婚約するような地位の人間だ・・・! 俺なんかを相手にしてる場合じゃねーだろ・・・!？」

「いつまでも帰って来なきゃ、家の人間だつて心配する! しかも、俺みたいな人間と、なんて・・・! 許せるはずがないだろ・・・! !常識で考えてみるよ・・・!!」

違う。

そうじゃないんだ。

何を、言ってるんだ。

俺は。

何を。

言ってるんだ。

「それに・・・!!」

「あいつは、バニーを好きだったんじゃないか・・・」

「バニーに振られたから、俺に乗り換えたんじゃないのかよ・・・」

お前が、甘く囁くたびに。

お前が、愛を語るたびに。

吐きそうなほど。

俺の中の俺が。

悲鳴を上げる。

言葉はとても簡単で。

言葉はとても、重くて。

だから。

俺には、覚悟がないんだ。

覚悟が、足りないんだ。

「・・・言葉も信じれねえ・・・。好きになる、覚悟もねえ・・・」

言葉だけを信じて。

あなただけを、素直に愛せたら。

何て幸せだったのかしら。

素直に言葉を信じるには。

祐馬は、言葉を信じられないような、恋しかしてこなかったから。

嘘を囁くことも。

相手を喜ばす言葉も。

祐馬はよく知っている。

だから。

だから。

ソウの言葉の真意がはかれなくて。

まるでゆつくりと底なしの沼にハマっていくように。

抜け、だせなくて。

息すらできなくなつて。

結局。

ソウに、あんな顔をさせてしまった。
それだけが、後悔。

自分が、初めて。

好きになれたかもしれない相手への、最後の後悔。

いつの間にか。

祐馬の頬に、涙の筋ができる。

「・・・不器用な、子だねえ・・・」

ぬぐっても。

ぬぐっても。

「どうしてお前たちは、そんなに臆病で。自分勝手に。相手の思いに気付けないんだろうねえ・・・」

嫌味ではなく。

優しい、優しい口調。

「だから私達は・・・お前達が愛しくて・・・しょうがないんだろ
うねえ・・・」

吐き出してしまった思いに。

祐馬は自分で傷つく。

認めてしまった、認めたくなかった、自分の思い。

本当は、ずっとずっと、辛くて。
辛くて。

気付かないふりをして。
見ないふりをして。

本当はずっと。

痛いほどに傷ついていたのに。

「辛かっただろう・・・？祐馬・・・」

その、一言が。

「でもねえ、ソウもずっと、辛かったんだと思うよ」

そつと、祐馬の両の手を握る。

その、視界に入ってきたのは。

あの、べにおだった。

「あんた達は、もっと話をしなきゃいけないよ。お互い、相手を傷つけないように、自分が傷つかないようにって行動するから、結局お互いが傷つくんだ」

「ねえ、祐馬」

ゆつくりと、べにおは口を開いた。

「本当は、どうしたいんだい？」

すべてを、抜きにして。

いつさいを、考えずに。
ねえ。

そうしたら。

あなたに残る、思いは何？

「覚悟が・・・欲しい・・・」

人を愛する、覚悟が欲しい。

あなたを、好きになるために。

あなたを。

好きになるために。

その言葉に。

ゆっくり、べにおは微笑んだ。

（続）

第36話 秘密の花園・6（後書き）

どこまで続くよシリアス調。なんて。雰囲気ブチ壊しのあとがきです。ようやく、ソウ×祐馬編の先が見えてきましたね。つーか、祐馬にのみ焦点あたりすぎだなあ。あはははは・・・！！はあ。そして。べにお様再来。どうなる次回・・・！つーか、笑顔の下に、みんないろんなモノ抱えすぎやっちゅーねん（笑）こと恋愛に関して臆病ものばっかやん。まあ、人間らしくていいじゃないってことで（綺麗にまとめてみました）

第37話 秘密の花園・7（前書き）

間があいてしまって申し訳ないです。花園続編です！何だかスランブっちゃって、ようやく書けましたよ（お前にそんな繊細なものがあるのか）っーわけで。お待たせいたしました！どぜ！本編へ！

第37話 秘密の花園・7

本当はずっと。

本当は、ずっと。

「さあ、今度こそ。本当の決断の時だよ。裕馬」

ぐにやりと周りの空間が歪む。

「元の世界へ戻って元の生活に戻るか…あちらの世界へ行って、ソウともう一度やり直すか…」

「どう、する?」

べにおの言葉が、頭の中を反芻する。

祐馬の瞳に、迷いはなかった。

「僕、こっちに帰ってこようかな・・・」

「ここに?」

ソウは、少し儚げにそう言った。

「うん・・・」

「もう、疲れちゃった・・・」

人を愛することに。

貴方を、愛することに。

「・・・それも、いいんじゃないかしら」

母は、静かに応えた。

「貴方は、この家の名取にもなれるのだし。何の肩書きもない外来のものと苦勞して一緒になる必要はないわ」

もう冷めてきた紅茶を含んで。

「貴方と一緒にになりたいと思う子は、他にもたくさんいるのだし」

「辛い恋なら、終わらせればいいわ」

ソウは俯いて。

静かに、うなずいた。

「ソウは・・・!？」

息を切らして。

その場にまさしく、登場したのは。

花園にいるはずの、祐馬。

「・・・祐馬くん・・・?アレ?どうしてここに・・・?」

突然の祐馬の登場に、驚いた様子のリアンとバニー。

珍しく、リアンが目を丸くして言う。

「帰って来たんだよ!あそこから!..」

確かに。

帰ってきたらしく。

ちよつとひどい格好だ。

あのジャングルのような場所に行ってきたのだから、仕方ないといえは仕方がないが。

祐馬が通ったあとの掃除のことを考えると、少しげんなり（どうせお前はしないだろう）

「あ、そう？で、どうだった・・・」

「で、ソウは!？」

リアンに有無を言わせず。

どうやら、ひどく慌てているようだ。

いつもの鷹揚さが、今の祐馬にはない。

「ここにはいない。実家に帰ってるみたいだが」

祐馬に、バニーが応える。

「実家・・・？」

祐馬の瞳に、動揺が走った。

「どうしたのさ。祐馬くんらしくないねえ。ソウならすぐ帰って」

「・・・何も、ないんだ・・・」

「え？」

祐馬は。額を押さえながら。

その場に、へたり込む。

「あいつのもの、みんな・・・なくなってたんだ・・・」

声が、震えている。

ようやく、覚悟ができたのに。

ようやく、貴方を。

好きになれると思ったのに。

否。

ようやく。

この思いに。

気付けたのに。

貴方は。

もう。

「ソウは・・・俺を・・・」

「おいていったんだ・・・」

リアンとバニーが顔を見合わせる。

祐馬は小さく。

すいませんでした、と言うつと。

その場を去っていった。

く 続 く

第37話 秘密の花園・7（後書き）

先が見えてきたといった矢先にこれかい。まったく先が見えてねえよ。オイ。と、自分でセルフツツコミ 相変わらずどこまでも雰囲気プチ壊しなあとがきですね。ウフ。今後の祐馬の動向が気になります（オイ）

遅くなりました。メッセージにお返事 知者猫様。たぶんアリスへのコメントだと思うのですが。恋ってええな〜 と思って読んでいただけで嬉しいかぎりです♡愛の国、ですから（力説）！！まあ様番外編みて、本編を見てくださったそうで。こんなに続いている話を読むのは大変だったと思います。めげずに読んでくださったうえ、ハマっていただけ大変嬉しいです こ、こんな痛かったりばかばかりだったりするアリスですが、皆様、これからもよろしく願いたします！ペコリ。

第38話 秘密の花園・8（前書き）

長らくお待たせしてしまつて申し訳ございませんでした・・・！ちょっとオフのほうを立て込んでいまして・・・！ようやっと続きを。

第38話 秘密の花園・8

「それって、修羅場ってこと？終わってたってこと？」

焼きたてのアップルパイを頬張りながら。

リアンは、人事のように言った。

いや、まあ。

人事なんですがね。

「どう、なんででしょうか。でも、屋敷からソウさんの物が一切なくなっていたと言いますから……」

言いにくそうに、マスター。

「……捨てられたってこと」

納得、とリアン。

「そ！……そこまでは……」

そのリアンの言い方に。

マスターが反応する。

「だってそうじゃない？でかけて帰ってみたらもぬけの殻なんて逃げられたとしか考えられないじゃん」

もぐもぐと。間で紅茶を一気飲みしながら。

「……！！リアンさん！！」

マスターは、さすがに、とリアンをたしなめる。

だって。

この場には。

「いいんです。マスターさん……。本当の、ことツスから……。表情を強張らせながらも、笑顔を作ろうとしているのは。」

祐馬だった。

リアン、マスター、祐馬。

3人で、小さなテーブルを囲む。

「・・・あのさあ？祐馬くん」

につこりと、リアン。

「・・・はい？」

「アンタ、ここで茶饮んでる場合じゃないでしょうが~~~~~」
・！！！」

花園から帰って来た祐馬を待つ人は。

もう、いなくて。

呆然と。広い屋敷のすみずみまで見て回って。

ソウの。

匂いのするものが、何一つ、残っていないことを知って。

一晩が、過ぎた。

長い長い、夜だった。

そういえば、こっちに来てから一人で夜を過ごすのは初めてだなあつと、まるで人事みたいに思ったりして。

何だか。

笑えた。

心が、ザワザワする。

ザワザワ、する。

そして。

事を知ったマスターが心配して。

リアンを連れて朝から来てくれたのだ。

リアンは昨日から。

事は知っていたのだけれど。

「はは、そうッスよね」

リアンの叫びに、ようやくと。

笑顔で祐馬は答えた。

「ははって、アンタね!!」

笑ってる場合!?

「・・・俺、ソウを迎えに行こうと、思っんです」

身を乗り出すリアン。

それを止めようと、マスター。

もろともせずに、いきなり、祐馬。

その瞳に。

迷いはなく。

「どうなるかわかんないですけど・・・」

祐馬は、一口、紅茶を飲むと。

はぁ、っと息を吐いて。

「生まれて初めて」

「あがいてきます・・・」

欲しいなんて思ったことはなかった。

いつも、向こうから始まりは来て。

いつも、時期になると終わりは来ていて。

すがったことなんてないし。

追いかけたことなんか、ない。

追いかけて、すがってまで。

誰かを引き止めたいなんて。

思ったことなかった。

「・・・」

リアンは、無言でマスターの止める腕を振り払うと、祐馬の前ま

で歩み寄る。

リアンと、祐馬の視線が交差する。

「・・・リアンさ・・・」

リアンを呼ぼうとしたその声は。

かき、消された。

「絶対大丈夫だから！ちゃんと、ソウを連れ戻してくるんだよ！」
温かい、それが。
リアンの胸だと。
気付く。

「リアンさん・・・」
マスターの、驚いたような、涙ぐんだような声が聞こえる。

「ここは、愛の国なんだから！」

「俺だって、うまくいったんだから・・・」

リアンは、祐馬を見据えて、そう言った。

その言葉に。

2人は、笑った。

その日の午後。

「馬車に乗ってたら、ソウの実家まで運んでくれる手配だから
てきぱきと。

馬車を手配して祐馬を乗せる。

ええ。

例のあの、かぼちゃですね。ハイ。

ひ、一人で乗るのか・・・！
これに・・・！！

いささか不安を覚えながら。
馬車の座席に腰を下ろす。

馬車が、ゆっくり動き出す。

小窓の外では、リアンとマスターが見送ってくれている。

ふと、顔をあげると。

クイーンと、バニーが視界に入った。

“ 言っ て 来 い ”

そう、クイーンの唇が動いて。
バーは、控えめに手を振る。

ああ。

ここは。なんて。

「っ……いつてきます……!」

涙が出るくらい。

優しい場所なんだろうか。

どうして。

気付かなかったんだろうか。

どうして。

大切なものはいつでも。

なくさないと、その大切さに。
気付かないのだろうか・・・。

馬車の中でようやく。

祐馬は。

ソウを思って、泣いた。

～ 続 ～

第38話 秘密の花園・8（後書き）

リアンは、どこか自分に似ている祐馬を、実はきつと。一番心配しているんじゃないかと（笑）自分みたいになつて欲しくないって、思つてるのかもしれませんが。去つた人を追いかける勇氣は、並大抵の勇氣じゃないと思います。祐馬の足元は、きつと今ガクガクでしょうね（笑）！がんばれ！祐馬！！私がハラハラしながら見守つてどうする（笑）

第39話 秘密の花園・9（前書き）

なかなか続きが書けない。ソウと祐馬を思うと、愛が苦しいよ。愛くるしい？ いやいや。何言ってるの。大変遅くなって、すみませんでした・・・！では、続きをどうぞ！

第39話 秘密の花園・9

子供みたいに、馬車の中でうずくまって

どうしようもなく、体が震える。

思い浮かぶ考えは、最悪の結果ばかりで

なぜ、来てしまったのか。
帰ろうよ。

なぜ、あがいてるのか。
らしくない。

なぜ。

なぜ。

こんなにも。

あなたを思うと胸が苦しい？

こんな感情、知らない。

こんな恐怖、知らねえ。

なあ、ソウ。

お前は、ずっと。

こんなきょうふとたたかっていたのか？

馬車からのぞいた外界には。
街が見え始めていた。

「……かあさま……」

うんざりしたような、ソウの声。

「あら、ソウ、なあに？」

ここにいるはずのない自分の息子を見つけて、かの人は少し驚いたような顔をする。

「いいかげんにしてください……！僕は種馬じゃないんですよ！？」

いきなり、何を言い出すか。

「いや〜ん。ソウつてば、怒らないでよ。だって、ソウ、振られて傷心中でしょう？だからかあさま、ソウの好みそうな貴族の息子さん達になぐさめてあげてっってお願ひしたのよ。そうしたら……」

「いったい……！何人に声をかけたんですか……！？」

そのソウの言葉に、指折り数える母。
すいません、すでに両手使ってないですか？

その母の様子に、大きくため息を吐きながら。
母の座るソファの対面に腰掛ける。

「疲れちゃった？」

小首をかしげて、母。

「そりゃ、いくら好きな方々とはいえ、今日だけで5人も6人も相手
をすれば、疲れますよ・・・！」

うんざりしたように、ソウは吐き捨てる。

「いや〜ん、ソウってば、罪作りねえ」

それに反し、楽しそうな母。

「いいじゃない。別に」

「バニー様の元へ行くまでは、それこそ、うちの息子は種馬だった
かしら？ってほどの遊びっぷりだったんだから。もとの生活に戻っ
ただけでしょう？」

にこやかに、とんでもないことを言う。

ソウは、バツの悪そうな顔をするだけ。

「でも・・・簡単に、体を開くんですね・・・」
ボソリと、ソウはつぶやく。

「貴方ほどの地位にいれば、取り入ろうとする輩が多いのは当然で
しょう？」

さらりと、核心をつかれる。

「・・・そんなの・・・誰も、本当の僕なんて見てないじゃないですか・・・」

空を見る目に、涙が滲む。

ああ。

自分は

何をやっているのだろうか。

「でも、恋の痛手には、恋だと思っわ。探せばいいのよ。これから」

「身が焦がれるような、恋の相手を」

身が焦がれるような恋なんて。

これからすることがあるのだろうか？

目の前にいる青年。

にこりと微笑むだけで、赤くなつて俯く。

手を差し出して触れれば、抵抗せずに受け入れる。

今まで、ずっと、そうだった。

貴方だけが、俺を拒んだ。

時間をかけて。

貴方に合わせて。

柄にもなく、たくさん、たくさんたくさん。

愛を叫んだ。

貴方は、振り向きもしなかったけれど。

何人目かわからないその行為は。
すでに、感情など入っておらず。

ただただ、貴方を思って貪るように。

貴方を思って、涙が出た。

「何の、イベント・・・？」

馬車が止まり。

目的地だと思い、降りたそこには。

ガタイのいいお兄さん達の。

列ができていた。

呆然と、その列を見やっていると。

「おやおや、また追加かい？ いやいや本当に、どこまでも増えるな
あ」

小人のような、小さな男。

どうやら、列の整理をしているらしい。

「で？ 君は、どこの家の子だい？」

「・・・え？ どこって・・・？ それより・・・、この列って・・・
？ 俺、ソウに会いに来てただけなんだけど・・・」

そう言うが早いのか、その小人は、思い切り祐馬の脛を蹴る。

「・・・ツ！？」

突然の痛みに、声もなくうずくまる祐馬に。

「たわけ！！ ソウ様を呼び捨てにするとは何事じゃ！！」

ああ、そうか。ソウは名家の出だったな、と。今更ながらに、いきなり呼び捨てにしたことを後悔。

「だいたい、列の意味も知らずに来たのか？この列は、ソウ様への求婚者の列なのだ」

「きゅ、うこん・・・？」

心臓が、バクバクと音を立てる。

「ソウ様は、結婚相手をお探しなのだ。この列は、ソウ様に求婚をするための順番待ちの列なのだ」

世界が、違う。

「そのようなことも知らずに来るとは！お主、いったいどこでソウ様のことを知った」

世界が、違いすぎるんじゃない、ねえ？

「下賤な者を、ソウ様に近づけるわけにはいかん！！」

アタマを。

殴られた気分だよ。

ソ
ウ。

）
続
）

第39話 秘密の花園・9（後書き）

あとがきが入ってなかった……。ガーン。もういろいろショックだ（笑）結構熱く語ったあとがきが消えて……。ハハハ。思い出そう。うん。何だか、まだ暗くなるのか、この話。祐馬の思いも、ソウの思いも痛くてかないません。ヤラレ気味。あゝチクシヨウ。考えてると泣きそうだよ！泣かないけど！！（笑）何て可愛いんだ！お前達！自分のキャラにツッコむなってね（笑）この子達の思いが、うまく伝えられるだけの文章力がないのがすごく悔しい……。ギリギリ。この子達のこの思いが、少しでも伝わっていれば幸いです。

第40話 秘密の花園・10（前書き）

この話で、ざつと本編は40話になりました……。えっと、な、長くなってしまったなあ……。秘密の花園も、もう10話になる。皆様、いつもお付き合い、本当にありがとうございます。ここまで続けることができたのって、奇跡だなあ……。（しみじみ）

第40話 秘密の花園・10

人を好きになるって。

覚悟なんだな。

何ものに変えても。

貴方を愛するということ。

「とりあえず、ここで大人しく待つとれ！」

案内されたそこには。

きらびやかな世界。

一目見れば、その彼等が纏っているものがどんな品なのかがわかる。

いろ、とりどりの、世界。

10人ほどの青年が、その場にはいた。

どの青年も、自分と同じくらいか、または自分よりも雄雄しい体をしていて。

しかも、何とも育ちのよさそうな。

何で、俺は、ここにいるんだ・・・？

初めて、自分を恥ずかしいと、思った。

決心が、足元から崩れそう。

祐馬は、震える足で、その場に踏みとどまる。

「次はね、ソウ。いわゆる、合コンよ」

母は、しごく嬉しそうに言う。

「はいはいはい。もう、好きに付き合いますよ」

ソウは、疲れたようにぶーっと頬を膨らましながら母のあとをついていく。

「ヨウ様」

2人で歩いていると、執事が声をかけてくる。

「？どうしたの？お客人は集まって？」

にこやかに聞き返すヨウ。

ソウを先に促す。

「・・・妙な輩が、混じっております」
「妙な？」

小声で、その執事は続ける。

「まるで、そこらへんのガキ、といった人間が1人混じっているのですよ」

「・・・あらあら、何でそんな子を入れたの？」

「それが・・・馬車に乗って来ておるのですが、その馬車がどうも王家のもののようにして・・・」

「王家の？」

「はい」

ソウの母親は。

しばし、考えた後。

「その子を、連れておいで」

「くれぐれも、粗相のないようにするんじやぞ！」

そう言つて、突き飛ばされるかたちで入れられた部屋にいたのは、思い人の、面影のある、人。

「・・・」

祐馬は、入れられたその部屋に。

その人を見て、呆けたように固まった。

「貴方の名前は？」

ぼうつと眺めていると、その人はくすりと笑つてそう聞いた。

「え・・・？あ、せ、瀬戸祐馬です・・・！！」

祐馬は、自分が見惚れていたのだと知つて、真赤になつて答えた。

「・・・そう、貴方が祐馬さん・・・」

「私は、ソウの母のルカと言います。息子が、向こうではお世話になつたようで・・・」

深々と頭をさげる。

「あ、あの・・・！そんな、やめてください・・・！お、俺は・・・」

俺は・・・。

「それで？ここへはどのようなご用件で？」

祐馬が、その言葉にドキリとする。

言わないといけない。

伝えないと、いけない。

「ソ、ソウに・・・」

「ソウの婚約者を、見にいらしたの？」

「・・・え・・・？」

にこやかに、微笑みながら。

その人は、祐馬の手をとる。

「あの子、向こうで失恋をしたらしくて。失恋には、新しい恋だと思いません？」

その瞳は、実は。

「あの子にふさわしい、地位の方との、ね？」

笑っては、いなかった。

祐馬は、ヨウから目が離せず。
手を、払うこともできず。

「祐馬さんは、賢そうな方ね」
くすり、と笑う。

「私の言いたいこと・・・おわかりに？」

「わか……りません……」

祐馬の口から漏れたのは。

小さな。

小さな、勇気。

「……なんて？」

「ソウを、ソウに……会いに来たんです……！ソウに、会わせ
てください……！」

初めて。

手に入れたと思ったんだ。

ソウのことを、ソウの家族のことを考えたら……。

絶対に、してはいけないことなのだろうけれど。

それでも。

それでも。

ただ、ただ。

貴方を……。

「貴方は、ソウの思いには答えられないのでしょうか？それなのに、
今更あの子に何の用があるんです？」

「あの子を、これ以上、傷つけないでいただきたいわ」

きりっと、祐馬の手を握る手に力が入る。

「きず．．つけません．．．。俺、俺は．．．」

「ソウが、ソウのことが．．．」

「好き、なんです．．．！」

言葉が、溢れて。

溢れて。

うまく、カタチにできなくて。

ああ、ソウ。

お前のことが、好き、なんだ。

ああ、駄目だって、わかっているのに。

このまま、立ち去ればいいと、わかっているのに。

なぜこんなに涙が出て。
なぜこんなに。
なぜ。

この場にとどまってしまうのだろうか。

「好き、なんです・・・」

足元から、崩れ落ちそうな、恐怖。
どうして。
どうして。

どうしよう。
どうしよう。

ようやく、言葉にできたのは。

何とも陳腐な、愛の言葉。

「・・・そうですか、と、渡すわけにはいかないって、貴方もよくわかっていてでしょう?」

声はどこまでも、明るく。

まるで笑みでもたたえているようで。

「バニー様の婚約者になるくらいの家系なの。うちは」

「貴方じゃ、ソウにはふさわしくないの」

この世界の王の息子。

その、婚約者。

それが。

この世界の住人でも何でも無い、王家との関わりすらない自分と。

共に、歩いていくなどと。

それは、大それた、夢?

「だから・・・帰ってちょうだい?」

きつちりと。

くつきりと。

その拒絶の言葉は。祐馬を侵食して。

その瞳の色は。

どこまでも。

祐馬を突き放す。

「貴方が譲れないように。私も、譲れないのよ？」

子と思う、貴方の心が。

イタイほどに。

「すいませ・・・すいません・・・」

貴方の気持ちは。

イタイほどに。

わかるんです。

わかって、いるんです。

「すいません・・・すいません・・・！」

「それでも・・・俺も・・・」

ああ。

アリス。

今なら。

おまえのきもちがよくわかる。

「ソウを・・・譲れないんです・・・」

思いよ。

お願い。

この思いよ・・・。

伝えれ。

「・・・母様は？」

いいかげん、愛想笑いにも疲れた。

一緒に来るはずの母は一向に来ない。

どうしたものか、と。

ソウは、執事呼んで問うた。

「ヨウ様はまだで？」

執事は、まだあの下賤な者と・・・？とブツブツ言っている。

「・・・？下賤な者？」

「はあ。身なりのしゃんとしない童が一人混じっておりましてな」

「ふうん」

興味なさそうに、ソウは答える。

大方、どこかの下級貴族の子息か何かか。

どうでもよさそうな、ソウに。

「まあ、今にヨウ様が追いつ返しになるでしょう。あのような者、ソウ様には無相応です。」

「いくら」

「王家の馬車に乗って来た者とはいえ・・・」

その言葉に。

ソウの顔から。

表情が、消えた。

）
続
）

第40話 秘密の花園・10（後書き）

もう1、2話で、ソウと祐馬の話は完結すると思います。いきなり嫁姑戦争から始まってますが（笑）ソウと、祐馬の今後をお楽しみに・・・。

そして、今後のことです。

アリスは、とても皆様に愛していただいて。ここまで長期に渡って書かせていただきました。すごくありがたいことだと。いつも感謝しております（それがまったく反映できてないのが悔やまれるツス）。アリスな話！ですが、ソウと祐馬の話が完結後、バニーとアリスのお話を入れて連載終了とさせていただこうかな、と思っています。番外編を、また短編なりで本館で書かせていただくかもしれません。ケジメとして。一度くぎろうかと思っています。もうしばらく。皆様、アリスにお付き合いいただけると嬉しいです。本当に本当に。いつも温かく見守っていただけて、感謝の気持ちでいっぱいです！連載終了にあたり、また感謝祭も企画するつもりですので！皆様、そちらもお楽しみに！！では！秘密の花園・11でお会いしましょう！！

第41話 秘密の花園・11（前書き）

どうにもこうにも進まず・・こんなに間があいてしまいました。待
っていてくださった皆様、スイマセン・・！どうにも、ソウと祐馬
の2人は難しいらしいです。orzようやく書けました、花園11
お楽しみください！

第41話 秘密の花園・11

「今・・・何て言った・・・？」

ソウは、大きな瞳を。さらに大きく開いて。その執事へ、静かに問うた。

「は？ええつと・・・今に、ヨウ様が・・・」

「違う。その後だ。王家、の・・・？」

ああ、と、執事は思い出したかのように。
それを伝える。

「王家の馬車に乗ってきたとはいえ。あのような者、ソウ様には不釣合いでしょう。身なりも、身分も、そして、態度も不相応ですからなあ」

その口が、よく動いて。紡ぐ。

「どんな・・・人だったの？」

心臓が、まるで。

爆発しそうだ。

「短い髪をした・・・がっちりしたタイプの青年でしたよ」

外見だけなら、ソウ様のお目かねにかかるかもしれませんね。
そう、執事は。
何も知らず、笑った。

その場から、どう出たかなんて。
覚えていない。

ただ。

ただ。

「祐馬さん……!!」

口を出たのは。

諦めた、あの人の名前。

「お願いです……。ソウに、会わせてください……。！」
大切なことを
まだ。

俺は、一切、伝えてないんだ。

「ソウに、伝えたいことが、あるんです……。」

もし、この想いが報われないのならば。

それはそれで。

仕方のないことなのだ。

諦めて、しまうから。

ただ。

お願いだから。

この想いを……。

「……強情な子ね」

「諦めるわけに……。いかないんです……。」

ようやく。

覚悟ができたんだ。

ようやく。

知ることができたんだ。

なりふりかまわず。

人を愛するということを。

自分の生きた、世界を捨てた。

誰かのためにここまでするなんて。

自分でも意外すぎて、笑えてくるくらいだ。

だから。

だからこそ。

怖いものなんて。

何もない。

「ソウは、どこですか？」

「・・・教えるわけにはいかないわ」

祐馬と、ヨウの瞳が交差する。

しばし。

二人の間に重苦しい緊張が走る。

ボタン

突然、扉が大きく開く音がして。

視線と、視線が交差した。

だいぶ、長い間。

会っていなかった気がする。

肩で息をしながら。

眼前に立つのは。

「……ソウ……!!」

ああ。

ようやく。

貴方に会えた。

「ゆ、祐馬さん・・・？」

思い切り、ソウを抱きしめた。

その祐馬の行為に、驚いたような声をソウが上げる。

「ソウ、ソウ・・・！」

言いたいことが、あったんだ。
伝えたいことが、あったんだ。

それなのに。

出てくるのは。

貴方の名前だけ。

「ど、どうして・・・ここに？」

ソウは、おずおずと祐馬の背中に腕を回し子供をあやす様に背をなでる。

祐馬は、ソウの肩口に顔を埋め。

小さく震えている。

「お前が・・・好きなんだ・・・」

うめくような、小さな声。

「ようやく、覚悟ができたんだ・・・」

静かに、祐馬の口から出たのは。
ずっとずっと。

聞きたかった、愛の言葉。

ずっと、お前を傷つけてきた。
ずっと、見ないふりばかりしてきた。

ずっと。

ずっと。

無条件にお前は俺の傍で、愛を語ってくれと思ってたんだ。

「・・・ゆ、ま・・・さん・・・？」

ソウの瞳が大きく見開かれ。
その瞳に、涙が溢れる。

「俺を、好きでいてください」

初めて紡ぐ、本当の、愛の気持ち。
初めて伝える、本当の、言葉。

「・・・はい・・・！」

泣きながら、二人はしばらくその場で抱き合っていた。

強く、強く抱き合って。

その腕を。

離すことなく。

～ 続 ～

第41話 秘密の花園・11（後書き）

ようやく会えた2人。次で最後の予定です。だんだん・・・祐馬が祐馬じゃなくなっていく気がするのは私だけでしょうか・・・（遠い目）次の話は、ずっとシリアスが続いたぶん、明るくいききたいですね！長ったらしくなっちゃった2人の話にお付き合いくださいまして、本当にありがとうございます！もうしばし、お付き合いのほどを・・・。

第42話 秘密の花園・12（前書き）

ようやく、完結しました。秘密の花園。オンもオフも立て込んで、まさかの170日以上の変更停滞ッ・・・！すみません・・・！ともかくにも、本編へどうぞ！

第42話 秘密の花園・12

愛なんて、一度語ってしまえば。

ああ、なんて、心が軽くなるのかしら。

貴方の腕の中にいれる喜びを知ることが、こんなにも。

心地いいことだなんて、思わなかった。

二人きりになった部屋の中で。

同じソファに腰掛けて。

絡まる指先から感じるのは、むずがゆいほどの、温かさ。

「・・・あー！ー！ツ・・・！！！恥かしいッ！！！」

そこに、突如大きな声を出したのは、祐馬。

「ゆ、祐馬さん？」

それまで、会話も少なく穏やかな空気が流れていただけに。

突然叫んで顔を覆う祐馬の挙動に、ソウは心配そうに祐馬を見やる。

「お、れは・・・！今までこんなことしたことねーんだよ・・・！自分がマジありえねえ・・・！！！」

よくよく見ると、その大きな肢体を丸めて、顔を膝にうずめた祐馬の。

その耳も。

その首筋も。

微かに見えるその頬も。

見たことのないほどに赤くなっていた。

「こ、んな。家まで乗り込んで、母親相手に啖呵きるとか・・・う、わああああッ・・・！」

今までの自分の行動をようやく冷静に思い返し、祐馬は狂ったように叫びだす。

「・・・フフ、嬉しいなあ、祐馬さん。僕のためにそこまでしてくれましたよね？」

見も知らない土地に。

一人でやってきて。

ただ一人、自分のために。

愛を、語ってくれた。

それだけで、もう、舞い上がってしまいそうなほどに、嬉しい。

「・・・そ、いうわけ、じゃあ・・・」

モゴモゴと、心地悪そうに祐馬はもった。

ガラじゃねーんだよ、と、祐馬は言う。

そんな祐馬の様子に、ソウはどこまでも上機嫌だ。

「・・・でも、よかったの、か？」

ふと、それまで照れたような、困ったような表情だった祐馬がその瞳に影を落とした。

「え？何がですか？」

「・・・お前は・・・バニーの、妻になれるほどの・・・家柄の人間、なんだろう？あそこまで啖呵きつといてなんだけど、さ。おふくろさん、とか・・・どうすんだ？」

自分の、エゴだと、思う。

ソウの可能性を、自分は潰したことになるのではないだろうか。

もっと、いい出会いがあったかもしれない。

バニーでなくても、それなりの良家の人間と結婚し、この家を繁栄させていくことのほうが、もしかしたら最良の道だったのかもしれない。

感情的になっていた自分。

しかし、ふと我に返ると、そこに立ちはだかるものは、壁だ。

大きな、大きな、壁。

「・・・僕は・・・貴方がいいんです」

そんな祐馬の背を、そっとソウは撫でた。

「バニーさんでもなく、他のどんな人でもなく」

その手は、祐馬の頬を、捕らえ。

そして、自分のほうを向かせる。

「貴方が、いいんです」

その瞳は。

優しく、祐馬を捉えた。

だれでもなく、私の身を焦がすほどに捕らえたのは、貴方。
何ものをも投げ捨ててでも、傍にいたいと思わせたのは、貴方。

他のだれでもなく、貴方が。

ただ。

ただ。

愛おしいんです。

「・・・お、れは・・・男、だぞ・・・」

その、瞳からは、再び涙が溢れた。

「知ってます」

きゅっと、祐馬の手が、ソウの手に重なる。

「俺は、お前より、ガタイもいいし・・・」

「そこが可愛いんです」

「・・・この、住人、でも、ないし・・・」

「今はここの住人です。・・・これから、ずっと」

「・・・良家の、人間でも、ねえ」

「名前だけで、好きでもない相手と一緒になるのなんて、ゴメンです」

「それに・・・」

「生涯、一緒にいたいと、思った」

まだ、何かを言おうとする祐馬を遮って。
ソウは、言った。

「僕は、貴方が、いいんです。そう思ったのは、貴方が初めてです」
ちゅっと、その唇に、キスを落す。

「祐馬さんじゃないと、嫌なんです。僕の、お嫁さんになってください」

ああ、もう、駄目だ。

ボロボロと、涙が頬を伝って。

祐馬は、ソウに抱きついた。

その腕を、心地よいと感じながら、祐馬は眠りに落ちた。

「・・・その子を選ぶの？ソウ」

どのくらい時間が経ったのか。

静かに時の流れるその空間に、ヨウがいた。

立ち入ることのできない、その再会の場面に一度は席をはずしていたヨウだったが、確認をすべきことを聞きに戻って来たのだ。

「はい」

曇りのない表情で、ソウはヨウにそう言った。

その膝の上では、小さく祐馬が寝息を立てている。

「・・・意思是、かわらなそうね・・・」

ふうっと、ため息をつきながらヨウは言った。

「変わりませんよ・・・ようやく、手に入ったんですから」

嬉しそうな、ソウの姿。

これが、さっきまでこの世のすべてを諦めたような表情をしていた人物と同一人物だというのか。

それほどまでに、この子は。

「・・・まったく、この私に正面きつてたてつく子なんて、初めてよ」

苦笑交じりに、ヨウは祐馬を見下ろす。

「フフ、素敵でしょう？ 僕の祐馬さんは」

「そうね」

ふっと、ヨウも笑む。

「これだけは知っていて？ ソウ」

ヨウは、ソウの額に、そっと口付けをした。

「私は、貴方が幸せであればそれでいいの。どこの誰と結婚しようと、どこで暮らそうと、そんなことはどうでもいいの」

ただ、望むことは。

「幸せに、おなりなさい、ソウ」

貴方の、幸せ。

「・・・母様・・・」

思いがけない母の言葉。

それに、力強くソウはうなづいた。

その様子を見ると、ヨウは満足そうにその部屋を後にした。

「元気に、暮らすのよ？」

翌日、ソウと祐馬は元の屋敷へ帰る事にした。

きつと、みんなが心配しているだろうから。

見送りに来たヨウは、ソウの手を取ると、そう告げた。

「ええ、母様も」

その横で、祐馬は一人青くなって今にも震えだしそうになっていた。

感情に任せて、啖呵をきってしまった相手を目の前にして、うまく対処ができるほど祐馬は大人ではない。

しかし、これから一緒に暮らしていくソウの、母親と何も会話を交わさないわけにはいかない。しかも、仲が悪い、などもつてのほかだ。

一人、どうしようかと俯いて考えていると。

「祐馬さん」

ヨウは、祐馬へと向き直り声をかけた。

「は・・・はい・・・！」

とりあえず、まずは昨日の非礼から詫びるべきだろうか、などと思考を巡らせていると。

「ソウを、よろしくお願いしますね」

「・・・え・・・？」

「ふふ・・・昨日は意地悪をしてごめんなさいね」

ヨウは、その瞳を細めて、笑った。

「また、こちらにも遊びにいらしてね？ここは・・・貴方の戻るべき家でもあるのだから」

その、言葉の。

意味するものは。

「あ、りがとう・・・ごきます・・・！」

一瞬、その意味がわからず、祐馬はきよとん、とし。

ついで。

その言葉の意味を、理解すると。

泣きすぎて、枯れ果てたはずの涙が。

また、湧き上がる。

「もう、祐馬さんってば、泣くのはベッドの中でだけにしてください
い」

ソウが、笑う。

「お、おま・・・！！」

「あらあら、いいわねえ、若い人は」

その場の空気が、たゆたゆと、揺れた。

「それじゃあ、母様、また！」

「ええ、楽しみにしてるわ」

二人は、馬車に乗り、その場をゆっくりと離れる。

来る時は、あんなにも怖かった場所。
来る時は、あんなにも遠かった、場所。

祐馬は、窓の外を見やり、その風景を眺める。

「・・・いろいろ、あつたなあ・・・」

しみじみと言う祐馬に。

「そうですね」

ソウが、答える。

静かに、馬車は揺れながら。

二人を、運んだ。

「だから、追い出されたんだって！」

そして、所変わって。

「・・・追い出されたあ？」

公館。

その場にいるのは。

優雅にお茶をすする、クイーン、リアン、バーニ。

そして。

まさしく、難民状態、なアリス。

「そうだよ！何かよくわかんないけどさあ、まだ早い！！ってあの二人に追い出されたんだよ・・・！」

そして、なぜだか・・・。

「・・・しつかし・・・ぷぷ・・・あの、二人のおめがねには、適ったみたいだねえ・・・？」

そのアリスの額には。

「笑うなよッ!!」

大きな、合格のスタンプが。

「あはははは!だって、笑うっしょ……!検品かつつの!!」
腹を抱えて笑い出すリアンに軽く殺意を覚えつつ。

バニーが、こつちを向いて、アリス。と、汚れた顔を拭いてくれる。

そう。一人花園に残されたアリスくん。

たゆたゆと、お昼寝から目を覚ますと。

『ま、アンタはギリギリ合格ね』

と、ベにお様にペタン、とスタンプを顔に押され。意味がわからず、疑問符を頭上に飛ばすアリスをよそに。

子供はまだ早い、だの、先に結婚だの、とおしろい様と何やら語り合った後、ぺいっと、花園から追い出されたのだ。

「わ、け、わ、か、ん、ねえッ……!!」

バニーに身なりを直してもらいながら、アリスは一人憤慨している。

「ハハ、いいんだよ。それで」

ニヤニヤと、リアンは楽しそうだ。

「はあ?」

「さて、そろそろ祐馬くんたちも帰って来るかねえ……」

リアンは、窓の外を見下ろしながらポツリと言った。

「……そっぴや、祐馬は?」

一人で帰ってきちゃった、などと言うアリスに。

「……幸せだな、お前は」

ポツリと、クイーンは暴言を吐くのだった。

「え!?何が?祐馬が、どうかしたの??」

まったく、状況についていけず、アリスはおたおたと皆の顔を見渡す。

「・・・ゆっくり、説明してもらったらいよいよ、アリス」
整え終わったバニーはそう言うと、窓の外を指差した。

「え？」

「おーおー、いい顔しちゃってー」

リアンが、おかえり！と、窓の外へと叫ぶ。
それを受けて、アリスも窓の外を見やった。
窓の下には。

眩しいほどの笑顔の、二人がいた。

「ほんとにまあ、久しぶりにいい暇潰しだったですわね。お姉様」
「本当だねえ、おしろい」
「あ、そういえば、べにおお姉様、もう一通の手紙は誰からだったんです？」

くるくると、その大きな瞳を動かしながら、おしろいはべにおに問うた。

「ああ、リアンと、もう一通は・・・ヨウからだよ」

「・・・ヨウから？」

「祐馬の相手の子・・・ソウって言ったろう？その子の親なんだよ。ヨウは」

「アラ、そうだったんですの」

「息子が騙されていやしないか心配だったんだろつよ、ヨウも」
ヒラヒラと、その手紙をひらつかせながらべにおは言った。

「良家になればなるほど、恋は厄介なものになるからねえ」
「ですわね」

「まあ・・・あの子たちなら問題はないよ」

「二人とも、合格ですよ？」

「楽しそうに笑う、べにお。」

「まだまだ、青いけどね。私が言うんだ。間違いはないよ」

「愛だとか、恋だとか。」

「振り回して、振り回されて。」

「それでも。」

「それ、でも。」

「誰かを心から愛して、愛されて。
何て、素敵なこと。」

「・・・これからが、楽しみだ」

「そこは、秘密の花園。」

「秘密の、花園。」

「愛に迷ったら、ここへおいで。」

第42話 秘密の花園・12（後書き）

長かった、ソウと祐馬編はとりあえず完結。この次は、いよいよ
バニーとアリスの話へと移ります！・・・頑張ります！！（本気で
な）そうそう、この更新の滞っていた間に、企画を考えたりもして
みました。次作と同じくらいに、うまくいけば・・・と考えており
ます。とりあえずは、新年にかからなくてよかった・・・！次はも
う少し早く・・・！って、いつも言ってる・・・！アリス完結に
向け、もう少しお付き合い頂ければ幸いです・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204a/>

アリスな話！

2010年11月30日03時49分発行